

史跡末松廃寺跡

2019

石川県野々市市教育委員会



史跡全景(北から)



史跡全景(南から)



208「女子像が線刻された土製品」(表)



208「女子像が線刻された土製品」(裏)

目 次

第1章 立地と環境	
第1節 自然環境	1頁
第2節 歴史的環境	1頁
第2章 史跡の沿革	
第1節 史跡の沿革	3頁
第2節 第1期調査の概要	3頁
第3節 再整備事業の経緯	7頁
第4節 第2期調査の経緯	9頁
第3章 道構	
第1節 調査の方針	10頁
第2節 1区	10頁
第3節 2区	13頁
第4節 3区	13頁
第5節 4区	23頁
第6節 5区	26頁
第7節 6区	28頁
第8節 7区	32頁
第9節 8区	34頁
第10節 9区	37頁
第4章 遺物	
第1節 平瓦	45頁
第2節 丸瓦	53頁
第3節 軒丸瓦	53頁
第4節 瓦塔	55頁
第5章 総括	
第1節 調査成果の総括	60頁
第2節 壇穴建物SB8について	60頁
第3節 末松庵寺跡の評価について	61頁
観察表	62頁
写真図版	69頁
抄録	84頁

例　　言

- 1 本書は史跡末松庵寺跡の第2期発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は石川県野々市市末松二丁目である。
- 3 調査の目的は、史跡の再整備に伴う史跡の内容確認である。
- 4 調査は、野々市市遺跡整備委員会の指導の下、野々市市教育委員会文化課が実施した。
- 5 事業にかかる費用は歴史活き活き!史跡等総合活用整備事業補助金および石川県費補助金を受けた。
- 6 現地調査の概要は以下のとおりである。

	年度	期間	面積(m ²)	調査区	担当者	報告書
第1期	第1次 昭和41(1966)	9月23日～10月20日	800	塔、金堂	(調査主任) 高堀 勝喜	村上ほか 2009
	第2次 昭和42(1967)	7月21日～9月4日	1,200	講堂、区画施設	(調査主任) 高堀 勝喜	
第2期	第3次 平成26(2014)	9月10日～12月1日	167	1・2・3・4	田村 昌宏	本報告
	第4次 平成27(2015)	6月15日～12月28日	281	1・3・4・5	田村 昌宏 西村 慎子	
	第5次 平成28(2016)	6月1日～12月21日	230	1・3・4・6・7	田村 昌宏 腰地 孝大	
	第6次 平成29(2017)	5月29日～12月18日	220	3・4・6・7・8・9	腰地 孝大	
	第7次 平成30(2018)	6月29日～11月22日	117	9	腰地 孝大	

- 7 整理等作業および報告書の執筆は腰地孝大(野々市市教育委員会文化課主事)が担当し、田村昌宏(同文化課長)が校閲した。
- 8 現地作業および整理等作業に携わった職員は以下のとおりである。
(現地作業) 井上智子、井村外喜子、菊地由里子、工藤 紗、米谷義浩、永田芳子、西村康喜、新田寿々代、端 琴子
(整理等作業) 浦真利菜、大杉幸江、大西祥恵、川形慧子、菊地由里子、工藤 紗、竹田倫子、野水ひとみ、花田和希
- 9 現地調査および整理等作業において以下の個人に協力を得た。
梶原義実、川畑 誠、小嶋芳孝、菅原雄一、善端 直、知田真衣子、出越茂和
- 10 線刻人物像付瓦塔の鑑定及び写真撮影については、以下の機関、個人の協力を得た。
高妻洋成、柳田明道、脇谷草一郎(以上 奈良文化財研究所埋蔵文化財センター)
中村一郎(奈良文化財研究所)
北澤栄葉、清水 健、内藤 栄、中川あや、吉澤 悟(以上 奈良国立博物館)
- 11 本書についての凡例は以下のとおりである。
 - (ア) 方位は座標北を表し、座標は世界測地系平面直角座標第VII系に準拠している。
但し、グリッド単位での遺物の取りあげの際は、昭和41・42年度調査のグリッドを採用している。
 - (イ) 水準基準は海拔高であり、T.P.による。
 - (ウ) 遺構名称の略号は以下のとおりとした。
竪穴建物・掘立柱建物:SB、土坑:SK、横列:SA、溝:SD、建物柱穴:P
 - (エ) 遺構の番号は、第1・2次調査を踏襲している。
但し、建物については第1期調査を踏襲し、竪穴建物と掘立柱建物は共にSBで統一している。
 - (オ) 遺跡の名称としては「末松庵寺跡」、過去に存在した寺跡を「末松庵寺」と呼び分ける。
- 12 測量に関しては、株式会社太陽測地社に空中写真測量等を委託した。
- 13 調査に関する記録及び遺物は野々市市教育委員会が一括して保管している。

第1章 地理的・歴史的環境

第1節 自然環境

末松庵寺跡が位置する野々市市は、県南部を流れる手取川が形成した扇状地の、標高約37mの微高地に位置している。手取川は白山を起源とする全長77kmの県下最長の一級河川であり、現在は末松庵寺跡から約6km南を西流している。手取川は古くから氾濫が多く、流路を変えた痕跡は用水として整備されている。現在も利用されている手取川の支流を総称して七ヶ用水と呼び、末松庵寺跡はその1つである郷用水系の中流域に位置している。



第1図 野々市市位置図

第2節 歴史的環境

歴史的環境については、「野々市町史」等に詳しい。ここでは末松庵寺跡が立地している手取川扇状地の扇央部における、末松庵寺跡の創建にいたる状況について概観する。

手取川扇状地の扇央部において、縄文時代以前では、末松庵寺跡から北へ約1.5km～2kmに位置している乾遺跡や長竹遺跡で縄文晚期後半の遺構・遺物が確認されているが、野々市市北部から金沢市にかけての扇端部から沖積低地にかけて、御経塚遺跡（国史跡）など縄文後晩期の大規模な集落が営まれている状況と対照的である。

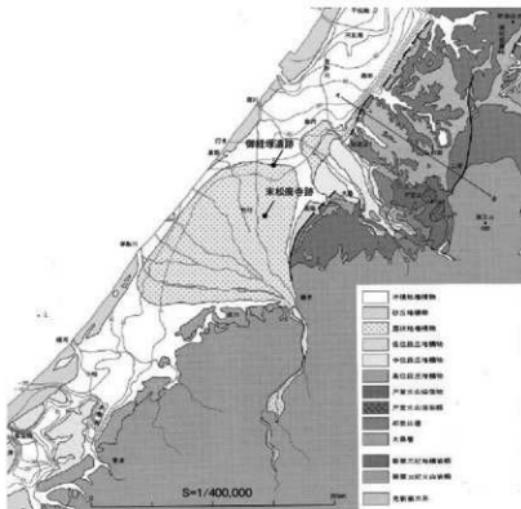
弥生時代に入ても大規模な集落の形成は認められない。弥生時代後期後半から終末期の法仏期から月影期に入ると上新庄ニシウラ遺跡（42）などで遺構及び遺物が確認されているが、存続期間が極めて短い。

古墳時代に入ると、末松庵寺跡から北へ5kmほどに位置している御経塚シンデン遺跡では概ね4世紀代の中ごろであろうと考えられている前方後方墳4基を含む15基の古墳群が形成されている。また、上新庄チャンバチ遺跡（44）では、墳長約22mの前方後方墳がみつかった。時期を特定する遺物に欠くが、御経塚シンデン古墳とはほぼ同時期に位置付けられる。上新庄

チャンバチ遺跡は末松庵寺跡から南東に約2.5kmの位置にあるが、末松庵寺跡とは水系を異にする。

7世紀に入ると徐々に扇央部でも開発の痕跡が増加する。上林新庄遺跡（41）では7世紀前半に築造された横穴式石室の古墳（上林古墳）がみつかっている。

7世紀の中頃以降になると、末松庵寺の建立と関連する大規模集落が徐々に形成される。末松遺跡（29）では近江や丹波系の特徴を持つ土器などがみつかっており、移民系集団が扇状地扇央部の開発に関わっていたことが伺われる。また末松ダイカン遺跡（15）や福正寺跡では7世紀中



第2図 地質図（柏野1993を元に一部加工）

葉から後半の堅穴建物のほか、鉄製紡錘車や絞具などがみつかっている。

おなじく7世紀後半から9世紀にかけては、上林新庄遺跡群で大規模な集落形成が進む。下新庄アラチ遺跡(38)では、条里制を意識した溝に区画された中に、門のような機能を持つ掘立柱建物や仏龕が出土していることなど、一般的な集落とは異なる政治的・宗教的に強く規制された集落の様相を呈する。また、周辺で郡衙などに比定される遺跡はみつかっていないものの、栗田遺跡(36)では方形の掘方を持つ8世紀代の大型掘立柱建物が複数みつかっており、注目される。



第3図 遺跡地図

1	末松庵寺跡
2	幸明遺跡
3	三浦・幸明遺跡
4	幸明おとまる田遺跡
5	三浦常在光寺跡
6	三浦高麗野遺跡
7	上二口遺跡
8	橋爪ガンノアナ遺跡
9	橋爪新道跡B
10	橋爪新道跡A
11	橋爪松の木道跡
12	橋爪B遺跡
13	福正寺ゴメマチ道跡
14	福正寺跡
15	末松ダイカン道跡
16	末松B道跡
17	古元素館跡

18	末松C道跡
19	末松古墳
20	末松船跡
21	大館跡
22	末松砦跡
23	法福寺跡
24	末松しりわん道跡
25	法運寺跡
26	安養寺念仏林道跡
27	清金アガウ道跡
28	末松信濃船跡
29	末松道跡
30	木津道跡
31	上林道跡
32	安養寺道跡
33	下林バンジョウアケ道跡
34	藤平田ナカシングジ道跡

35	三納ニショサ道跡
36	栗田道跡
37	上林イシガネ道跡
38	下新庄アラチ道跡
39	下新庄タカダ道跡
40	上林テラダ道跡
41	上林新庄道跡
42	上新庄ニシラ道跡
43	部入道A道跡
44	上新庄チャンバチ道跡
45	部入道B道跡
46	部入道C道跡
47	熱野道跡
48	新庄カキノキダ道跡
49	下新庄フルナワシロ道跡
50	上林キドグチ道跡

第2章 史跡の沿革

第1節 史跡の沿革

末松庵寺跡の存在については、江戸末期には瓦などが採集されていたことが記録されている。また塔心礎は明治 21 (1888) 年に約 400m 東に位置する大兄八幡神社の境内へ運ばれ手水鉢として利用されている。

昭和 12 (1937) 年には、地元の高村誠孝氏の働きかけによって、金沢第一中学校教諭の鍋木勢岐氏の指導により発掘調査が実施された。その際、金堂基壇の石敷や塔礎石の根石群を検出するなどの成果を上げた。これを受け文部省嘱託の上田三平氏が現地を実見し、昭和 14 (1939) 年 9 月 7 日付で国の史跡指定を受けた。

昭和 36 (1961) 年に高村誠孝氏が金堂西側の用水路から和同開珎銀銭 1 点を採取し、再び注目を浴びた。史跡公園構想が打ち出され、史跡指定地全域の公有化と、整備を行うための発掘調査が昭和 41 (1966) 年度から 2 か年度にわたり実施された（第 1 期調査）。この発掘調査は野々市町（当時）だけでなく石川県教育委員会や奈良国立文化財研究所（当時）、石川考古学研究会など関係機関が一挙に集い、特に昭和 42 (1967) 年の第 2 次調査は国営調査として実施された。この第 1 期調査によって塔の全面発掘と金堂の範囲確認、区画施設や寺院北側の建物群の発見など多くの成果が得られた。これらの成果をもとに昭和 43 (1968) 年度から公園の整備を実施し、昭和 46 (1971) 年 3 月に完成した。第 1 期調査の報告書は平成 17 (2009) 年に刊行されている。

第2節 第1期調査の概要

第1項 第1期調査の目的

第1期調査の調査面積は 2,000m² (史跡指定地 23,071m² の約 8.6%) に上る。第1次調査は昭和 41 年 9 月 23 日から 10 月 20 日にかけて実施された。当初の目的は塔と金堂の規模を確定すること及び講堂、中門並びに回廊などの位置を確認することであった。第 2 次調査は昭和 42 年 7 月 21 日から 9 月 4 日まで実施され、講堂の確認や寺域の確定を目的とした。以下に 2 か年の調査成果の概要をみつかった遺構ごとに述べる。

第2項 金堂

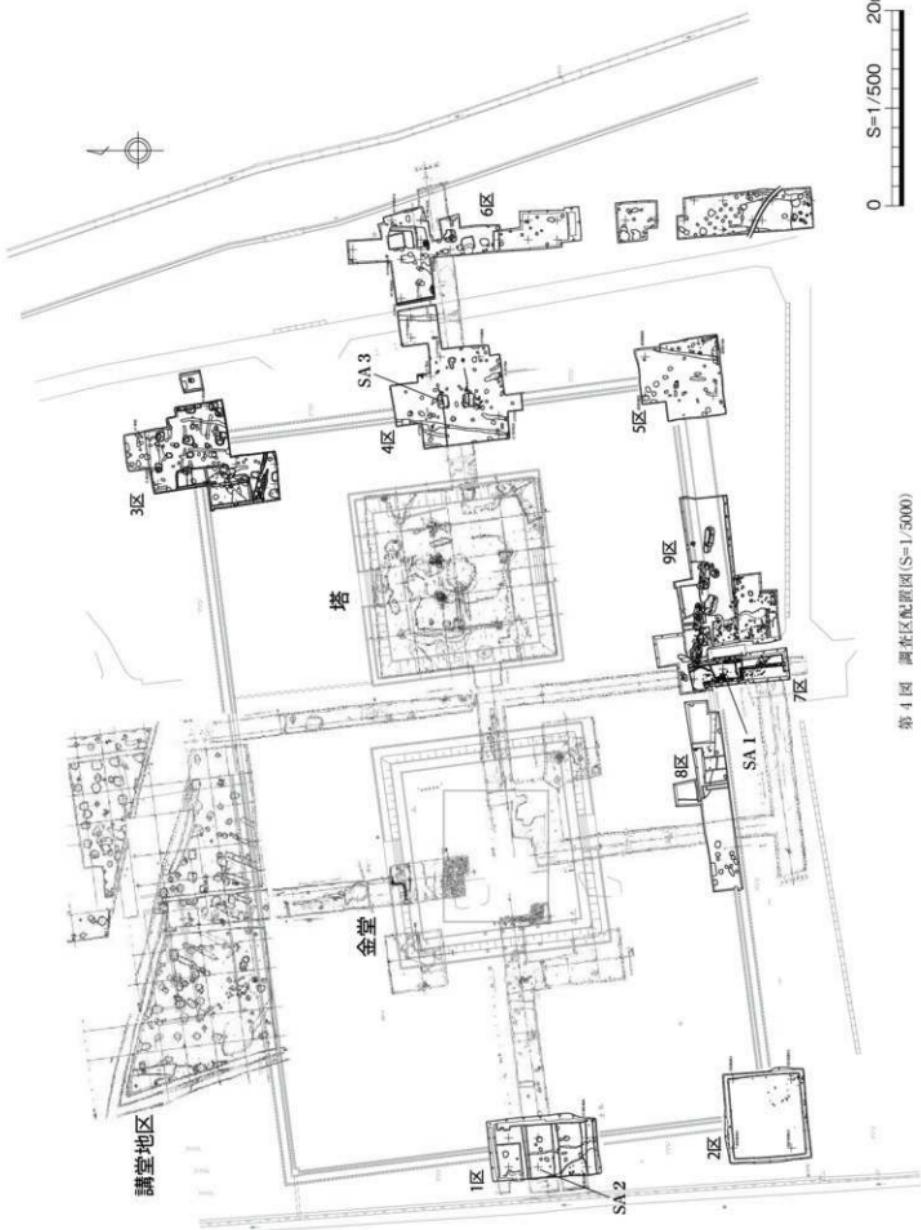
金堂は昭和 12 (1937) 年には鍋木勢岐氏による調査で玉石敷きの地固めなどが確認されており、昭和 41 年度に本格的な発掘調査が行われた。すでに建物の基壇などは削平されていると予想されたことから、建物の四隅を調査し、範囲を確定することを目的とした。

その結果、建物周辺の雨落ち溝や瓦だまりを検出した（創建期金堂 SB2A）。また、玉石敷きの地固めを持つ建物が同位置に重なり合っていることが明らかになり、建物軸の方位を異にして金堂が同位置で再建されたものと判断した（再建期金堂 SB2B）。このことにより、末松庵寺には少なくとも 2 時期の建物が存在することが明らかになった。創建期の金堂は瓦葺であるが、再建期金堂に伴う時期の瓦は確認されておらず、再建期は非瓦葺であったと考えられる。平面規模は創建期で東西 19.8m、南北 18.4m、再建期は東西 13.5m、南北 10.8m と一回り小型になる。建物構造及び基境外装については不明である。

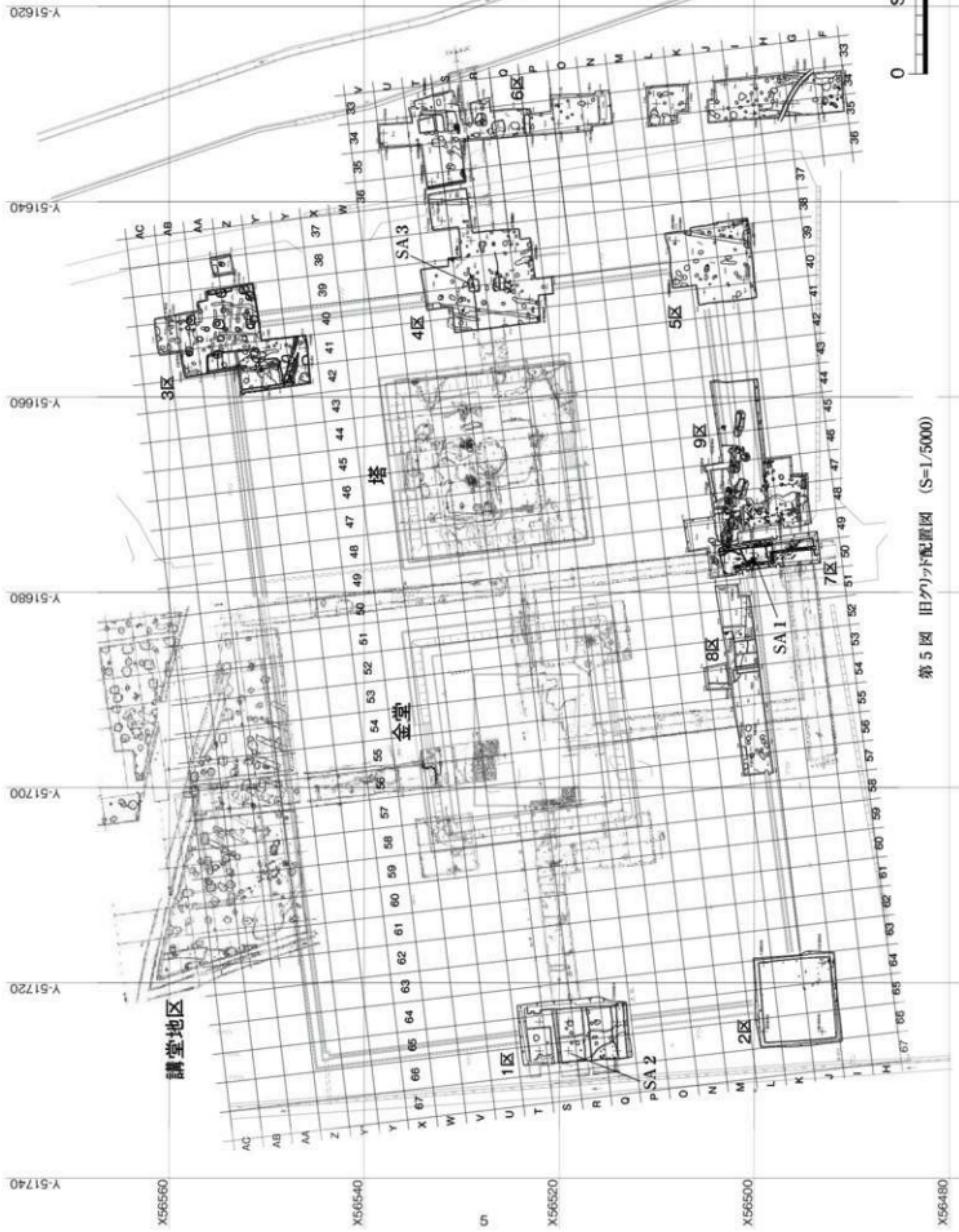
第3項 塔 (SB1)

塔についてはほぼ全面を調査し、塔心礎の抜き取り穴や側柱礎石の根石を 4 か所検出した。方 3 間、一辺長 10.8m と復元されている。塔基壇の盛土は検出できず、基壇の規模も不明であるものの、掘り込み地業は行わずに基壇が形成されたと考えられる。また、塔の周辺で瓦がみつかっていないことから、瓦葺ではなかったか、未完成であった可能性が指摘されている。金堂でみつかったような再建された痕跡は確認できず、瓦塔が包含層中より出土していることから、再建期は木造塔の代わりに瓦塔を安置したと考えられる。また、塔の南東側で竪穴

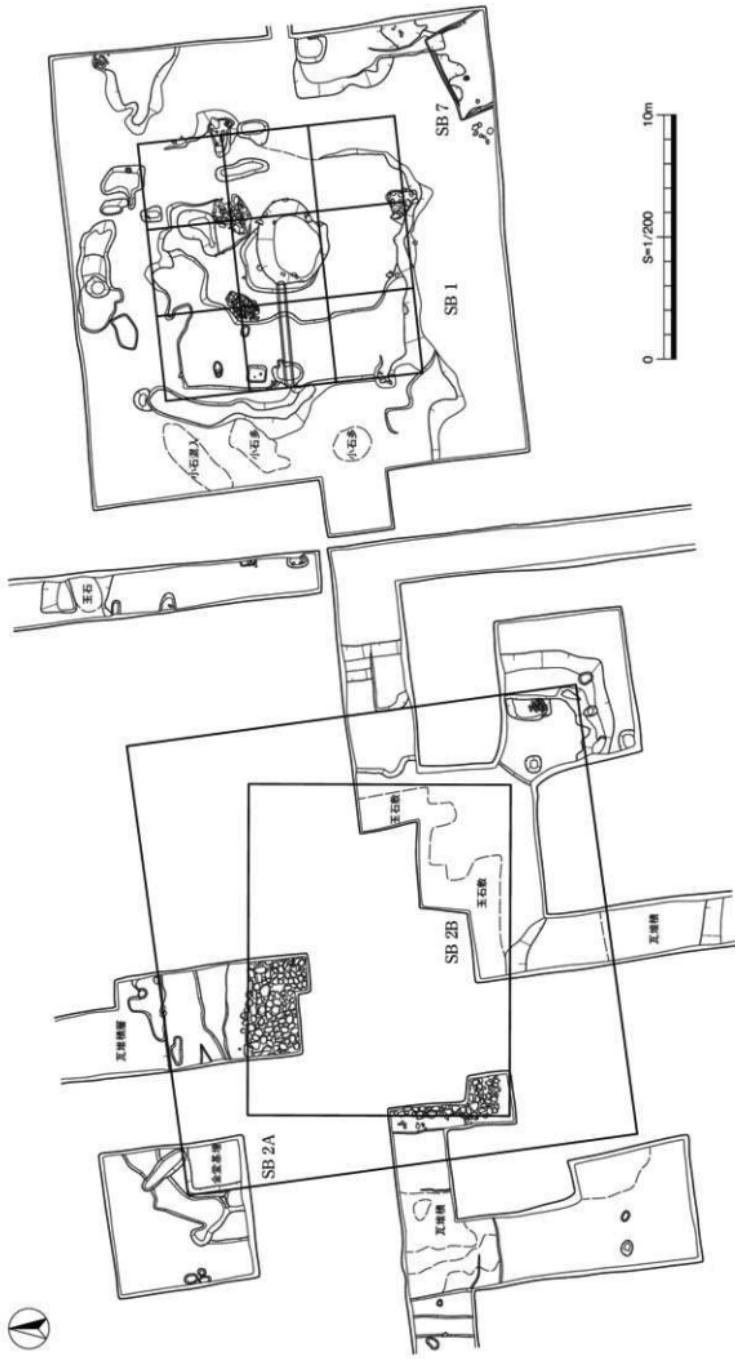
第4圖 調查區配置圖($S=1/5000$)



第5図 旧クリット配置図 (S=1/5000)



第6図 金堂地区、塔遺跡平面図 ($S=1/200$)



建物 SB7 を検出している。塔に先行するものと考えられ、出土遺物から 7 世紀中ごろのものと考えられる。この年代が、塔が建立された時期の上限と考えられる。

第 4 項 伽藍区画施設

伽藍を区画する施設は伽藍の西側及び南側では、地山削り出しの築地塀 (SA1・2)、東側では掘立柱塀 (SA3) を検出した。築地塀は地山の高まりを塀の基底部又は基壇と判断した。東側の SA3 は南北に並ぶ柱穴 2 基がみつかっている。西側築地塀 SA2 と SA3 の芯々距離で約 78.4m を測る。北側の区画施設についてはみつかっておらず、門についても確認できていない。

第 5 項 講堂

金堂北側の講堂が推定される地区では複数の掘立柱建物を検出している (SB3・4・5・6)。建物の方位が、再建期金堂と同じである SB3・6 が再建期、SB3 を切る SB4 及び SB4 とほぼ同軸の SB5 がさらに 1 段階後に出るものと判断している。なお、第 1 期調査の記録によると、図上では SB3 が SB4 を切っているが、SB4 が切ると判断している。また SA5 など柵列 4 条が検出されている。

第 3 節 再整備事業の経緯

末松廃寺跡の再整備事業は平成 25 年度に遺跡整備委員会が設けられ、平成 26 年度より現地発掘調査を開始した。当初は平成 29 年度で調査を終了する予定であったが、委員会に意見を諮り、平成 30 年度に補足調査を実施した。

野々市市遺跡整備委員会委員一覧

氏名	役職	肩書（平成30年10月現在）
谷内尾 晋司	委員長	前石川考古学研究会会长
土肥 孝	副委員長	元文化庁主任調査官
松村 恵司	委員	独立行政法人国立文化財機構理事長
三浦 純夫	委員	野々市市文化財保護審議会委員

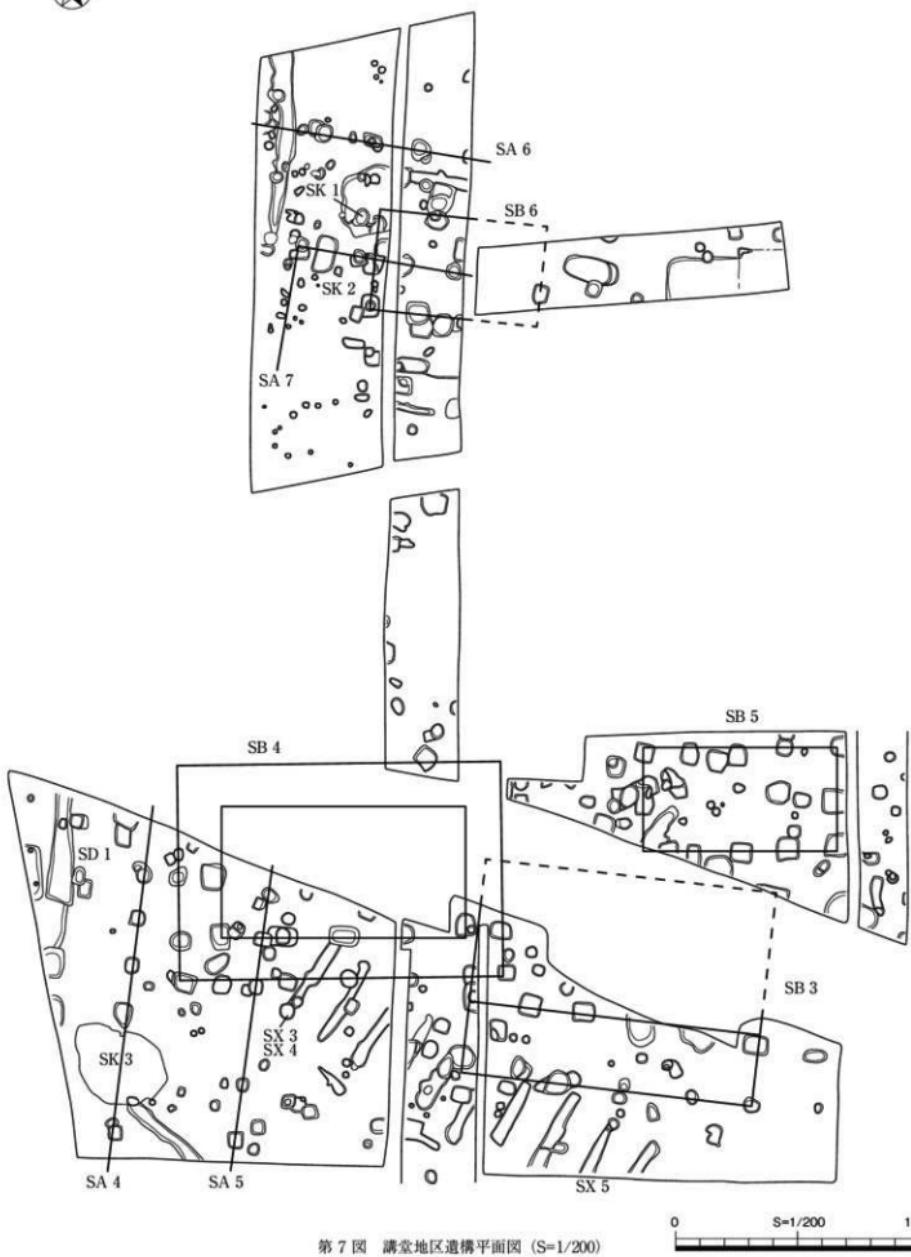
野々市市遺跡整備委員会オブザーバー

氏名	役職（平成30年10月現在）
安 英樹	石川県教育委員会文化財課

野々市市教育委員会事務局一覧

年度	教育長	教育文化部長	文化課長
平成24	村上 維喜	森元 裕	山下 久美子
平成25	堂坂 雅光	寺尾 庄司	山下 久美子
平成26	堂坂 雅光	寺尾 庄司	吉田 淳
平成27	堂坂 雅光	寺尾 庄司	吉田 淳
平成28	堂坂 雅光	大久保 邦彦	吉田 淳
平成29	堂坂 雅光	大久保 邦彦	吉田 淳
平成30	堂坂 雅光	大久保 邦彦	田村 昌宏

Ⓐ



第7図 講堂地区遺構平面図 (S=1/200)

第4節 第2期調査の経緯

発掘調査の方針は遺跡整備委員会において検討され、寺城の確定を最優先とすることが決められた。また、史跡指定地内の発掘調査であることから、調査に伴う破壊は最小限に抑える必要があり、重機による掘削は公園造成時の盛土及び整備直前の耕作土に限り、その下層の遺物包含層の掘削は人力で行うこととした。また遺構の調査は検出のみとし、必要な場合に限って一部掘り下げを行うこととした。遺構の記録については世界測地系に基づき打設したグリッド杭を基準としたが、遺物の取り上げについては第1期調査との整合性を保つために、第1期調査で設定した任意の3m グリッドを採用することとした。(調査年次の呼称については、昭和41年度と42年度の調査をそれぞれ第1次、第2次とし、平成26年度調査を第3次調査とした。) 調査区については、調査を行った順に1区から10区まで設定した。



発掘作業員に従事した方々



整理作業員に従事した方々

第3章 遺構と遺物

第1節 調査の方針

本章では遺構と遺物について調査区ごとに述べる。遺構番号は第1期調査を踏襲しているが、土坑のみ新たに遺構番号に調査区を冠し、枝番として個別の遺構番号を付けた。遺物については、調査区ごとに概要を述べるが、瓦及び特筆すべき遺物については第4章で別途記載する。

第2節 1区

第1項 調査の目的

1区は、第1期調査で伽藍西側の築地塀(SA2)を検出した調査区を再調査し、築地塀の痕跡を再検証することを目的として設定した。第1期調査の調査区を拡張する形で東西6m、南北11mの方形の調査区とした。

第2項 調査の経過

平成26年度から平成28年度にかけて調査を実施した。平成26年度は調査区の南側について調査を行ったところ、調査区南壁および検出面の精査の結果、公園整備以前の流路の痕跡を確認した。平成27年度は調査区の中央の調査を行った。調査区の中央西側では第1期調査でSA2と判断したしまりの良い地山の土壌状の高まりを検出したが、築地塀の盛土は検出できなかった。また調査区東壁際で完形に近い土師器碗がまとまって出土したが、土師器を埋納した遺構についてプランを把握することはできなかった。平成28年度は残される北側の調査を行った。調査区の北壁は後世の自然流路による削平の影響を受けていないことから築地塀の痕跡が残ることを期待したが盛土及び雨落ち溝等の築地塀に伴う痕跡は確認できなかった。平成28年度の測量後に埋戻しを実施した。

第3項 層序

調査区北壁の層序は大きく現代の盛土から耕作土、近代以前の掘り込み、9～11世紀ごろの遺物を含む包含層、寺院創建から再建期の遺物を含む包含層、地山に大別される。また地山の中でも調査区東側の29・31・33層は強くグライ化しており、粘性が非常に強いもののしまりが弱く、一時的に湿地状態にあったことが伺える。

第4項 遺構

ピット10基を検出した。いずれも小規模であり、柱穴となるものが見当たらなかったため、検出のみで調査を終了した。いずれも第1期調査で検出したものと考えられる。また平面では認識できなかったものの、中央トレンチでピット1基を検出している(47層)。このピットからは平瓦1点が出土しており、創建期以降のものである。

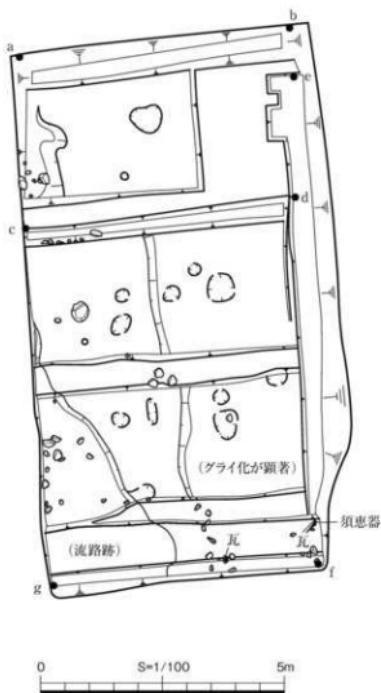
実測した土師器は、調査区北東隅で土師器碗がまとめて出土した。この遺物が伴う遺構を平面で確認できなかったが、第1期調査でみつかっているSK2と同様の土器埋納した土坑であったと考えられ、概ね10世紀後半ごろのものと考えられる。

第5項 遺物

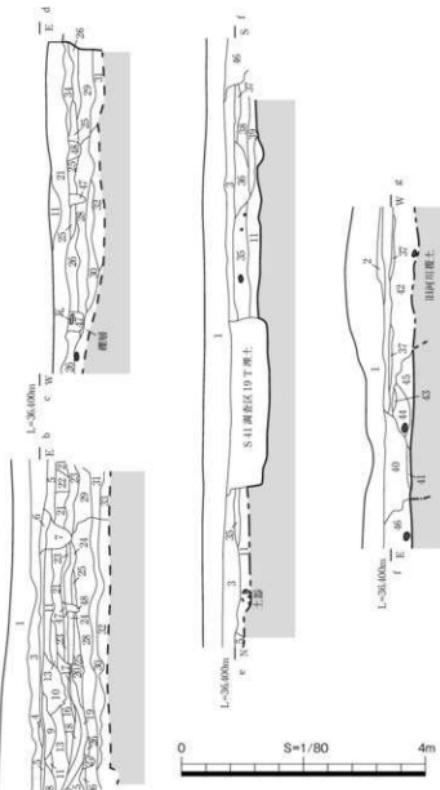
有台の碗が5点、無台の碗が14点である。内外面共に赤彩または黒色化されていないものが大半であり、内面黒色土器は3点(7、15、18)である。このほか、須恵器の杯2点を実測した。20は調査区東壁際を断ち割った際に包含層より出土したものであり、ごく小片であるため時期は不明である。21は第1期調査区の埋戻し土より出土したものである。

第6項 小結

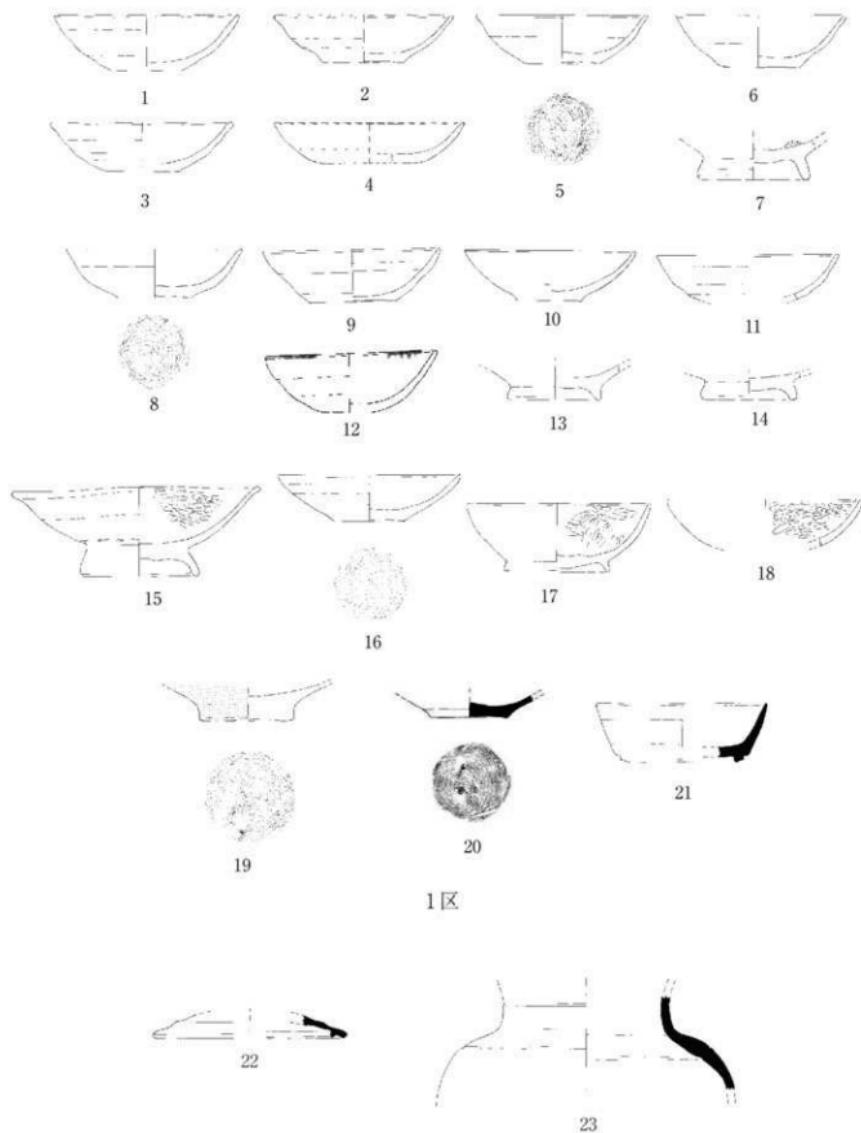
1区では第1期調査で築地塀と判断した地山の土壌状の高まりについて再検証した。この土壌上の高まりは流路等により削り出されたものと考えられ、西側の築地塀の痕跡をとらえることはできなかった。グライ化した地山はし



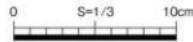
1. 砂土 S 46 公開整備場所土
2. 青灰色 (SB6/1) 粘質土(礫土)
3. 青灰色 (SB6/1) 粘質土(礫土)
4. 青灰色 (25Y6/1) 粘質土(礫土)
5. 青灰色 (25Y7/2) 粘質土(礫土)
6. 黑灰色 (N7/2) 粘質土 粉色鉄分 (SYR6/8) 混じる (近現代の遺構か)
7. 黑灰色 (N4/2) 粘質土 粉色鉄分 (SYR6/8) 混じる (近現代の遺構か)
8. 明るいグレー灰 (5GY7/1) 粘質土 (近世以降の遺構か)
9. 黑灰色 (10Y7/1) 粘質土 (近世以降の遺構か)
10. 黑灰色 (N6/2) 粘質土 灰色 (N7/1) 砂質ブロック土混じる (近世以降の遺構か)
11. 黑灰色 (N6/2) 粘質土 (盆地側)
12. 黑灰色 (10Y7/1) 粘質土 (近世以降の遺構か)
13. 青灰色 (7SYR5/1) 粘質土 粉色鉄分 (SYR6/8) - 灰化物混じる (近世以降の遺構か)
14. 青灰色 (7SYR6/1) 粘質土 粉色鉄分 (SYR6/8) - 灰化物混じる (近世以降の遺構か)
15. 黑色 (7SYR2/1) 粘質土 浅黄褐色 (7SYR8/6) 粘質ブロック土・灰化物混じる
16. 青灰色 (7SYR4/1) 粘質土 粉色鉄分 (SYR6/8) - 灰化物混じる (近世以降の遺構か)
17. 黑褐色 (7SYR3/1) 粘質土 粉色鉄分 (SYR6/8) - 黑色 (7SYR8/1) 粘質ブロック土混じる
② 世紀以前の遺構か)
18. 黑褐色 (7SYR3/1) 粘質土 粉色鉄分 (SYR6/8) - 灰化物混じる (近世以降の遺構か)
19. 黑色 (7SYR2/1) 粘質土 粉色鉄分 (SYR6/8) - 灰化物混じる (近世以降の遺構か)
20. 浅黄褐色 (7SYR8/6) 粘質土 灰色 (NS5/2) 粘質ブロック土・炭粒混じる
21. 黑色 (NS5/2) 粘質土 黑色鉄分 (SYR6/8) 混じる (創建期以降の混合層)
22. 黑色 (N4/2) 粘質土
23. 黑色 (NS5/2) 粘質土 浅黄褐色 (7SYR8/6) 粘質ブロック土混じる (創建期の整地土)
24. 黑色 (N3/2) 粘質土 粉色鉄分 (SYR6/8)。
- 浅黄褐色 (7SYR8/6) ブロック土混じる (創建期の整地土)
25. 浅黄褐色 (7SYR8/6) 粘質土 灰色 (NS5/2) 粘質ブロック土混じる (地山)



第8図 1区(平面図(S=1/100)、断面図(S=1/80))



第9図 1区・2区 遺物実測図1 (S=1/3)



まりが弱く、痕跡が残存しないものの、堀を設けたならばしまりの強い地山の検出範囲であろうと考えられる。また本調査区の西側では自然流路の跡を検出しており、現在も調査区西側を用水が北流している。寺院の存在した時期においても、河川が堀に代わり伽藍の西側を区画する機能を果たしていた可能性が考えられる。

第3節 2区(第10図)

第1項 調査の目的

2区は、第1期調査で検出した築地堀(SA2)の南西隅を確認することを目的とし、第3次(平成26年度)に設定した。一辺8mの方形の調査区である。

第2項 調査の経過

平成26年度に調査を行った。重機により造成土及び耕作土を掘削し、平面を精査したが遺構は検出できなかった。調査区の四周にトレーナーを設け下層を確認したが、1区で地山を検出したレベルまで下げても腐植土層の遺物包含層及び地山は検出できなかった。1区の層序との比較の結果、2区は全面的に公園造成以前の自然流路により削平されていると判断したため調査を終了した。

第3項 層序・地形

公園造成土と直前の耕土の直下である3層まで重機による掘削を行った後、下層をトレーナーで確認した。4層以下はいずれもグラウンド化した粘質土であり、腐植土層は検出できなかった。10層は疊を多く含む地山であるが、ごくわずかな範囲で確認できたのみである。

第4項 遺構

遺構は検出できなかった。1区の地山を検出したレベルまで掘り下げても調査区全面で自然流路の覆土が検出されたため、既に遺構は破壊されていると判断した。

第5項 遺物

出土した遺物は瓦片および須恵器の小片などであり、出土量は少ない。いずれも流路の覆土中であるため、流れ込んだものであり遺構に伴うものではない。22は内面に返しの残る壺蓋で7世紀後半のものである。23は須恵器の瓶類の肩部である。

第6項 小結

2区では西側の築地堀を明確に示す痕跡をとらえることはできなかった。1区の南西隅で検出された自然流路の痕跡と合わせて、伽藍の西側では自然流路が存在したことが確認された。

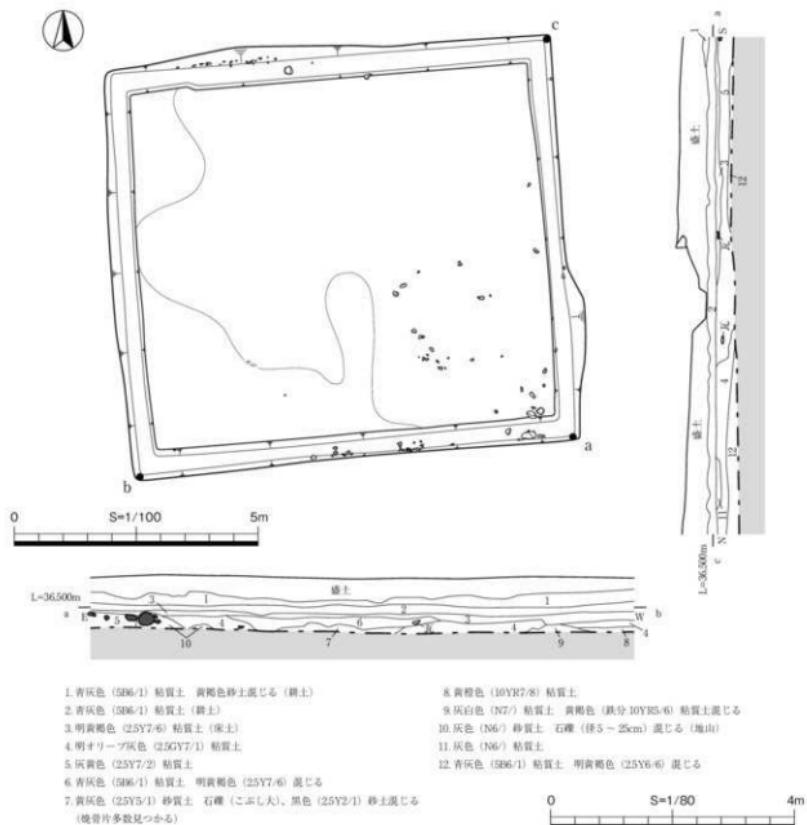
第4節 3区(第11図)

第1項 調査の目的

第1期調査で未確認であった北側区画施設を確認することを目的として、伽藍東側の掘立柱堀SA3の北東隅推定地に調査区を設けた。

第2項 調査の経過

平成26年度に調査区を設定し、平成27年度に遺物包含層を掘削し地山面で遺構検出を行ったが、当初の目的であった堀の痕跡は確認できなかった。大型の柱穴及び竪穴建物と考えられるプランの一部が確認されたため、平成28年度に調査区を南西側に拡張し、竪穴建物の南端を把握した。平成29年度は竪穴建物と掘立柱建物の覆土を掘り下げ、遺構の時期の特定と前後関係の確認を行った。



第 10 図 2区〈平面図 (S=1/100)、断面図 (S=1/80)〉

第3項 遺構

3区では堅穴建物1軒、掘立柱建物1棟及び構列3条を検出した。

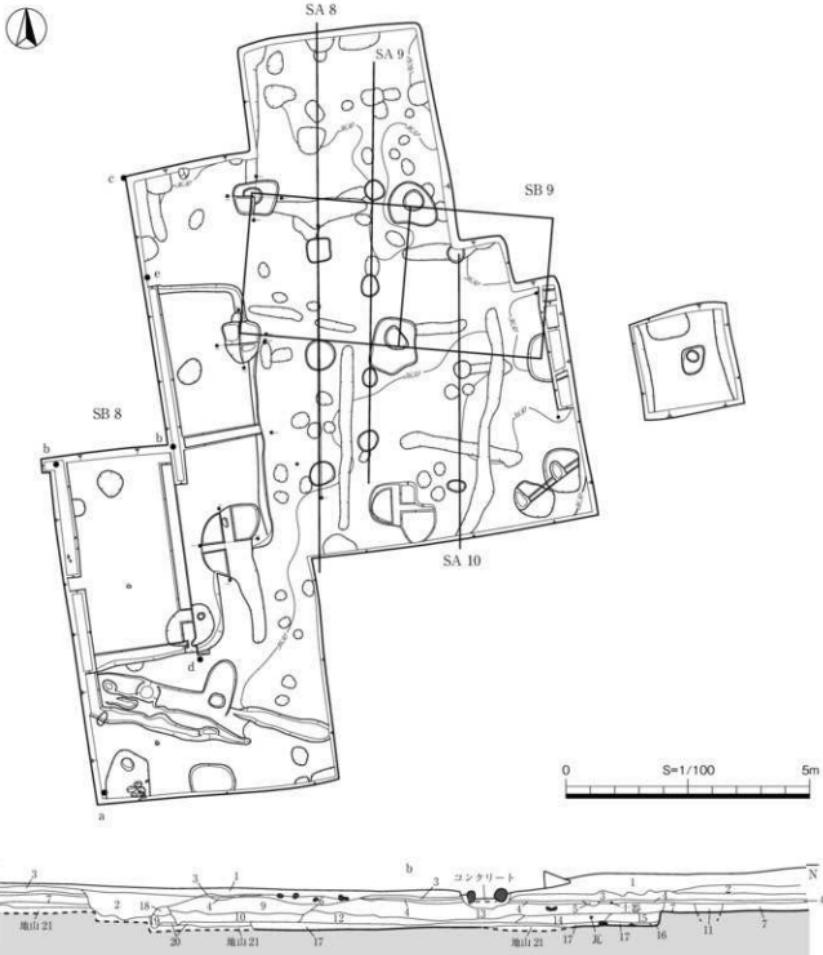
堅穴建物SB8(第12・15図)

《検出》平成27年度の調査で隅丸方形プランの北東隅を検出し、覆土からは焼土及び多量の遺物が出土したため古代の堅穴建物と予想した。平成28年度に調査区を拡張し検出を行ったところ、ややいびつな平面プランであったため2軒の建物が重なり合うと考えたが、切り合いを明確に判断できなかったため平成29年度に覆土を掘り下げ、床面で切り合いの確認を試みた。その結果、床面でも切り合いが確認できず、不整形な1軒の建物と結論付けた。《覆土》堅穴建物の覆土は焼土及び炭化物粒を多く含み人為的に埋め戻されたと考えられる。ただし床面では被熱した痕跡は認められなかった。《形状・規模》南北7.5m、東西は調査区内で確認できた範囲で4.6mを測る。南東隅の東西1.2m、南北1.7mの範囲は地山を掘り込まない不整形な形状を呈する。カマドはこの南東部に設け

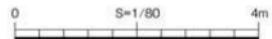
られており、比熱した基底部のみ検出したが、構築材は出土していない。槽道が南へ1.7mほど延びていたが、掘り込みは検出面からごくわずかであり、被熱した状況も確認されなかった。またカマドの西側には、直径95cmほどの土坑が1基設けられている。柱穴については、中央のやや南西側と北東側にそれぞれピット1基を床面で検出しているが、そのほかは確認できなかった。また周囲には幅10cm程の壁溝が巡っている。この建物については、形状から近接する末松遺跡等で確認されている「青野型住居」と呼ばれるものと考えられる。《遺物》遺構上層の包含層より多量の遺物が出土している。ここでは厳密に建物に共伴すると考えられる床面で出土した資料のみを掲載し、その上層から出土したものは第4項で述べる。12点を実測した。24と25は須恵器壺蓋である。いずれも内面に返しが残り、宝珠型のつまみがつくものである。24はカマドの南西のピットから出土した。26は壺Gの終焉時期に当たると考えられる小型の壺身である。28は1重の沈線が巡る長頸瓶の頸部である。40は甕の口縁部から肩部にかけてある。肩部につまみ状の突起が4方につけられている。叩き目を残し、外面はさらにカキ目調整を施す。口縁部は内傾し、外面に沈線が巡る。29から36は土師器である。29は高壺の壺部である。内面に黒色化処理が行われており、脚部以下は欠損している。30から36は甕である。30は外面部は縱方向のハケ目調整で下半はケズリ調整を行う。内面は縱方向を中心とするハケ目調整を行っている。31は口縁部から体部にかけて残存していた。外面は横方向のち縦方向のハケ目調整、内面はナデ調整を施し、口縁部は外反する。32と33は同一個体の可能性があるもので、外面に縱方向のハケ調整を施し、内面は縦から斜め方向にケズリ調整を施す。34は体部から底部に近い部分で、外面は横ハケのち縦ハケを施す。35は口縁部から体部で、口縁部は若干内湾し、横ハケを施す。口縁端部は面調整を意識したと思われる調整が行われている。体部は内外面共縦から斜め方向のハケ目調整を施している。36は小型甕の口縁部から頭部である。口縁端部は棒状の工具によると思われるナデにより内傾する面が設けられており、口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。やや内湾する口縁部や口縁端部に面を持つことから、33や36は、望月氏の指摘する近江型煮炊具の要素をもつものと考えられる(望月2007)。これらの遺物の時期については概ね7世紀中ごろから後半にまとまると考えられる。《時期・性格》第1期調査時に塔の南東隅でみつかっている竪穴建物SB7と比べると、SB8は建物の方位が寺院創建期の建物とほぼ揃うことから、寺院創建の直前から創建時期に並行する段階に、寺院に関連して建てられたと考えられる。SB7の時期が7世紀中ごろとされており、SB8の床面から出土した遺物は同時期またはその後のものである。伽藍地内であり一般的な住居が建てられたとは考えにくく、寺院建立に当たる工人等が用いた建物であったと想定できる。

掘立柱建物 SB9(第13図)

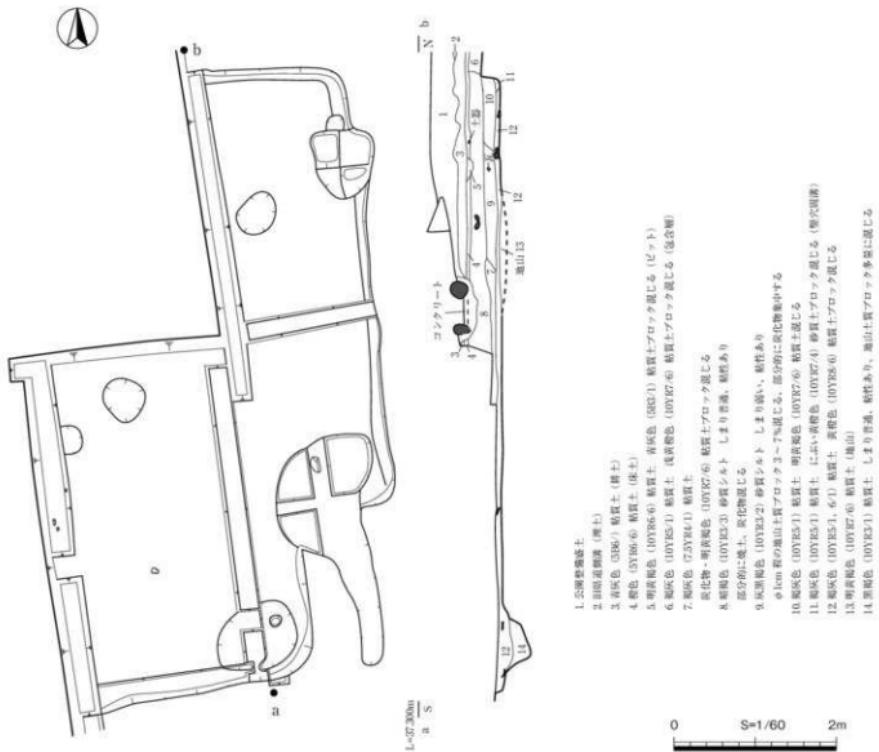
《検出》平成27年度の遺構検出時に直径約1mの大型の掘方を持つ柱穴が複数並ぶことから、掘立柱建物を認識した。当初はP1～P5及びその南側に位置する2基が組み合う方2間の総柱建物と考えたが、P4の南側については精査の結果遺構とは認められず、南北1間、東西2間以上の建物であると結論付けた。SB8との前後関係については、P3がSB8の床面を切ることからSB9が新しいものであると判断した。東側の延びについては柱穴の推定位置を調査したが対となるものは認められず、西側については調査区外であるため不明である。《形状・規模》東西6.3m、南北3mの東西棟の建物である。P3は掘り込みが浅くプランもやや不整形であり他の柱穴とは様相が異なるが、個々の柱穴は概ね直径1m前後の不整形なプランの掘方であり、直径40cmほどの柱痕が残る。《覆土》P1・P3及びP5については遺構の掘削を行った。P5は検出面から深さ約60cmであり、中央に柱痕跡が残されていた。底部は一度掘り込んだ後に整地し、柱が据えられている。《遺物》柱穴から出土した遺物はわずかである。P1から丸瓦片が出土している。P3及びP5からは土師器の小片が出土している。《時期・性格》SB8を切ること及び建物の軸から再建段階以降のものと考えられる。建物の性格については不明である。



- L=37.300m
1. 公開整備盛土
2. 田畠道鋪溝（埋土）
3. 青灰土色（SB6/1）粘質土（縛土）
4. 棕色（5YR6/6）粘質土（床土）
5. 明黄褐色（10YR6/6）粘質土、青灰土色（5B3/1）粘質土ブロック混じる（ビット）
6. 棕灰色（10YR4/1）粘質土、明黄褐色（10YR7/6）粘質土混じる（土坑（新））
7. 開灰土色（10YR5/1）粘質土、浅黄褐色（10YR7/6）粘質土ブロック混じる（包含層）
8. 浅黄褐色（10YR8/3）粘質土、褐灰土色（10YR5/1）粘質土混じる（包含層）
9. 灰色（N4/4）粘質土、明赤褐色（25YR5/6）粘質土、上部・瓦混じる（土坑平面 A）
10. 黑褐色（SYR2/2）粘質土、炭化物・明赤褐色（25YR5/6）
　　粘ブロック土（燒土）混じる（土坑平面 A）
11. 褐褐色（10YR3/4）粘質土
12. 褐灰色（7.5YR4/1）粘質土
　　炭化物・明黄褐色（10YR7/6）粘質土ブロック混じる（土坑平面 B）
13. 褐褐色（10YR3/3）砂質シルト しまり普通、粘性あり（堅穴新粘土）
　　部分的に燒土、炭化物混じる
14. 黄黒褐色（10YR3/2）砂質シルト しまり弱い、粘性あり（堅穴新粘土）
　　約1cm程の堆山上土質ブロック3~7%混じる、部分的に炭化物集中する
15. 褐褐色（10YR5/1）粘質土、明黄褐色（10YR7/6）粘質土混じる（堅穴切溝土）
16. 褐褐色（10YR5/1）粘質土、にじみ黄褐色（10YR7/4）砂質土ブロック混じる（堅穴切溝土）
17. 褐褐色（10YR5/1, 6/1）粘質土、黃褐色（10YR8/6）粘質土ブロック混じる（堅穴新粘土）
18. 黑褐色（SYR6/1）粘質土、赤褐色（鉄分：25YR4/6）混じる（堅穴古崩土）
19. 褐灰色（7.5Y4/1）粘質土、明黄褐色（10YR7/6）粘質土ブロック混じる（堅穴古崩土）
20. 黑褐色（10YR3/1）粘質土、黃褐色（10YR8/6）粘質土ブロック混じる（堅穴古崩土）
21. 明黄褐色（10YR7/6）粘質土（地山）



第11図 3区(平面図(S=1/100)、断面図(S=1/80))



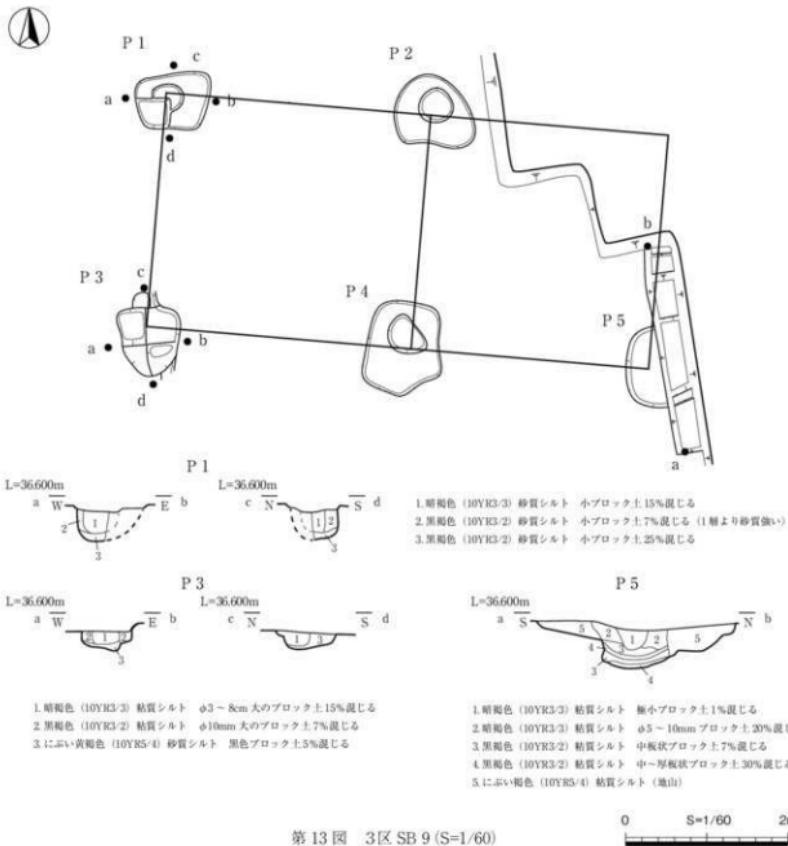
第 12 図 3区SB8 (S=1/60)

柵列 SA8 (第 14 図)

《検出》平成 27 年度に遺構検出を行った際、土坑が南北方向に 5 基並ぶことから柵列が存在すると判断した。《覆土》P1 から P3 を半裁した。P2 及び P3 は柱痕跡が残る。《形状・規模》50cm 前後の円形プランである。深いもので深さ 40cm ほど掘り込まれる。SA9 及び 10 と比べ個々の柱穴の規模が大きく、掘り込みも深いことが特徴的である。2.1m から 2.4m 間隔で、ほぼ真北方向に並ぶ。《遺物》P2 から平瓦片及び鉄滓が出土している。《時期・性格》瓦が出土していること及び軸方向から SB4 などと同じく再建期以降のものと考えられる。SB9 と重複するが前後関係は不明である。後述する SA10 とは柱穴の規模が異なるものの 3m 間隔で平行し、同時に存続して単廊をなしていた可能性が考えられる。

SA9 (第 14 図)

《検出》平成 27 年度に検出した。同時に検出した SA8 の約 1m 東にあり当初は建物となると予想したが、組み合うものが認められないと柵列と判断した。《覆土》遺構を掘削していないため覆土の堆積状況は不明である。平面の精査では柱痕は確認できなかった。《形状・規模》柱穴はいずれも直径 30cm から 40cm ほどと小規模な梢円形プランで、ほぼ真北方向に並ぶ。《遺物》ビットの一部のみ覆土を一部掘り下げたため、遺物は出土していない。



第 13 図 3 区 SB9 (S=1/60)

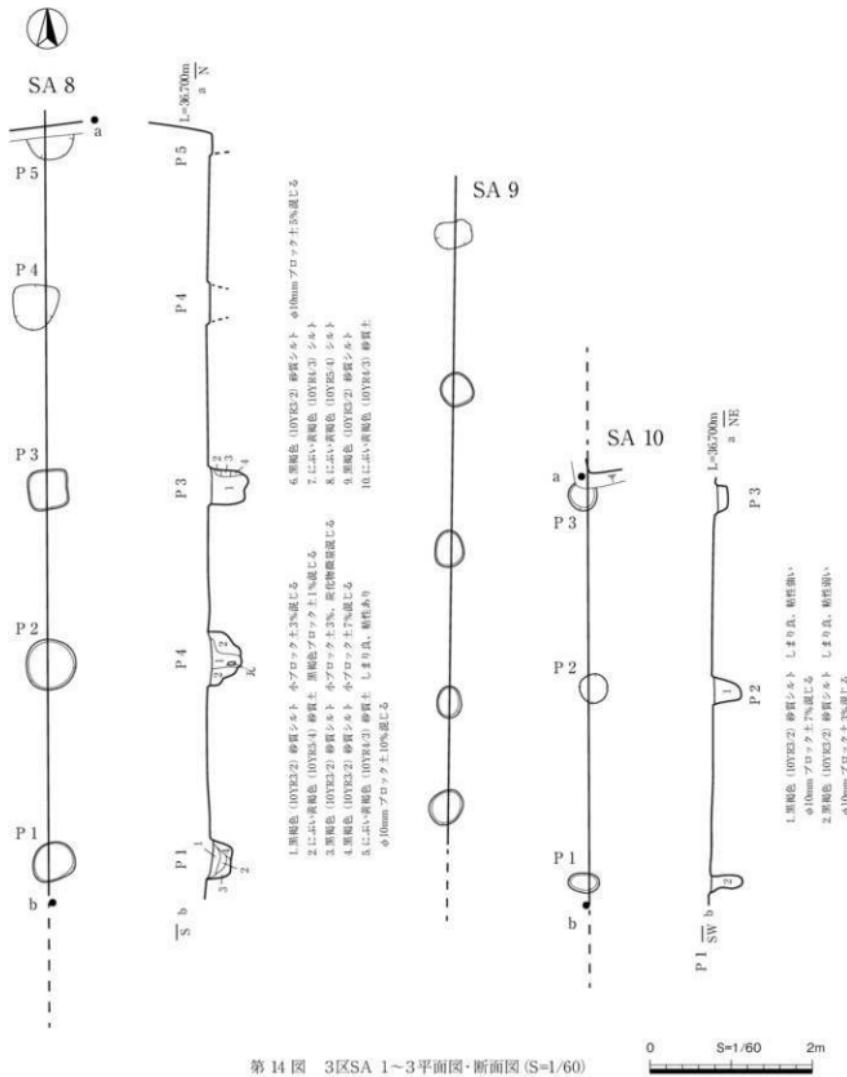
ない。《時期・性格》時期を決める遺物に欠くが、SA8と同じく再建期以降と考えられる。SB9 や SA8との前後関係は不明である。

SA10 (第 14 図)

《検出》平成 27 年度に検出した。平成 29 年度に調査区東壁際を精査した際に北側のピット 1 基を検出した。《覆土》いずれも単層であり、P1 と P2 は形状から柱を据えたものと考えられるが、P3 は掘り込みが浅い。《形状・規模》直径 30cm ほどのやや不整形な円形である。検出面から約 50cm 掘り込まれている。2.4m 間隔でほぼ真北方向に並ぶ。《遺物》いずれの柱穴からも遺物は出土していない。《時期・性格》若干筋がずれるものの SA8 とはほぼ平行し、同時に併存していた可能性が考えられる。

第 4 項 遺物 (第 15 ~ 17 図)

土器類は、包含層中より多数出土している。37・38・39・41・43・44 は須恵器の壺蓋である。37 は内面に返しが残るものである。蓋径 9.6cm と小型であり、7 世紀中ごろと考えられる。38・39 は 37 より返しが退化し、蓋径が大きくなつたもので、37 より若干後出するものである。41 と 43 は内面の返しが消滅し、口縁端部は三角形状に形成される。43 の方が端部の折り返しが長く、やや扁平となる。外面に範書きによる線刻が認められるもので、8

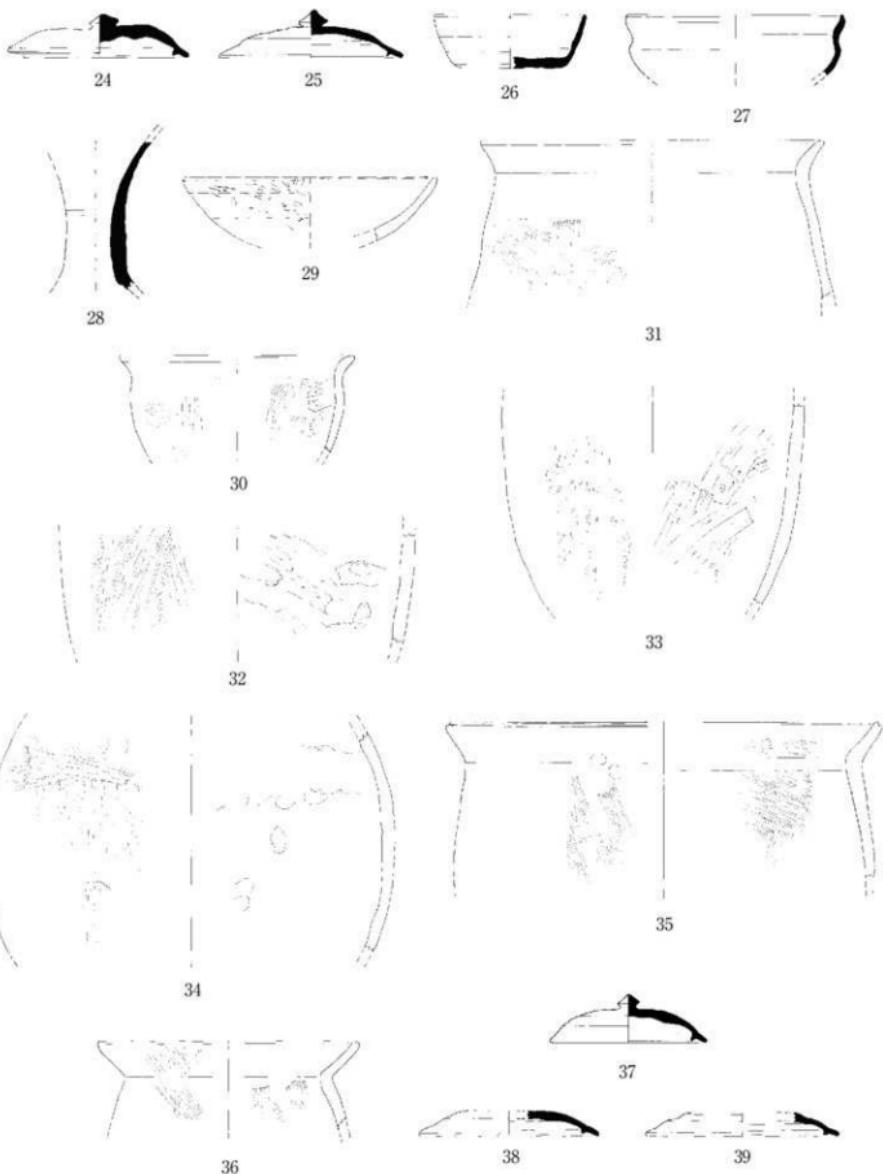


第14図 3区SA 1~3平面図・断面図 (S=1/60)

0 S=1/60 2m

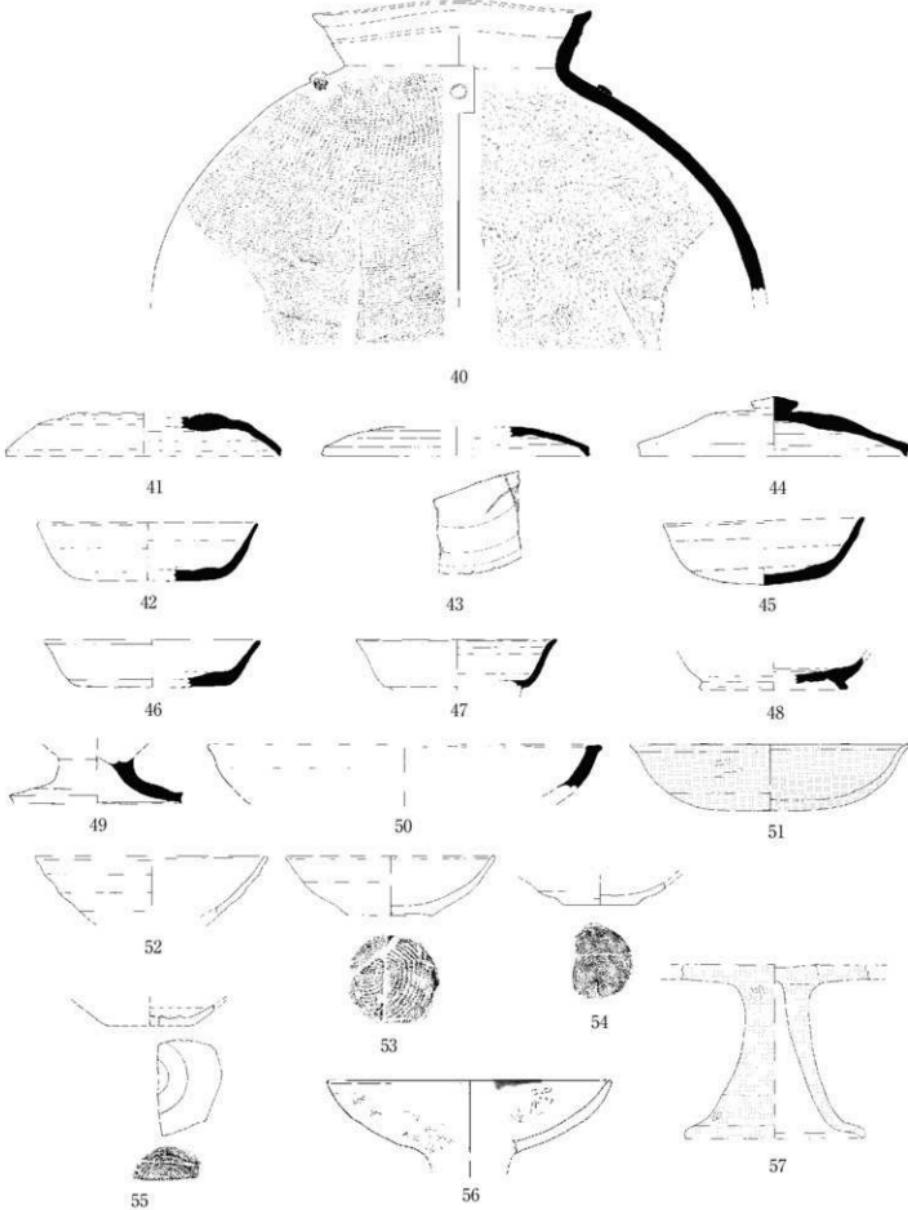
世紀の初頭ごろのものである。

42、45、46は無台杯、47と48は有台杯である。7世紀中ごろから8世紀代に下るものまでが出土している。47は口縁部にタール状の付着物がある。49は脚部の短い高杯で坏部は欠損している。51から61は土師器である。51は内外面に赤彩を施した椀である。口縁端部は外反し、底部は丸く起き上がる。52と53は椀である。内外面共に赤彩や黒色化処理は行われていない。54と55は皿の底部である。いずれも包含層の上層より出土した。内面に煤上の付着物が多量に付着しており、灯明皿として使用されたと考えられる。56は高杯の坏部である。口縁部



第15図 3区 遺物実測図1 (S=1/3)

0 S=1/3 10cm



第16図 3区 遺物実測図2 (S=1/3)

0 S=1/3 10cm



58



59

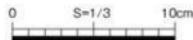


60



61

第17図 3区 遺物実測図3 (S=1/3)



内面にわずかに煤らしき付着物がみとめられるが、内外面共に赤彩および黒色化処理は行われていない。57は高壺の脚部から壺部にかけてである。壺部は非常に扁平であり、立ち上がる部分は欠損している。壺部内外面及び脚部外面は赤彩を施している。58から61は甕である。58は体部はやや膨らみ、外面は縦方向のハケ目調整、内面は横方向のカキ目調整を施す。口縁部は大きく外反し、端部はつまみ上げられる。59と60は体部下半であり、叩き調整により成形されている。61はほぼ完形に復元できた。胴部は球形に膨らみ、口縁部は外反する。外面上半は横方向、下半はなめ方向のハケ目調整を施す。

また鉄滓や輪羽口といった鍛冶関連遺物が多数出土しているほか、釘などの鉄製品も出土している。末松庵寺跡では講堂地区で鍛冶関連の造構SK1を検出しており、時期は10世紀の末から11世紀前半と考えられているが、3区でこの時期まで下る遺物は確認されていない。

第5項 小結

3区では、当初の目的であった創建期の伽藍東側を区画する掘立柱塀SA3の痕跡をとらえることはできなかった。一方、検出した竪穴建物SB8は寺院建立時の建物と考えられ、寺院創建の時期を考える上で重要である。また在地の形態と異なる特徴を持つ「青野型住居」と呼ばれる竪穴建物であり、近江系と思われる特徴をもつ土器が出土している。これらについては、第5章で改めて考察する。

第5節 4区

第1項 調査の目的

4区は第1期調査で検出した、伽藍東側を区画とする南北方向の掘立柱塀 SA3の延長部分を確認すること目的として設定した。

第2項 調査の経過

平成26年度に耕作土まで重機で掘り下げ、第1期調査の調査区を再掘削した。その結果、SA3と判断した柱穴2基を検出できたため、その南側にトレンチを設けた。また、平成27年度にさらに北側を調査した。その結果、南北両側で延長部分となる柱穴は確認できず、掘立柱塀とした柱穴について再評価する必要性が生じた。柱穴についていはずれも半裁し覆土の記録を行った。

第3項 遺構

第1期調査で検出していたSA3の他に、柵列1条と溝1条を検出した。

柱穴列(幡竿支柱穴) SA3(第19図)

《検出》第1期調査で検出された、2つの柱穴により構成される柱穴列である。北側をP1、南側をP2と呼称する。第1期調査ではそれぞれの柱穴の一部のみが検出されていたが、第2期調査で面的に調査した結果、全容が明らかになった。いずれも検出段階で拳大の礫が集中していた。《覆土》いずれの柱穴も柱が抜き取られた痕跡を確認することができた(P1:3・4層、P2:2・3層)。掘方土はやや互層状に堆積するが、突き締めた様子は確認できなかった。《形状・規模》いずれも東西約1.4m、南北約1mのやや不整形な隅丸方形プランである。《遺物》いずれの柱穴からも平瓦片が出土している。《時期・性格》2つの柱穴で構成される遺構としては門扉や幡竿支柱穴を考えられる。門扉であった場合、築地塀に取りつく棟門であったと考えられるが、それに伴う雨落ち溝などは検出できなかった。また塔心礎から約17mの位置にあり、塔の軒先が想定される位置から近接しているため、このSA3は幡竿支柱穴であると評価した。

柵列 SA11

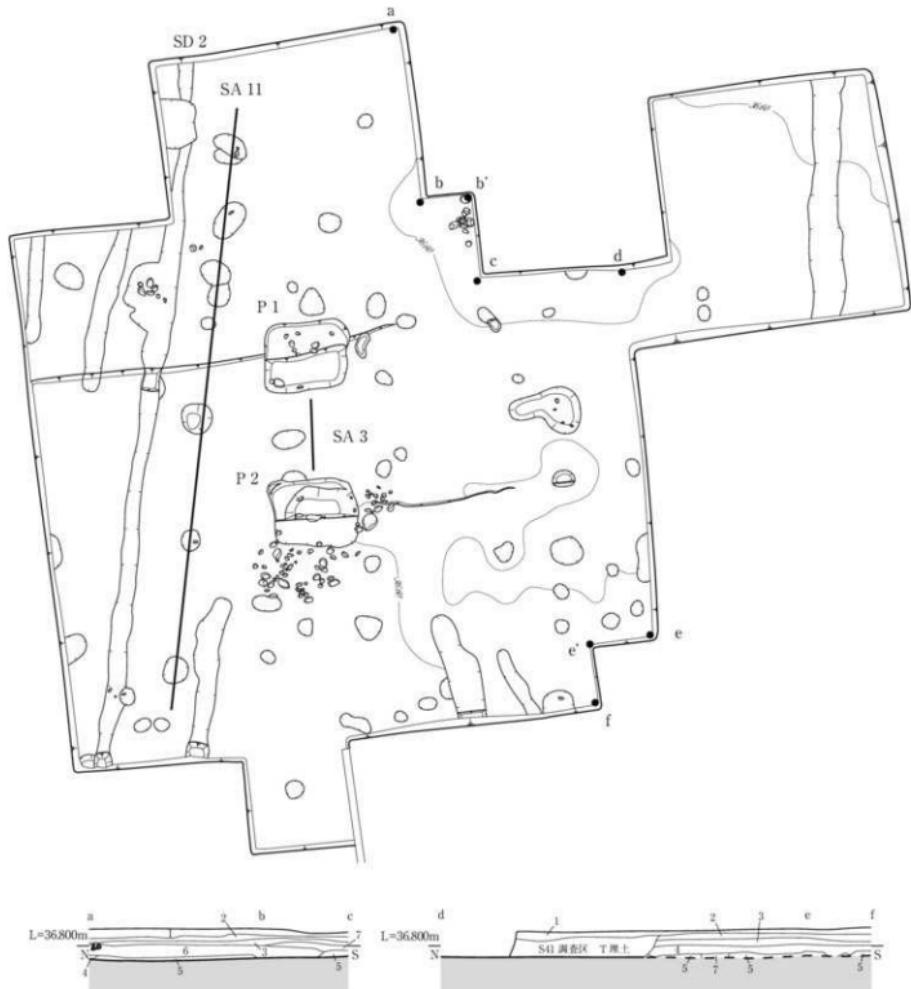
《検出》SA3の西側で検出した。柱穴5基が並び、対となる柱穴列は認められなかった。《覆土》遺構を掘削していない為、覆土の様相は不明である。《形状・規模》それぞれ直径40cmから50cmほどのやや不整形な円形である。精査したが柱痕跡は確認できなかった。柱穴列はそれぞれ約2m間隔で並んでおり、南北ともに調査区外に延びる。なお、3区の東側に拡張トレンチを設けた際、小ビット1基を検出している。SA11を北側に延長線上にこのビットが位置していることから、このビットがSA11の延長である可能性がある。並ぶ方位は東に約8度振れる。《遺物》伴う遺物は出土していない。《時期・性格》時期を特定する遺物がないものの、並ぶ方位から再建期以降のSB2Bと同じ時期と考えられる。

溝 SD2

《検出》SA3の西側約1mで検出した。SA11と平行している。《覆土》南壁で裁ち割ったところ上下層に分けられ、下層はブロック土が混じることから人為的に埋められたと考えられる。《形状・規模》幅約30cmの素掘り溝である。南壁際に設けたトレンチで検出面から深さ約35cmを測る。《遺物》検出時に土師器の小片が出土しているが、時期及び器種の特定には至らなかった。《時期・性格》時期を絞り込むことはできなかったが、方位から再建期以降と考えられる。上記のSA11と平行し、同時に設けられていた可能性も考えられる。

第4項 遺物

包含層より出土した遺物は調査区北西隅のSD2の西側に集中している。須恵器は6点を実測した。80は返しの残る壺蓋で、7世紀中ごろから後半のものである。68は大きく聞く形狀の高壺である。内外面に赤彩が見られ、



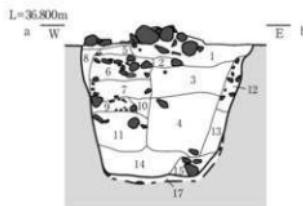
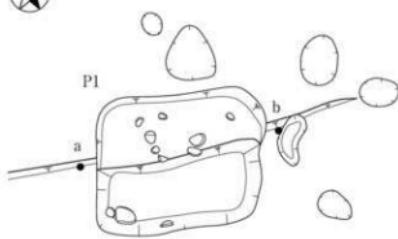
1. S46 公園整備土
2. 青灰色 (5B5/1) 粘質土 (耕土)
3. 淡黄色 (2.5Y7/4) 粘質土 (耕土)
4. 黄褐色 (10YR3/4) 粘質土 (包含層)

5. 灰色 (7.5Y4/1) 粘質土
6. 明褐 (7.5YR5/8) 上灰色 (7.5Y4/1) との混土.
7. 剛褐色 (10YR3/4) 粘質土 黄褐色ブロック土 (10YR3/8) 蔵む (ビット)

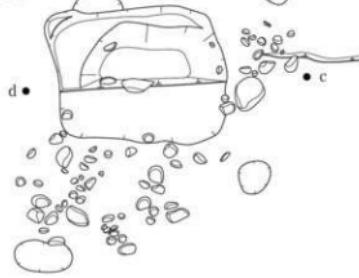
0 S=1/80 4m

第 18 図 4区平面・断面図 (S=1/80)

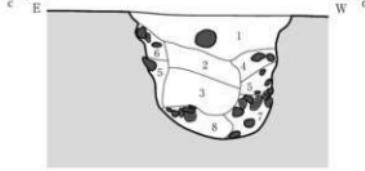
(A)



P2

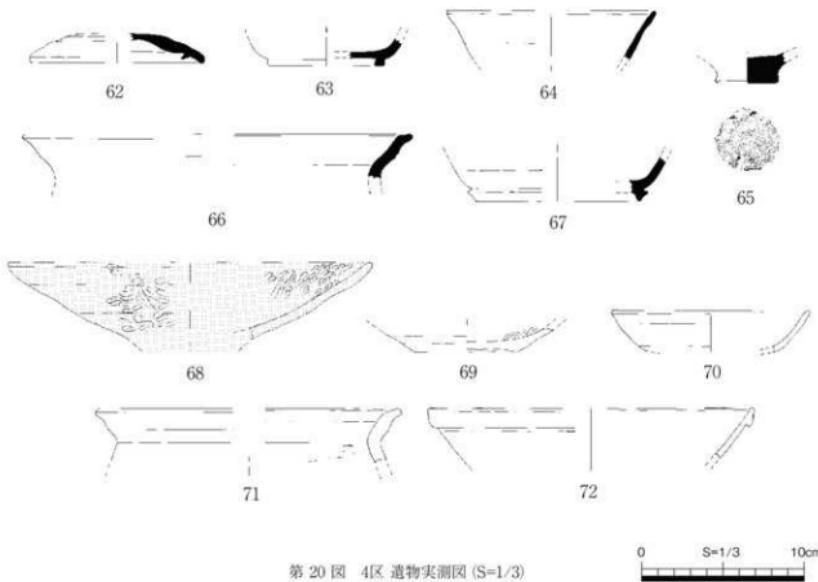


L=36.700m



0 S=1/40 2m

第19図 4区 SA3(輪竿支柱穴) (S=1/40)



第20図 4区 遺物実測図 (S=1/3)

外面は煤が付着している。69は内面黒色の土師器椀底部である。

また包含層中から綠釉陶器片1点が出土している(70)。産地の同定はできていない。また第1期調査区の埋戻し土及び包含層中より瓦塔片が1点ずつ出土している。瓦塔については4章でまとめて整理を行う。

第5項 小結

4区では、掘立柱塀SA3の再検討を目的としたが、結果的に掘立柱塀とはならず、轆竿支柱穴であると評価を改めた。後述する6区の大型土坑SK6-1及び塔心礎と約17m間隔で一直線状に並ぶことが注目される。

第6節 5区

第1項 調査の目的

5区は築地塀及び掘立柱塀が想定される位置の南東隅に当たり、築地塀及び掘立柱塀の痕跡を検出することを目的として調査区を設定した。

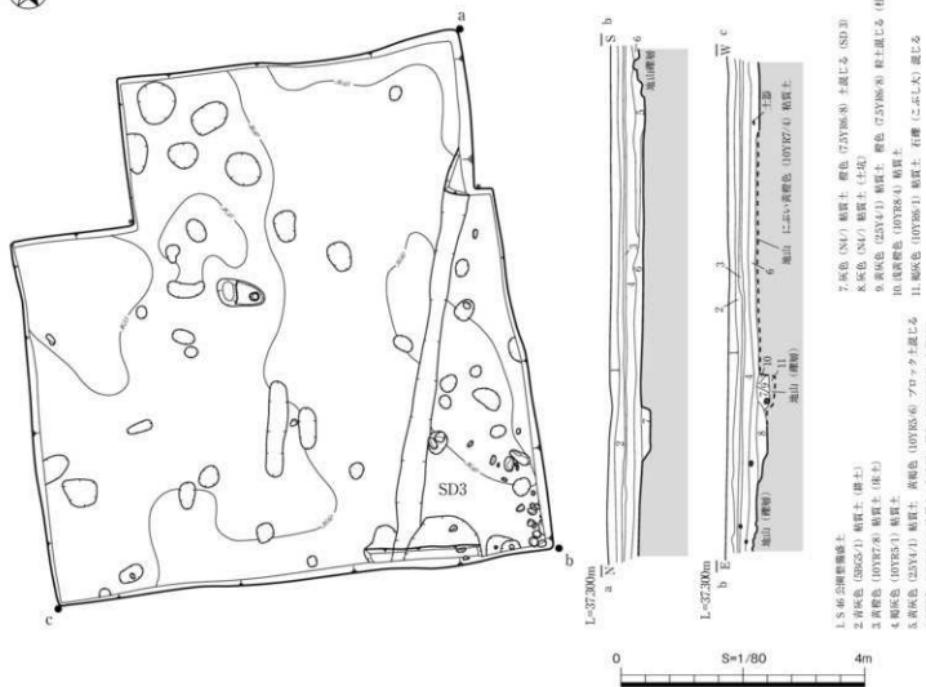
第2項 調査の経過

平成26年度に重機による表土の掘削および人力による包含層掘削を行い、地山面まで掘削した。平成27年度に遺構検出を試みたが、塀の痕跡となるものは確認できなかつたため、測量を行ったのちに埋め戻しを行った。

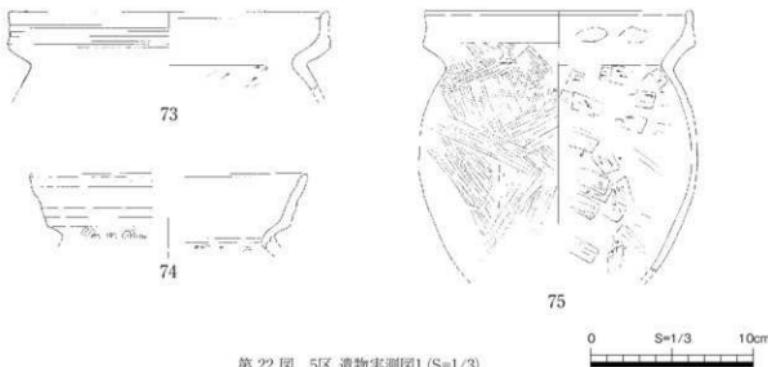
第3項 遺構

溝 SD3

《検出》5区は遺構覆土と検出面の色調が近似しており、識別がやや困難であったため複数回検出してプランを確定した。《覆土》東壁及び南壁に覆土を記録した(9層)。《形状・規模》幅40cm、調査区内だけで南北約7mに渡る。軸は東に8度振れる。《遺物》包含層掘削中に瓦片及び鉄釘などが出土している。《時期・性格》瓦片が



第 21 図 5区平面図・断面図 (S=1/80)



第 22 図 5K 造物実測図1 (S=1/3)

出土していることから寺院創建期以降のものであり、SB2Bと同じ軸から再建設際に比定される。機能等は不明である。4区のSA11やSD2などと平行する。

第4項 遺物

5区の遺物は出土量が少なく、大半が小片であったため、実測をすることができた古代以降の遺物は瓦のみである。遺構に伴わないが、弥生時代後期終末期の甕が出土している(73~75)。

第5項 小結

5区は築地堀南東隅を目的としていたが、区画施設に該当する遺構は検出されなかった。SD3も寺院再建期と考えられるが、明確な機能は不明である。

第7節 6区

第1項 調査の目的

平成27年度調査で4区のSA3が輻竿支柱穴と評価を改めたため、伽藍東側の区画施設を新たに検出するため東側に調査区を拡張したところ、幅2mほどの溝状プランを検出した。この遺構が伽藍を区画する溝の可能性があると考え、平成28年度調査にこのプランの南側延長部分を検出することを目的として6区を設定した。東西4m、南北48mの調査区であり、植樹等により掘削できない部分が存在したため3区画に分けられ、北から6-1区、6-2区、6-3区とした。

第2項 調査の経過

検出した溝状プランより南側約7mの位置から南に調査区を設定した。重機掘削のち遺物包含層を掘削し、遺構検出を試みたが、溝状プランが延長しないことがわかった。そのため溝状プランを確認するためこの遺構周辺の調査区を拡張した結果、土坑(SK6-1)となることが明らかになった。さらに南側に柱穴(SK6-2)を検出した。SK6-1直上に桜の木が植えられており調査は難航したが、柱痕跡等は認められないことを確認した。6-2区及び6-3区では寺院創建期以降の明確な遺構は検出できず、また遺物量も多くないことから検出のみで調査を終了した。

第3項 層序

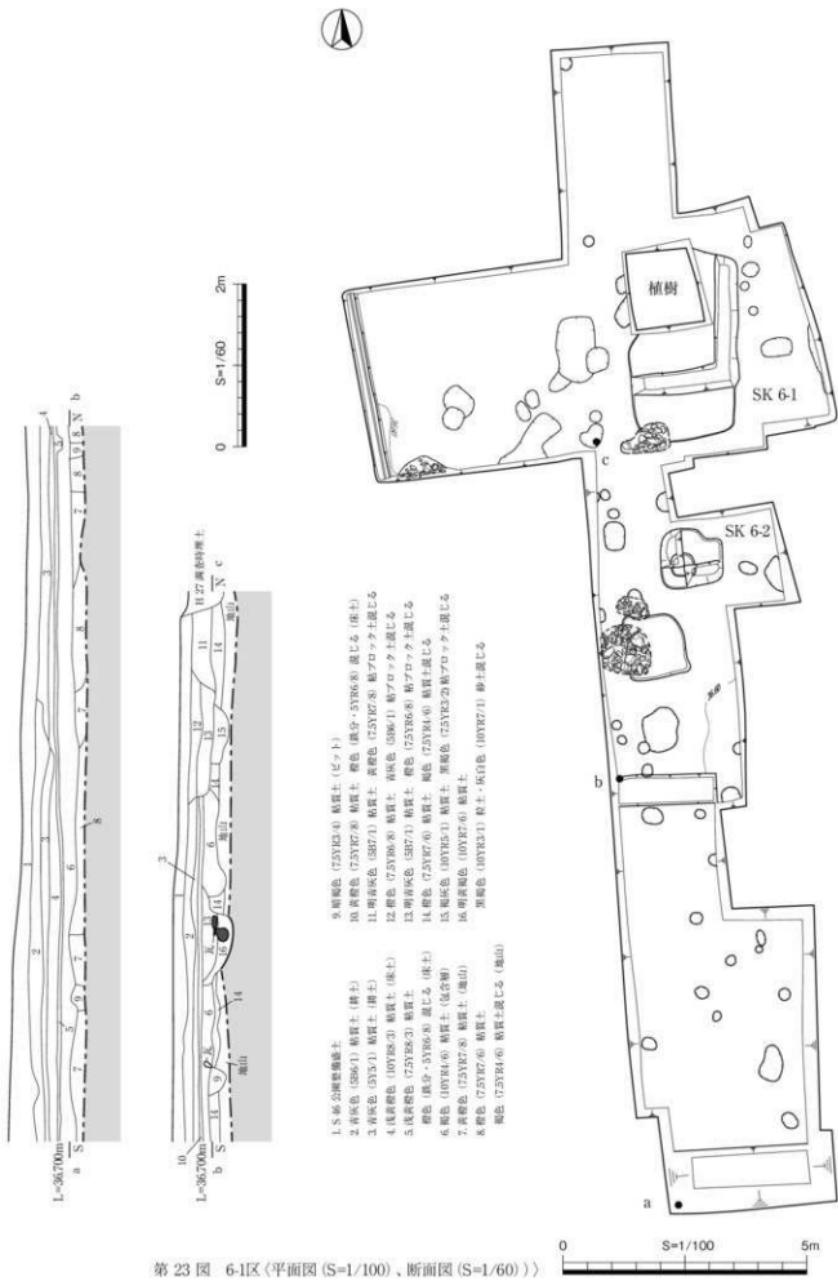
基本層序は現代盛土から耕作土、遺物包含層及び地山に大別される。地山は他の調査区と比べシルトが少なく砂質が強い土質である。

第4項 遺構

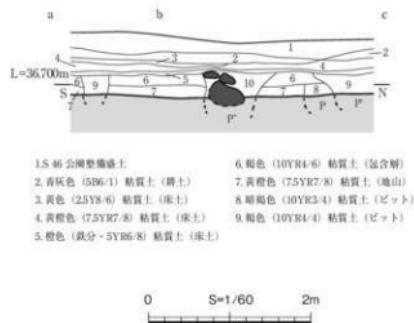
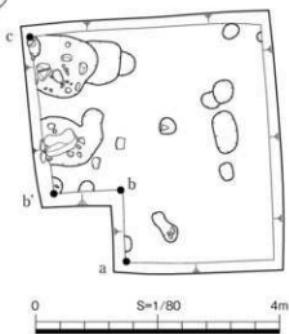
6区では土坑2基を検出した。このほかに6-3区で竪穴建物と考えられる遺構を検出しているが、不整形なプランであり、寺院創建期以降の遺物の量も乏しいことから検出のみで調査を行っていない。

SK6-1

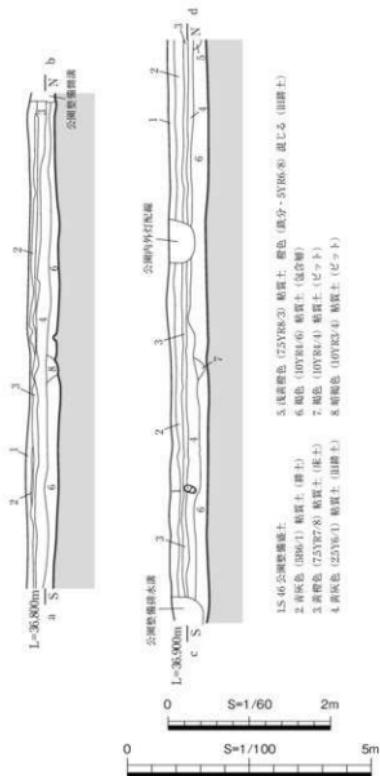
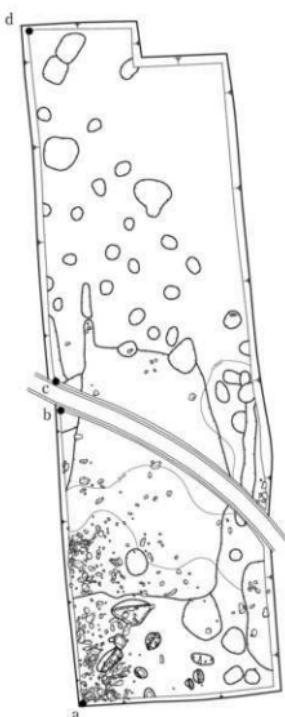
《検出》伽藍東側の区画溝の可能性があると考えた遺構である。6区は遺構覆土と検出面の識別が困難であったが、数度の検出によりプランを確定した。切り合う遺構は認められなかった。《覆土》ブロック土の多少等により細かく分層した。柱痕跡などは認められなかった。また南北トレチの13・14層は地山土であり、北側は緩やかに立ち上がる。《形状・規模》南北3.9m、東西2.2m、深さ約80cmの大型土坑である。隅丸方形プランであるが、北東側に延びるような形状である。《遺物》遺物量はごくわずかである。須恵器甕片1点及び土師器片2点が出土している。76は土師器甕の口縁部である。77は内外面に赤彩を施された土師器椀の口縁部である。口縁部がやや外反する。78は須恵器の甕の胴部である。《時期・性格》塔心礎及び4区で検出した輻竿支柱穴(SA3)と同一軸線上かつ等間隔(約17m間隔)で並ぶことから、寺院創建期と推定できる。性格については定かでないものの、後述するSK6-2と対をなす大型の柱穴で北東側へ抜き取った痕跡と考えられる。



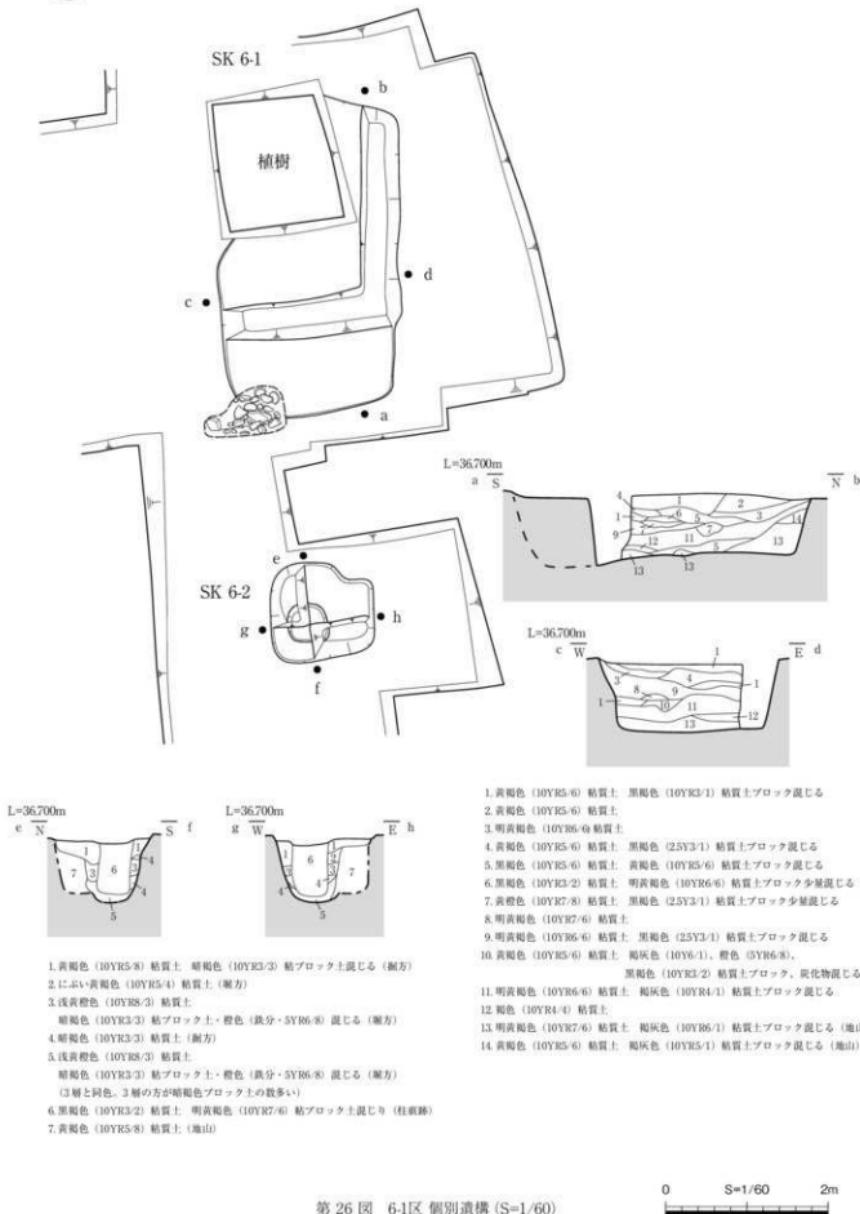
第23図 6-1区(平面図(S=1/100)、断面図(S=1/60))

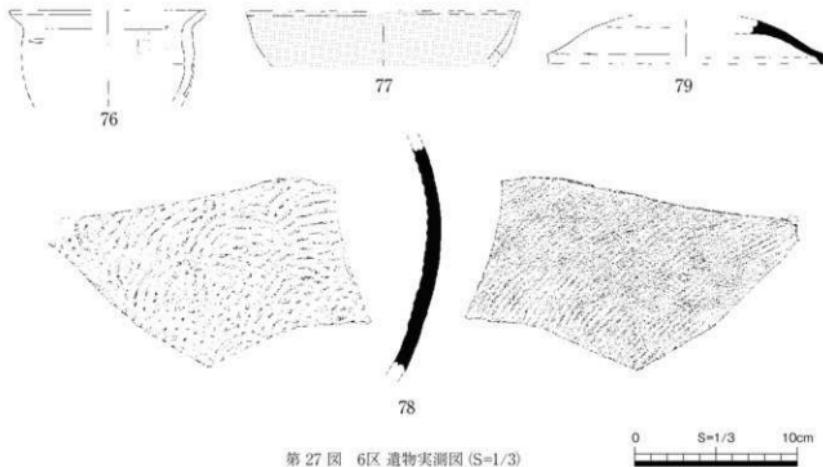


第 24 図 6-2区(平面図(S=1/80)、断面図(S=1/60))



第 25 図 6-3区(平面図(S=1/100)、断面図(S=1/60))





第27図 6区 遺物実測図 (S=1/3)

SK6-2

《検出》 SK6-1 の南側に位置する柱穴である。平面検出の段階で柱痕跡を確認した。《覆土》 柱痕と掘方埋土にわけられる。掘方埋土（1～5層）はブロック土を含むも、硬くしめられた様相は認められない。《形状・規模》 南北 1.2m、東西 1.2m、深さ約 80cm の土坑である。若干不整形であるものの、全体として隅丸方形を呈する。《遺物》 遺物は出土していない。《時期・性格》 遺物から時期の絞り込みを行うことはできない。東西に組み合う柱は確認できず、SK6-1 と組み合う南北の 2 本柱で構成される創建期の遺構と考えられる。

第5項 遺物

SK6-1 から出土した遺物のほかに遺構に伴う遺物はない。包含層より出土した 79 は 8 世紀前半ごろの須恵器环蓋である。

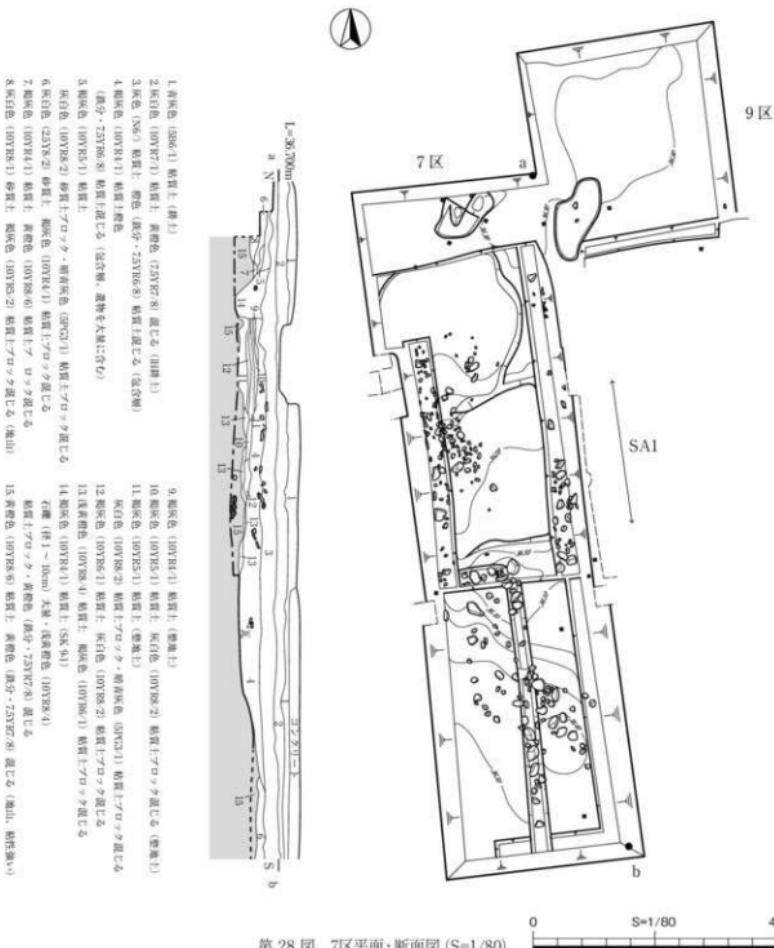
第6項 小結

6 区は伽藍東側の区画溝を検出すること目的としたが、区画施設をとらえることはできなかった。但し、SK6-1 は寺院創建期と考えられる遺構としては最も東側に位置しており、創建期の寺院の東限は従来考えていた 4 区の SA3 より東に約 17m 広くなり、約 96m となる。SK6-1 と SK6-2 の 2 本で構成される建物としては、輪竿支柱穴または棟門が考えられるが、これらの配置から寺院東側の門が存在したと考えたい。ただし、調査区全体を通じて瓦の出土量は少なく、門及び取りつく塀が存在したとしても瓦葺ではなかったと考えられる。

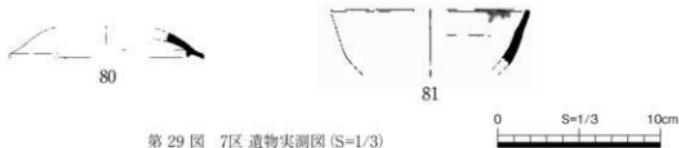
第8節 7区

第1項 調査の目的

7 区は、第1期調査で検出した地山削り出しによる南側築地壠 SA1 を再検証し、さらに中門を検出すること目的とした。第1期調査で SA1 を検出した、南北方向に設けられた調査区を中心に拡張し、東西 3m、南北 11.3m の南北方向に延びる調査区を設定した。



第28図 7区平面・断面図 (S=1/80)



第29図 7区遺物実測図 (S=1/3)

第2項 調査の経過

平成28年度に重機により盛土層及び旧耕土層を掘削した。まずは第1期調査の埋戻し土を再掘削し、さらにその東西を約50cmずつ拡幅し、地山面まで下げる検出を行った。その結果、第1期調査においてSA1と判断した、南北方向へ落ち込む土壇状の高まりを確認した。しかし、調査区の東西両壁で築地塀の跡となる盛土などを検証したところ、この落ち込みに堆積する互層上の堆積を確認したが、この土壇状の高まりが築地塀であると再評価する根拠は見出しえなかつた。平成29年度に南へさらに4.8m拡張したが同様の結果であり、調査を終了した。

第3項 層序

7区東壁の層序は大きく耕土、遺物包含層（上層：3層）、遺物包含層（下層：4層）及び整地土層に分けられる。9層から11層が地山土質のブロックを多く含む腐植土と地山土主体層が縞状の堆積をなしている。ただし層理が不明瞭であり、しまりが弱くたたき締められた痕跡が認められないことから、一般的な版築とは異なる様相であり、堀込地業を行ったとまでは断定できない。また7区の東側に連続する9区での互層上に堆積する落ち込みの延びを調査したが、9区では明確な堀込を確認することができなかつた。

第4項 遺構

遺構はトレーナーの北側で土坑を2基検出した。これらについて、9区の調査を行った際にあわせて調査を行つてゐるため、9区で述べる。

第5項 遺物

7区で出土した遺物は瓦が大半であり、その他の土器類の遺物量がごく少数であることが特徴である。80は須恵器の壺蓋である。81は須恵器の壺である。瓦は第1期調査時の埋戻し土からの出土が多いが、3層及び4層から多く出土している。特に平瓦を中心とする瓦の出土量が多く、各個体の残存率も高いのが特徴である。

第6項 小結

7区は築地塀SA1の再評価を目的としたが、第1期調査で築地塀と評価した土壇状の高まりについて、地山を削り出して塀を設けた痕跡を確認することはできなかつた。SA1と評価していた落ち込みについては、8区で延長部分を調査を行つた。

第9節 8区

第1項 調査の目的

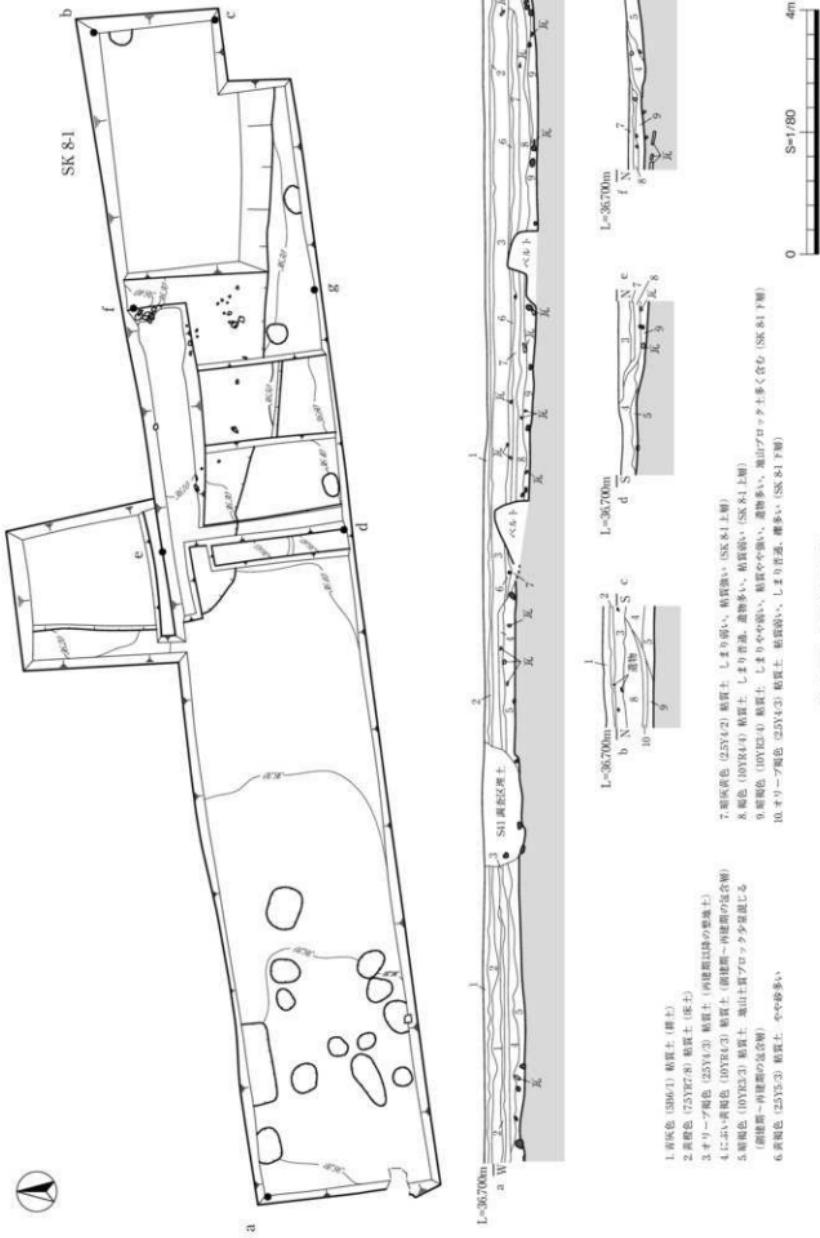
8区は南側築地塀SA1が西側に延長する部分及び中門の位置を特定することを目的として設定した。中門が金堂と軸をそろえて建てられた可能性を考慮し、創建期の金堂の南側までを調査範囲とした。東西20m、南北4mの調査区である。

第2項 調査の経過

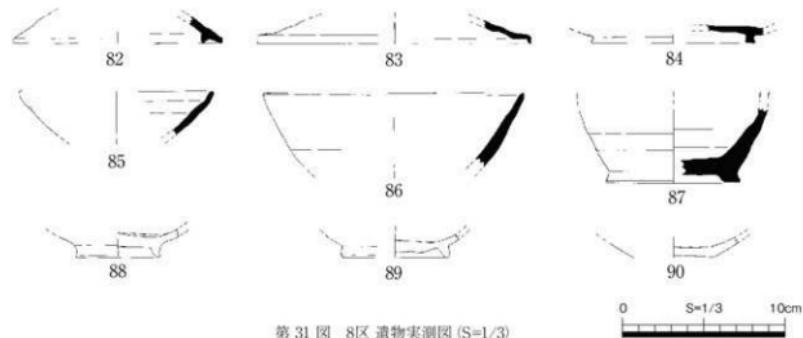
平成29年度に調査を行つた。重機により遺物包含層上面まで掘削したのち、人力により包含層を掘削した。調査区の中央から東側では、南から北へ落ち込むことが確認でき、遺物も瓦を中心に多量に出土した。この落ち込みについてプランを精査した結果、調査区中央で北方へ屈曲することが判明したため、北側に約2m四方の拡張区を設けプランの延長を追つた。このプランがさらに北側に延びることが判明したもの、その時点で調査を終了とし、測量後埋戻しを行つた。一方中央より西側ではこの落ち込みは確認できず、全面に礫を多量に含む地山を検出した。ここでは塀または門扉と考えられる遺構は検出できなかつた。

第3項 層序

層序は現代盛土から耕作土、遺物包含層、古代の遺物包含層及び地山となる。南から北方向への落ち込みは



第30図 8区(S=1/80)



第31図 8区 遺物実測図 ($S=1/3$)

大きく2時期に分けられ、上層(7・8層)からは灰釉陶器の小片が出土している。時期の特定には至っていないが再建期の中でも後出する時期とみられる。下層(9・10層)は拳大から人頭大の川原石及び瓦が多量かつ雑多に出土している。

第4項 遺構

調査区東側で検出した北側への落ち込みは、溝状の大型土坑SK8-1と評価した。このほか調査区西側でピットなどを検出した。調査区西側の地山は非常に礫を多量に含み遺構検出はやや困難であったが、検出できたものはいずれも建物等になるものではないと判断したため調査を終了した。

土坑 SK8-1

《検出》 遺物包含層を人力で掘削した際、調査区の南側から北側に落ち込むことを確認した。覆土は上下層に分けられ、落ち込みの上層については覆土の色調が下層と異なるため、プランを明確に認識できた。上層の落ち込みを先行して掘削後、下層も地山まで掘削したところ、底部に多量の川原石及び瓦が堆積していることが判明した。これらを記録後に取り外し下層の遺構を確認したものの、検出できなかつたため調査を終了した。《覆土》 覆土の色調から上下層に大別した。上下層ともに遺物を多く含み、流水の痕跡等は確認できなかつた。《形状・規模》 東側は調査区を超えて7区までつながり、西側については調査区中央ではほぼ90度屈曲し北東方向へ延びる。東西13m、南北は3m以上の大规模な落ち込みである。落ち込みの軸は東から南へ約8度振れる。《遺物》 遺物量は第2期調査の中で最も多く、その大半が平瓦及び丸瓦である。平瓦には金堂の補修瓦に位置付けられているⅢ類が含まれている。《時期・性格》 時期については、瓦が大量に含まれており、寺院創建期の金堂が廃絶以降と考えられる。遺構の延びる方向が再建金堂SB2Bとほぼ同一であることから、再建段階前後のものと考えられよう。性格については創建段階の金堂を廃し再建する際に不要となった瓦等の廃棄用土坑の可能性がある。

第5項 遺物

8区で出土した遺物はSK8-1で出土したものが大半であるものの、調査区西側の包含層中からも瓦を中心にも多量に出土している。83は壊蓋である。全体に薄く、端部の成形も薄く折り返されている。

第6項 小結

8区では7区に引き続き伽藍南側の築地塀及び門扉について調査を行ったが、いずれの痕跡も見出すことはできなかった。SK8-1は底部に遺物が多量に堆積しており、大規模な遺物廃棄遺構と考えられるが、金堂の南側は寺院の正面となるべき位置であり、性格について類例を踏まえて検討する必要がある。

第10節 9区

第1項 調査の目的

9区は、7区の東壁で検出した、互層に堆積する落ち込みの延びについて調査を行うために設定した。また御藍南側の築地塀 SA1の東側延長部分の検出についても試みた。

第2項 調査の経過

平成28年度に7区の東壁際に3m四方の試掘坑を設けた結果、大型の土坑1基を検出した。この土坑と対となる遺構がさらに東側に存在すると想定して、平成29年度に東側に調査区を拡張した。その結果、大型土坑が3基並んでおり、さらに東に延びる可能性が予想されたため、平成30年度に調査区を南東方向へ拡張し調査を行った。

第3項 層序

公園の造成土、現代の耕作土の下層には瓦を多く含む遺物包含層(6層)が広がっている。また調査区西側には緩やかな落ち込みが南北方向に延びており、この落ち込みに7層が堆積している。また7区の東壁で検出した互層上の堆積については、9区では確認できなかった。

第4項 遺構

9区では土坑9基を検出した。これらについてそれぞれ概要を述べたのち、組み合うものについて検討を行う。

SK9-1(第33図)

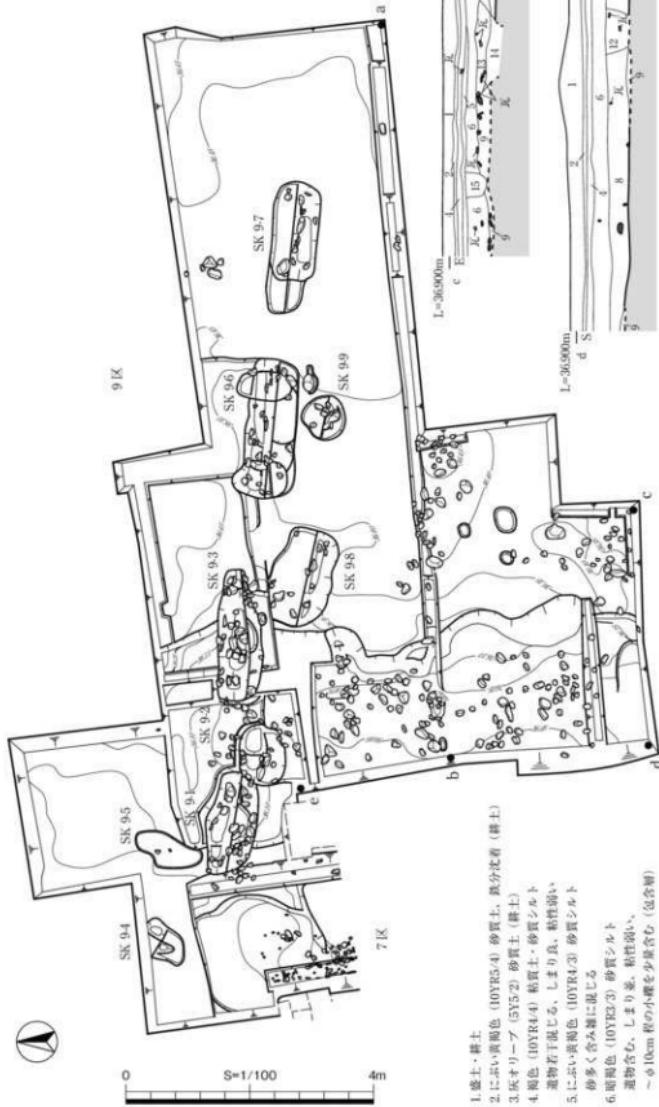
《検出》7区東壁際で検出した土坑である。こぶし大の礫を多量に含むため包含層を掘削時に遺構を認識することができた。《覆土》半裁した結果、柱痕跡が残る柱痕であることがわかった。西側の掘方は若干互層状に堆積しているが、しまりは弱く突き固めた様子は認められない。《形状・規模》東西方向に延びる柱穴である。掘方の規模は東西2m、南北1m、深さ1mを測る。また掘方の底部は東側と比べて西側が緩やかに傾斜しており、柱を据える際に斜路を設けたと考えられる。柱痕の直径は約30cmである。《遺物》掘方埋土より平瓦及び丸瓦が出土している。《時期・性格》瓦が出土していること及び土坑の軸方向が東から南に8°振れることから、再建段階以降のものであると考えられる。

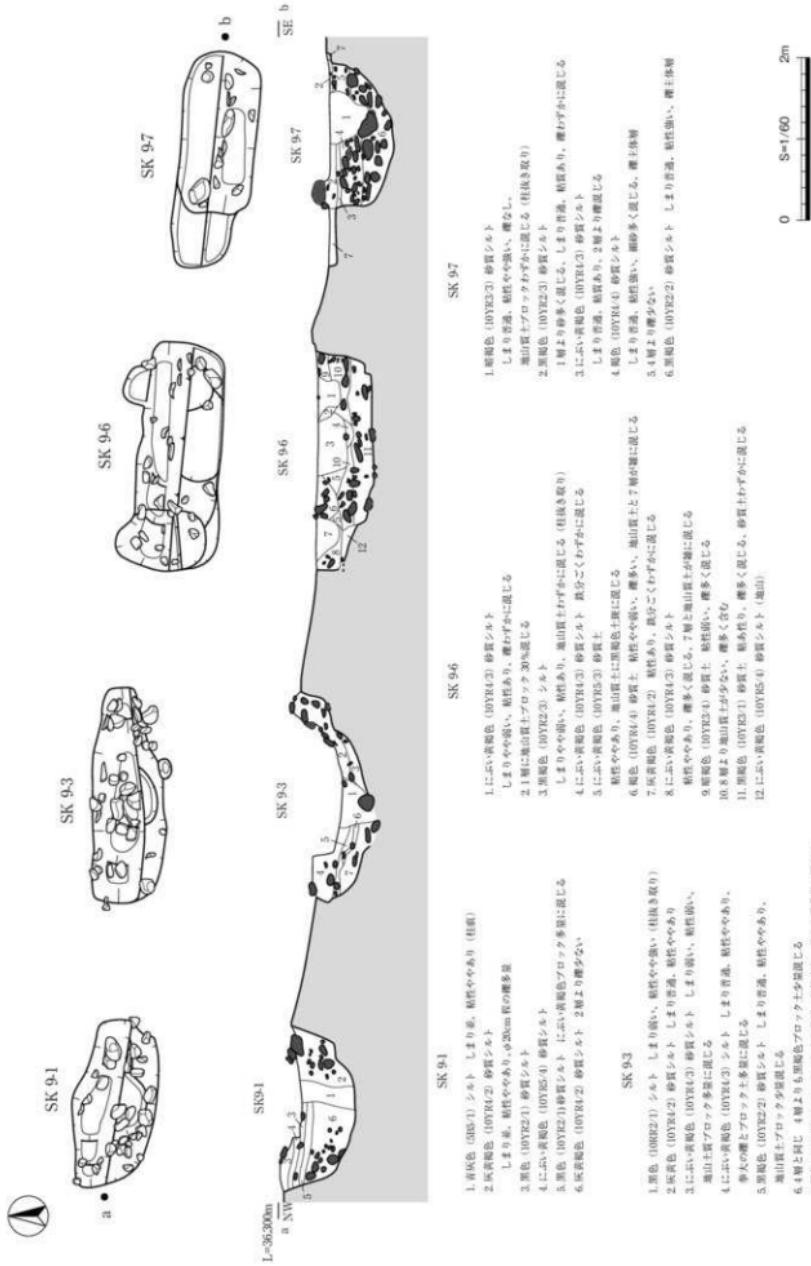
SK9-2(第34図)

《検出》SK9-1の南東側で検出した。当初は複数基の土坑が重なり合っていると考えたが、断ち割った結果1基の土坑であると判断した。SK9-1と切り合い、SK9-2が切る。《覆土》SK9-1と比べ掘り込みが浅いが、黒褐色粘質土の柱抜き取り痕と考えられる1層と、拳大の礫を多量に含む柱掘方埋土(2・3層)に分けられる。《形状・規模》南北1m、東西1.2mの隅丸方形プランで、掘り込みは約30cmと浅い。《遺物》礫が検出面まで下げた位置に集中している。遺物量は少ないが、平瓦の小片が出土している。《時期・性格》SK9-1を切り、再建段階以降であることは確実と考えられる。

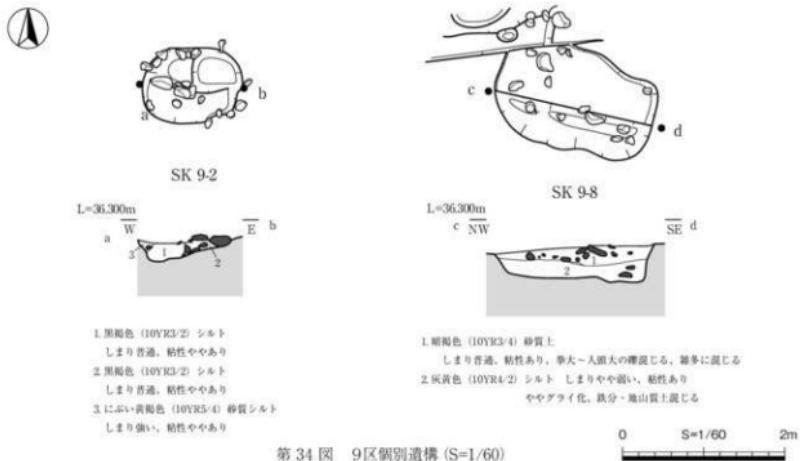
SK9-3(第33図)

《検出》9区の西側で検出した南北方向の落ち込みを検出する中で、部分的に礫が集中する箇所があったため、SK9-1と対になる土坑が存在すると予想し、落ち込みを掘り下げつつ検出を行った。落ち込みと土坑の覆土は礫の量のほかに識別は困難であり、最終的には落ち込みを地山面まで下げた時点で、明確に土坑のプランを認識した。そのため、遺構を検出したのは落ち込みの上層であるが、検出面より掘り下げた段階で記録を行っている。なお、半裁して記録を行ったが、下層は礫が密集しており、礫を外すことによって遺構を破壊する恐れがあったため、柱の抜き取り痕跡を確認した時点で掘り下げを中止している。《覆土》調査区西壁の7層の上面から掘り込まれている。柱の抜き取り痕跡が認められる。掘方はSK9-1と同様若干互層状に堆積し、礫を多量に含む。とくに1層の下層には大型の礫が円形に凹んで据えられており、柱を支えるためのものと思われる。《形状・規模》東西2.6m、南北

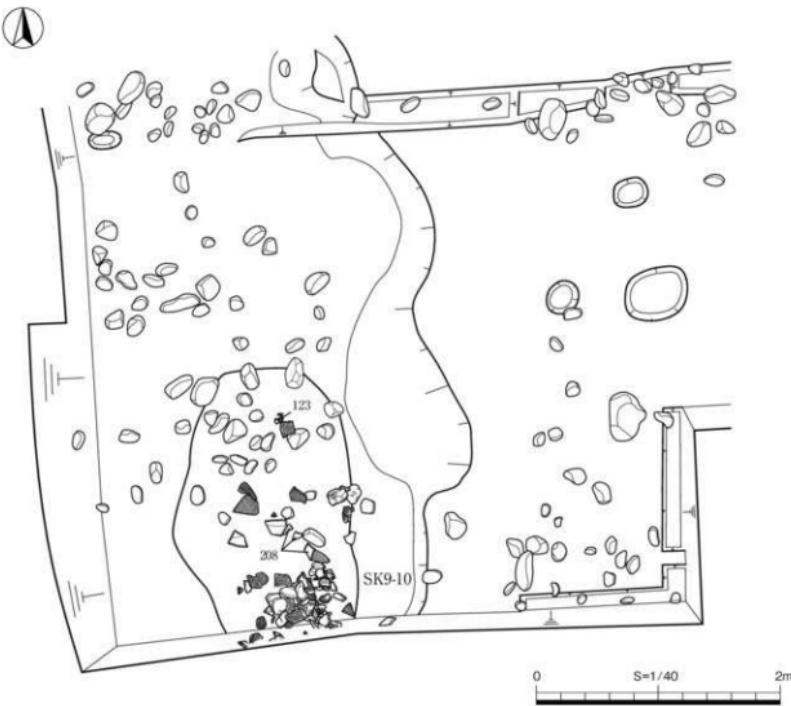




第33回 9区個別構造(S=1/60)



第34図 9区個別遺構 (S=1/60)



第35図 9区遺物出土状況図 (S=1/40)

1mの東西方向に長い土坑である。掘方から東側に斜路を設けて柱を据えているようである。《遺物》掘方埋土より平瓦及び須恵器の坏蓋の小片1点が出土している。《時期・性格》SK9-1と対になると考えられ、再建期以降に比定されるものである。

SK9-4

《検出》7区の北端で第1期調査時のトレンチの南端を検出しており、埋戻し土を掘削したところ、土坑状のプランの一部を検出した。そのため、調査区を拡張し遺物包含層を掘削した結果、プランの大半を検出することができた。《覆土》平面の精査においては、柱痕は確認できなかった。《形状・規模》北端は調査区外に延びるため不明であるが、長軸1mほどの土坑である。北東-南西に長軸をもつ隅丸方形プランである。《遺物》平瓦の小片3点が出土している。《時期・性格》時期の特定に至る遺物は見つかっていない。後述するSK9-5と対となる場合、並ぶ方位から再建期以降と考えられる。

SK9-5

《検出》9区の北側について、調査区を拡張したところ検出した。SK9-1などと比べ規模が小さく、SK9-4と対となると予想したため、検出のみで調査を終了した。《覆土》掘り下げていないため堆積状況は不明である。柱痕は確認できなかった。《形状・規模》2基が重なり合うか、柱を抜き取った痕跡か判断できなかったものの、北東-南西方向にやや不整形に延びる。長軸1.4m、短軸0.6mである。《遺物》検出した際に、覆土中より平瓦片1片及び土器の小片が出土している。《時期・性格》覆土に瓦片が含まれているため、寺院創建期以降である。SK9-4と組み合うならば、並ぶ方位から再建期以降と考えられる。

SK9-6(第33図)

《検出》平成29年度調査時に調査区南東隅の壁際で礫が集中しており、SK9-1及びSK9-3と同一直線上かつほぼ等間隔に位置していることから、東側に拡張トレンチを設けた。その結果、3基以上の土坑のプランが確認できたものの、調査区を拡張した限られた範囲であったため切り合いなどは把握できなかった。平成30年度にはさらに南側に大きく調査区を広げた結果、全容を確認することができた。複数のプランが重なり合っており、平面では十分に判断を行えなかっただが、半裁した結果、3基の柱穴と判断した。《覆土》底部は西側で段差があり、東側が1段低くなっている。この東側の底部全体に11層が堆積していることから、11層が堆積している範囲について大きく掘方を設け、底部を整地していると考えられる。3層は最も古い段階の柱を抜き取った痕跡で、4層は柱のあたりと考えられる。5・6・9・10・11層はこの柱痕跡に伴う掘方埋土である。1層と7層が1段階新しい柱穴であり、それぞれ2層、8層が伴う掘方埋土である。この後出す2基の前後関係は特定できなかった。《形状・規模》東西方向に長軸を持つ柱穴である。長軸2.8m、短軸1mの隅丸方形から楕円形をなす。当初の柱穴はおよそ東西2.2mの掘方をもつものと考えられる。《遺物》遺構の規模に対して遺物量はごくわずかである。須恵器坏身や土器の小片が数点出土している。《時期・性格》SK9-1及びSK9-3と同一直線上に並ぶ一連のものである。後出する柱穴の時期及び性格については判断できなかった。

SK9-7(第33図)

《検出》平成30年度に調査区の東側を拡張し、重機で表土を掘削した際に、大型の礫が露出したため、SK9-6の東側に列をなす土坑が存在すると予想し、周辺を地山まで掘り下げたところ明確なプランを検出した。当初は検出したプランの西側に重複する土坑状のプランを検出したが、5cmほど段下けしたところ、地山土が露出したため遺構とは認定しなかった。《覆土》SK9-6と同様に、掘方を大きく設け、底部を整地している(6層)。1層は柱の抜き取った後と判断した。掘方埋土のうち西側は互層上の堆積を意識しているようであるが、東側は雑多に埋められている。全体に礫が多く含まれる。《形状・規模》東西方向に長軸を持つ土坑である。長軸2m、短軸0.9mの

隅丸方形プランである。《遺物》弥生時代後期ごろの甕の口縁部の小片が出土している。また内外縁ともにハケ目調整を施す甕の小片が掘方より出土している。《時期・性格》SK9-1、SK9-3及びSK9-6と同一直線上に並ぶ一連のものである。

SK9-8(第34図)

《検出》SK9-3の南側に対となるものが存在すると予想して、平成30年度に調査区を拡張した際に検出したものである。SK9-3の南東隅が重なり合っており、平面精查と断面観察によってSK9-8が新しいものと判断した。また当初は不整形なプランであったため複数の土坑が重なっていると予想したが、検出と半裁の結果単一の土坑と結論付けた。《覆土》上下2層に分層した。上層中央には拳大の礫が集中しているが、柱を据えた痕跡は確認できなかった。《形状・規模》東西2m、南北1.2mの土坑で、北東隅はやや方形になる不整形な土坑である。《遺物》丸瓦片1点が出土している。《時期・性格》切りあいからSK9-3より後出するものであり、SK9-2と組み合うと考えられる。

SK9-9

《検出》SK9-6の南側に対となるものが存在すると予想して、平成30年度に調査区を拡張した際に検出したものである。遺構覆土と地山土の色調が近似していたものの、礫が比較的多く含まれており、半裁した結果、遺構となると判断した。《覆土》小礫をやや多く含む單層と判断した。中央が落ち窪むため柱穴と予想したが、柱を据えた痕跡は確認できなかった。《形状・規模》直径1mほどの円形プランである。中央が段上に落ち窪む。《遺物》遺物は出土していない。《時期・性格》遺物から時期は特定できない。SK9-2及びSK9-8と同一直線上に並ぶ。

組み合う柱穴について

SK9-1、9-3、9-6、9-7が同一直線状に並ぶことから、一連の遺構と判断した。これらと南北に組み合うものは確認できなかった。これらの柱穴の柱間の距離は、SK9-1とSK9-3及びSK9-6とSK9-7の間で3.6m(12尺)、SK9-3とSK9-6の間で4.8m(16尺)となる。またこれらの柱穴は柱の太さに対して非常に大型の掘方を持ち、礫を多数入れて柱を支えている。また掘方の底部に整地を行った後に柱を立てることも共通している。

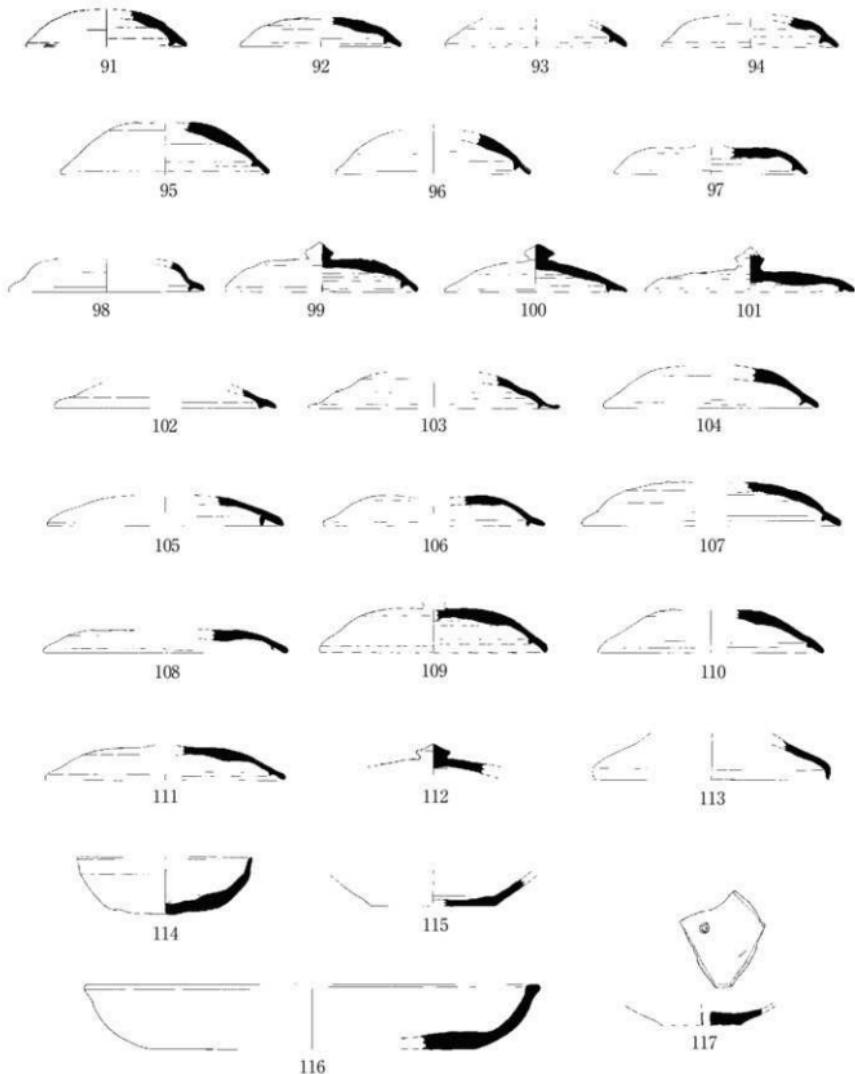
この柱穴列の性格については、主要伽藍の南側に位置し、中央の柱間が若干広く取られていることから、門の可能性が高いと考えられる。門の構造については、南北にそれぞれ4基ずつ控柱が並ぶ八脚門と予想して調査を行ったが、南北に対となる柱穴が見つからなかった。控柱は礎石立ちであったものがすでに削平されており痕跡を留めていないと想定すると、門の構造については、中央の2本柱による棟門、薬医門または八脚門等が想定される。

遺物溜り SK9-10(第35図)

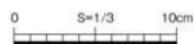
《検出》調査区西側の南北方向に延びる落ち込みを掘削する際、南壁付近で遺物が多量に集中している箇所が認められたため、その箇所について遺物を取り上げつつ検出を行った。その結果、若干鉄分の沈着が多い遺構覆土のプランの内側に遺物が集中している事が分かった。また南壁で上層から切り込んでいる事が確認できたため、遺構と判断した。《覆土》調査区南壁の13、14層である。下層はブロック土と遺物を多量に含む。《形状・規模》鉄分の沈着がやや多く遺物が集中する範囲を記録した。不整形なプランであるがおおむね南北2m以上、東西約1.5mの範囲に遺物が集中する。《遺物》創建期の瓦が多量に出土している。また「女子像が線刻された瓦塔(208)」や、内外縁に赤彩を施した暗文土師器(123)が出土している。暗文は中央が螺旋、外側に右斜方向の放射状暗文である。《時期・性格》SK9-3などと同じく6層から切り込み、再建期以降と考えられる。

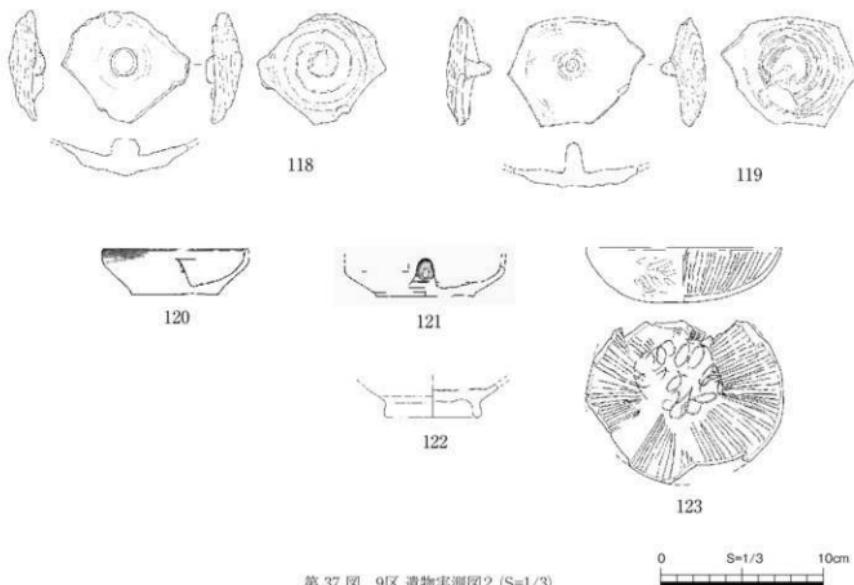
第5項 遺物

須恵器は返しの残る、7世紀の中頃から後半頃の壺蓋が落ち込みを中心に出土している。壺身がわずかしか出土していない事と対照的であり、他の調査区と比べても特徴的である。117は椀の底部であるが、中央に焼成前に穿孔されている。または118から119は蓋の形態をなすが、底部が突出し竈局状に削り取られるような特徴的



第 36 図 9区 遺物実測図1 (S=1/3)





第37図 9区 遺物実測図2 (S=1/3)

な成形をしており、類例を探しえなかった。120と121は中央に突起がある平底の土師器であり、煤が付着することから灯明皿として用いられたものと考えられる。また包含層中より鉄滓及び瓦塔が出土している。

第6項 小結

9区では柱穴列4基を検出し、中門と推定した。ただし南北に対となる柱の跡を確認できなかったため、構造の特定にまでは至らなかった。この他、須恵器杯蓋が突出して出土していることや、暗文土師器、類例を見出しづらい蓋状の土器など、やや特殊な遺物が出土しており着目される。

第4章 遺物

遺物のうち瓦及び瓦塔についてここで整理する。但し、瓦については生産地である能美市湯屋窯の報告及び末松庵寺跡の第1期調査報告書等で分類が行われており（村上ほか2009）、これに倣う。また第1期調査で出土した瓦の観察等は行なうことができておらず、ここでは第2期調査時に出土したものとの観察で特に気づいた点を述べ、総体的な評価については、別稿で行なうこととした。したがって、掲載したものは、出土地点に関わらず残存率が良いもの及び制作技法等において特徴的なものを抽出しており、必ずしも出土瓦全体の傾向を示すものではない。

第1節 平瓦

平瓦の大半が、凸面に斜格子叩きを施したのち、その痕跡を消さずに残す。木立氏らにより4分類されている。

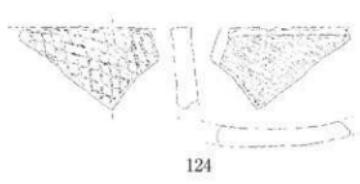
I類は須恵質のもので、横長の斜格子叩きがほぼ隙間なく施される。格子叩き目は消されずに残され、凹凸両面に面取りを施す。II類は概ねI類の特徴と共通するが、酸化焼成による「赤瓦」である。硬質に焼成されたものはII類とすることができたが、焼成が甘くI類とII類の判別ができなかったものも多い。III類はI・II類と異なり格子叩きの方向が縦長となる。叩き板の傷の進行によりさらに細別されている。I・II類と比べ厚みが薄く、焼成も若干甘いものが多い。IV類はIからIII類と大きく異なり、凸面の叩き目を横方向に撫で消すものである。凹面は縦方向の削りで布目を消し、面取りは行われていない。

I類とII類はそれぞれ後述する軒丸瓦の第1～2段階と第3段階に対応すると考えられている。湯屋窯で焼成されたと考えられるが、焼成された窯は発見されていない。III類は第4段階の軒丸瓦と共に湯屋B-1号窯で焼成されており、I・II類とくらべ時期的にわずかに後出し、創建時の鐘に葺かれた瓦の補修用の瓦と位置づけられている。

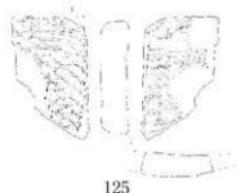
I類からIII類については、凸面に縦ハケまたは横ハケ調整の後に叩き調整を施すものがあるが（124、157）、I類では叩き調整の後に板状または櫛状の工具によって櫛描き状の痕跡を残す補足的な調整を行なうものが一定数確認できる。回転台を利用して横方向に施すもの（125、147、151、155）や、縦方向に施されるもの（128等）などがある。また凹面についても糸切痕や布目を残すものが大半であるが、縦方向の削りなどで布目を消し取るもののが確認できた（131、135、141、149、157）。

面取りについては凹凸面ともに行なわれているものが大半であるが、20mmから30mm前後の幅広いものと5mmから10mm前後の狭いものが確認できる。面取りの幅は個体差が非常に大きく、工人差や、I類がII類やIII類と比べて幅が広く丁寧であるものが多いことから、時期差に起因する可能性があるが、十分に検討しえなかつた。IV類については3区の遺物包含層より出土した144と9区の遺物層まで出土した161の2点のみ出土が確認できた。

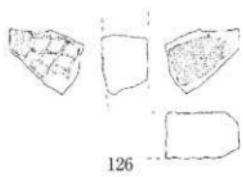
また道具瓦については第1期調査では確認されていないが、今回8区で隅切の平瓦1片が出土した（159）。平瓦I類に属するものを、焼成前に隅を切り落としている。8区の土坑SK8-1から出土したものであり、金堂に近接する瓦だまりであることから、創建期の金堂の屋根構造について、寄棟造りや入母屋造りであったことをうかがわせる資料である。



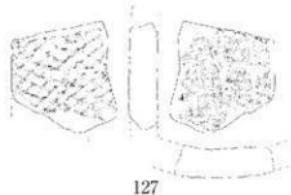
124



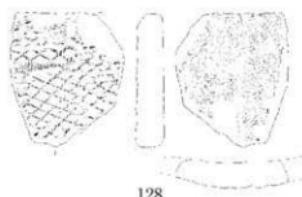
125



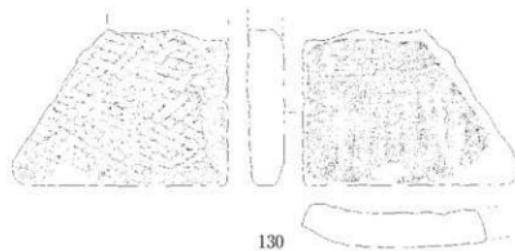
126



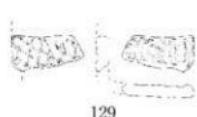
127



128



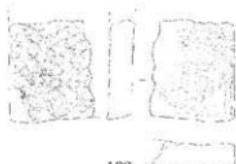
130



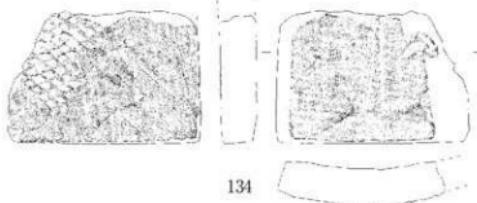
129



131

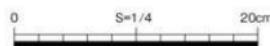


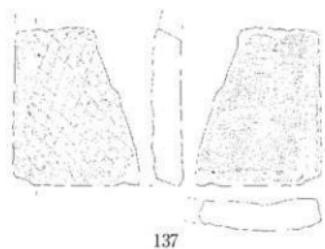
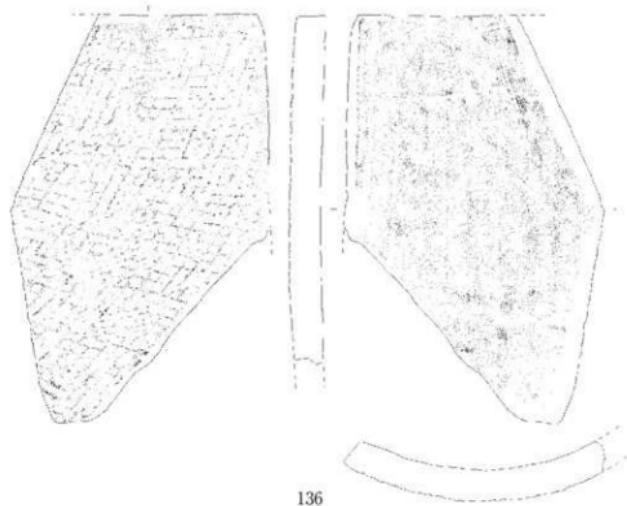
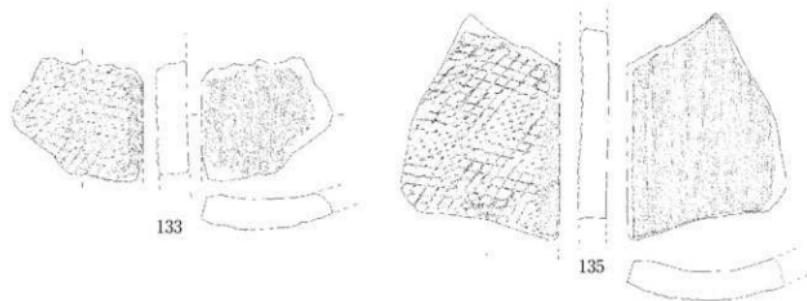
132



134

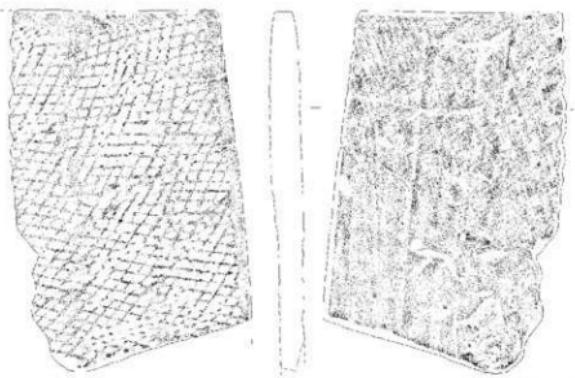
第38図 平瓦実測図1 (S=1/4)



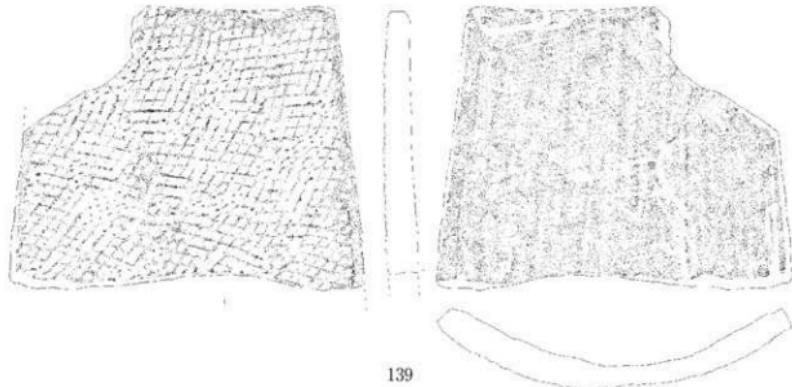


第39図 平瓦実測図2 (S=1/4)

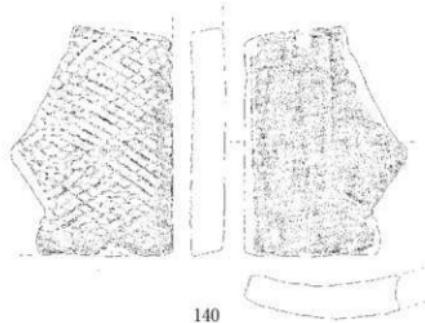




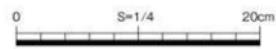
138

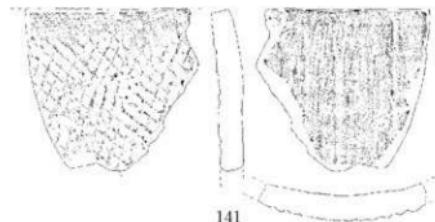


139

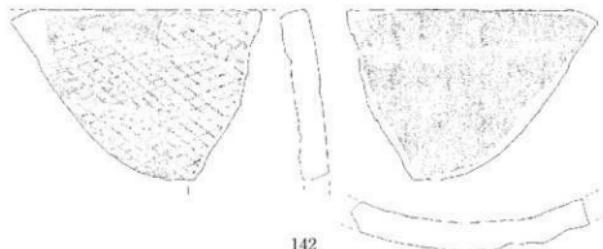


140

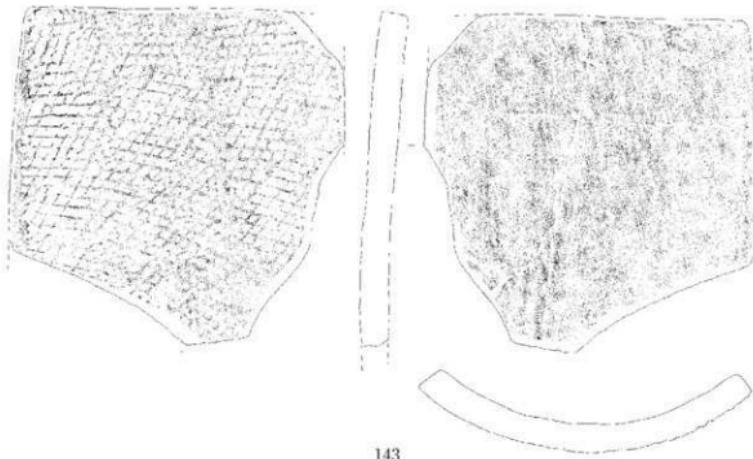
第 40 図 平瓦実測図3 ($S=1/4$)



141

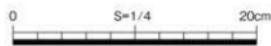


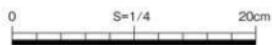
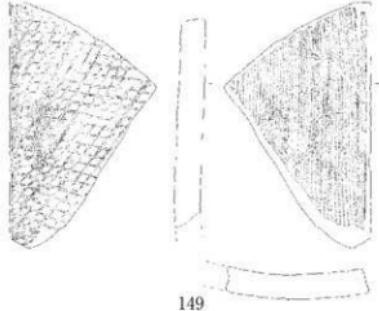
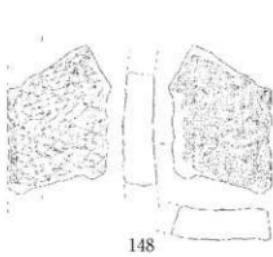
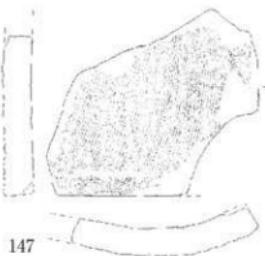
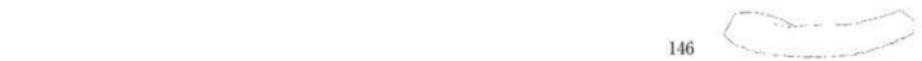
142



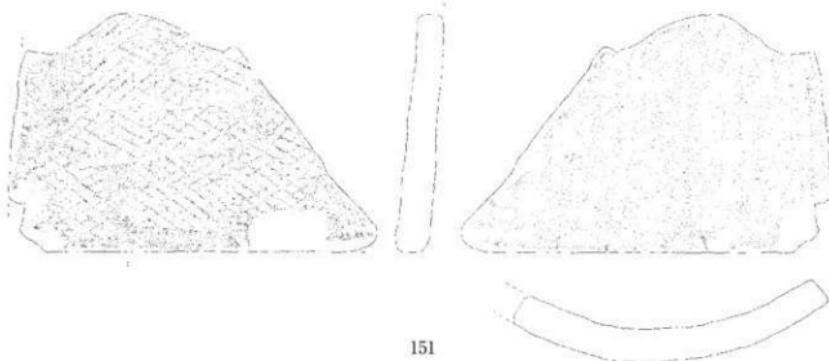
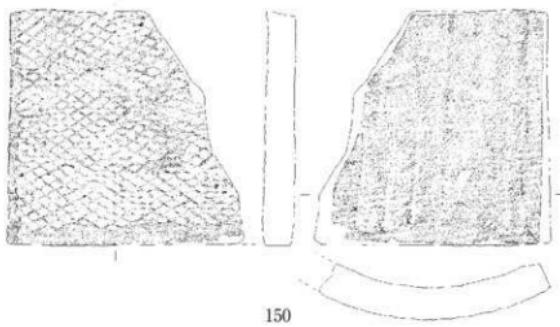
143

第 41 図 平瓦実測図 4 ($S=1/4$)

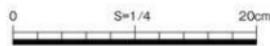


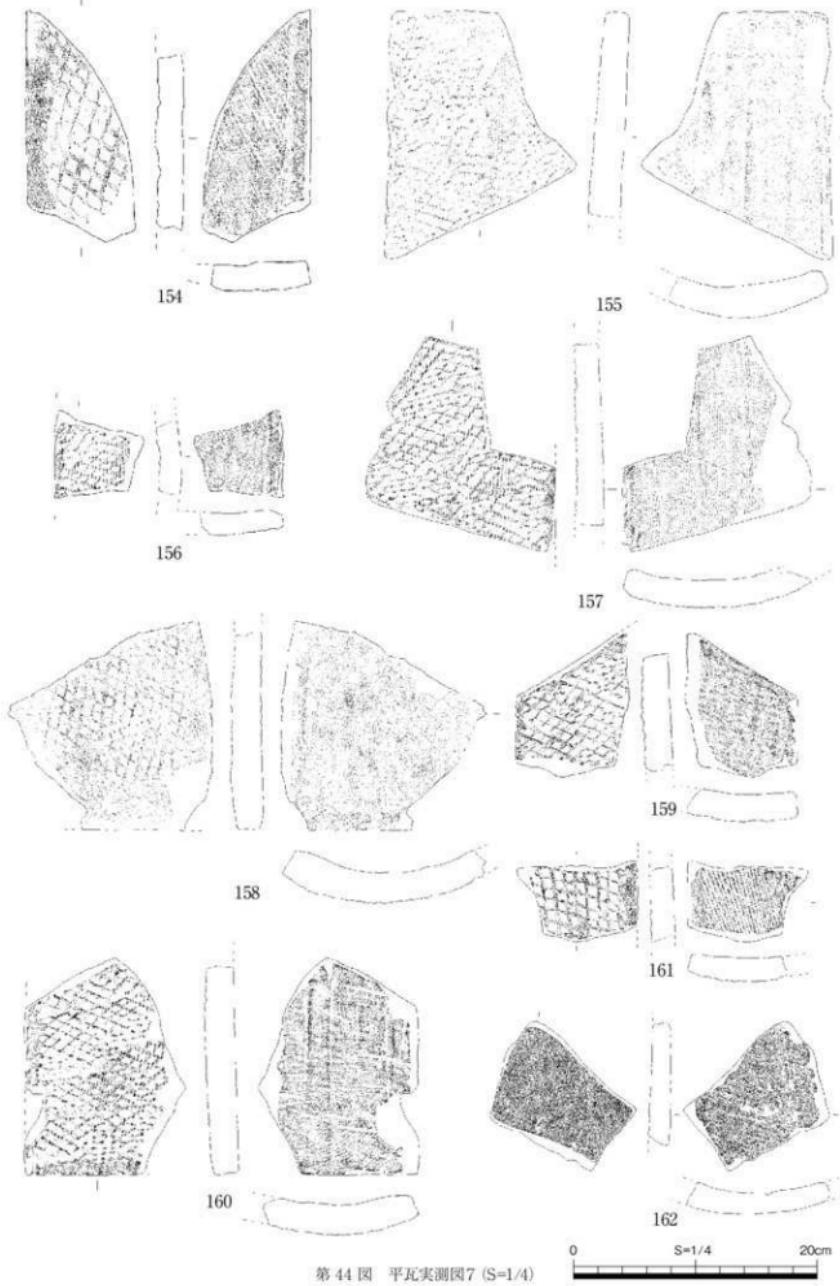


第42図 平瓦実測図5 (S=1/4)



第43図 平瓦実測図6 (S=1/4)





第44図 平瓦実測図7 (S=1/4)

第2節 丸瓦

丸瓦についても木立ら氏によって平瓦と対照させる形で4分類されている。丸瓦の出土量は平瓦と比べて少量であり、実測した点数も16点にとどまる。

I類は須恵質のもので、凸面の調整は撫でや削りなど様々であるが、叩いた痕跡は留めない。II類は土師質のもので、凸面の調整はI類と同様である。III類は凸面にカキ目調整を施したもので、施す方向や密度から4分類されている。IV類はIからIII類と胎土が異なり、面取りを行わないなど、I～III類と大きく異なる。第2期調査では出土していない。

丸瓦の中には、一辺9mm程度の方形の釘穴を焼成前に開けているもののが存在する。釘穴があけられるものは軒丸瓦の瓦当が接合するが、軒丸瓦であっても釘穴が設けられていないものも存在する。

丸瓦III類の中で凸面全体にカキ目が及ぶd類は、平瓦III類と同じ湯屋B-1号窯で焼成されたものである。そのため、丸瓦III類は平瓦III類と同様に時期が下るものと考えられている。

このIII類の凸面に施されたカキ目調整について、173はカキ目調整が縦方向のナデ調整によって消されている様子が観察できる。I類の中にもカキ目調整ののちナデ消されているものが存在すると考えられる。一方、171はナデ調整のうちに縦横の櫛状の工具によるカキ目調整を補足的に施すものであり、特に端部に回転させつつ施す点など平瓦I類の125や147など製作技法が類似するものである。ただし平瓦III類でこのような調整のものは確認できており、丸瓦III類と平瓦I類及びIII類の対応関係について再考する必要がある。

第3節 軒丸瓦

軒丸瓦は、第1期調査で川原寺式のものが1点出土している(179)ほかは、すべて同範とされている。六弁單弁蓮華文で、中央に1+4+8の蓮子を持つ。最大の特徴は外区に2重の鋸歯文が施される点であり、この文様は後続する加賀市弓波磨寺で確認されるほかに系譜をたどれるものではなく、末松庵寺の建立と共に作られたと考えられる。範の改修を行いつつ1つの範で作られていることから、瓦の製作に強い継続性を見出すことができる。

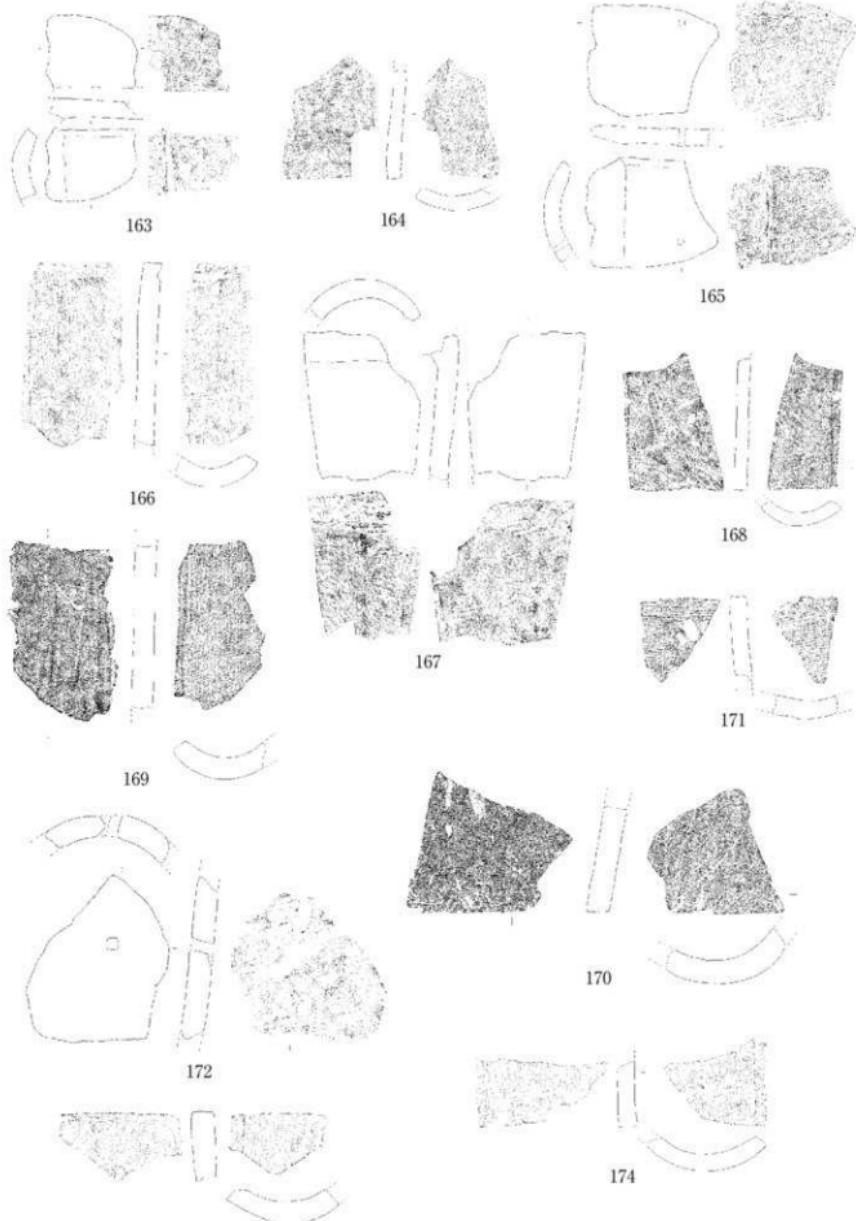
軒丸瓦は範衙の進行により4段階が設定されている。そのうち4段階は末松庵寺跡ではみつかっていないが、湯屋B-1号窯で焼成されたことがわかっている。湯屋B-1号窯は須恵器専業の下層(湯屋窯1段階)と、瓦陶兼業の上層(湯屋窯2段階)があり、湯屋窯1段階が飛鳥編年Ⅲ期の終末期とされている(木立ほか1985)。末松庵寺跡で出土している1～3段階の瓦を焼成した窯は確認されていないものの、湯屋窯2段階より遡り、寺院の創建時期の下限を示す。

第2期調査でみつかった軒丸瓦はいずれも残存度が低く、特に範の補修の目安になる外区の周縁が観察できるものは少ない。183や185は瓦当の厚さが約4cmと厚く周縁や花弁の彫り込みが薄い、1段階のものである。182は瓦当の厚さから3段階、180と181も花弁がやや高くふくらみ3段階に属するものと考えられる。181は中房が剥離しており、185は花弁が剥離している。これらは範に粘土を詰める手順に起因するものであると考えられる。

軒丸瓦の出土量は丸瓦や平瓦と比べ極端に少ない。また川原寺式軒丸瓦は第2期調査では出土しなかった。

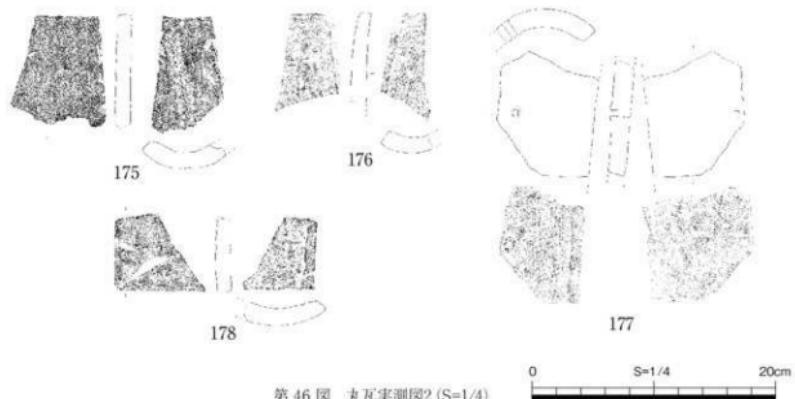
瓦分類対応表

軒丸瓦	平瓦	丸瓦	備考
1段階	I類	I類	金堂創建瓦
2段階	I類	I類	
3段階	I・II類	I・II類	
4段階	III類	III類	軒丸瓦は窯のみ出土 金堂補修瓦

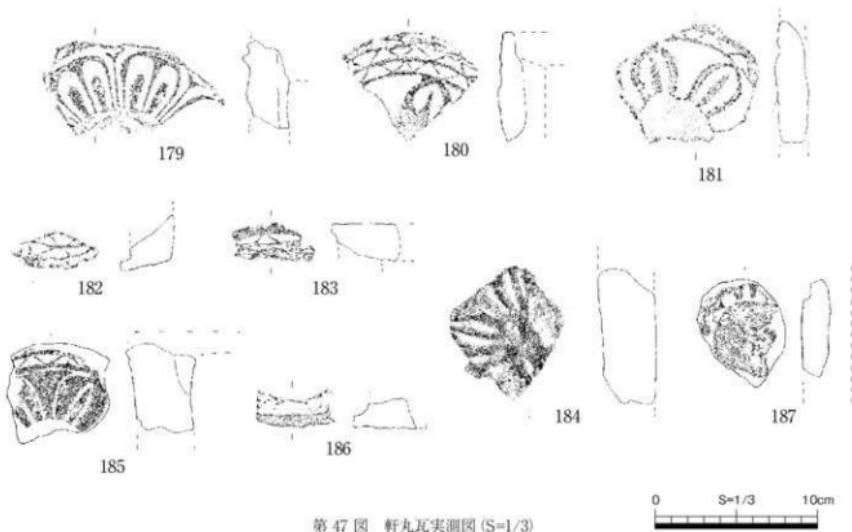


第45図 丸瓦実測図1 (S=1/4)

0 S=1/4 20cm



第46図 丸瓦実測図2 (S=1/4)

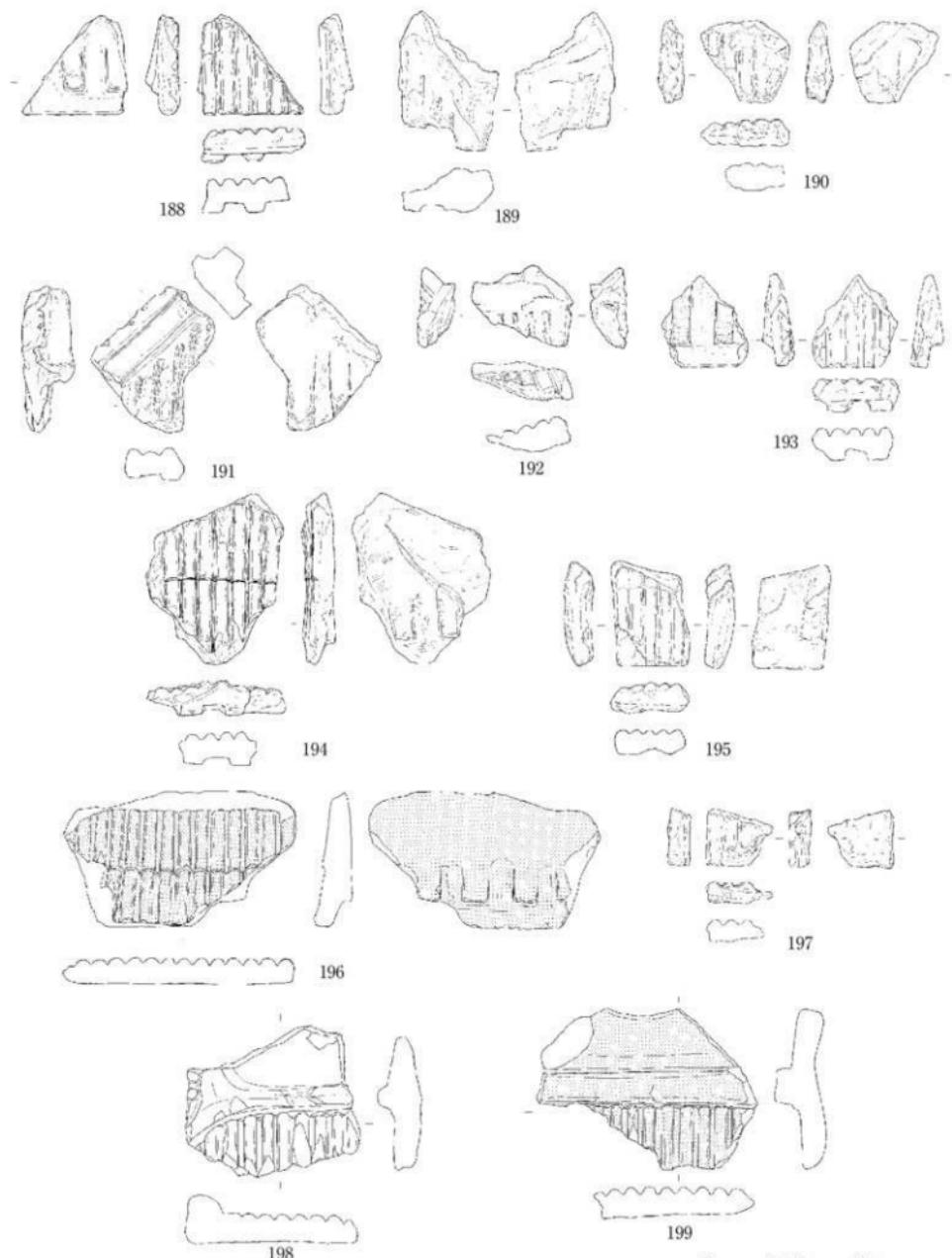


第47図 軒丸瓦実測図 (S=1/3)

第4節 瓦塔

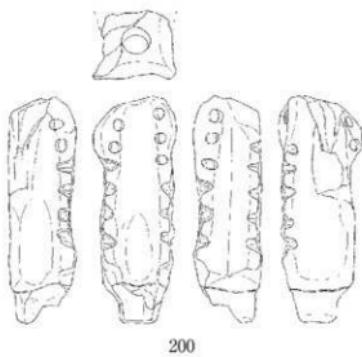
第1項 末松庵寺跡から出土した瓦塔について

平成30年度に9区において「女子像が線刻された土製品」が出土した。この土製品は瓦塔の軸部初層であり、人物像が刻まれた瓦塔としては全国初の出土例として大きく報じられた。また、本報告書を作成する過程において、第1期調査時に出土した瓦塔片のうち未報告となっている資料が存在していることが明らかになった。ここでは、未報告であった資料も含めて末松庵寺跡から出土した瓦塔片について再整理した上で、線刻された女子像について若干の考察を行う。

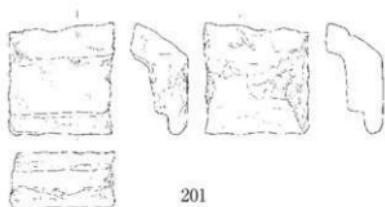


第48図 瓦塔実測図1 ($S=1/3$)

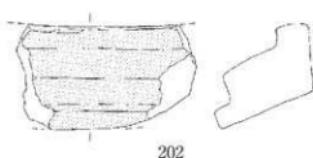
0 S=1/3 10cm



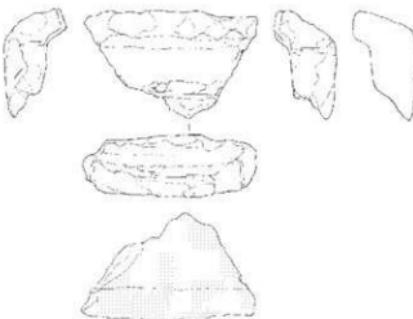
200



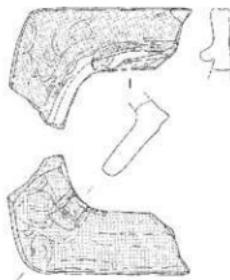
201



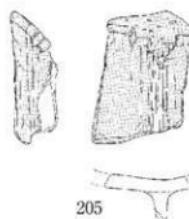
202



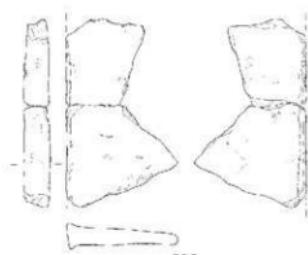
203



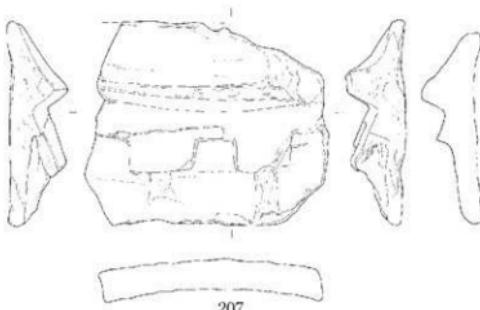
204



205

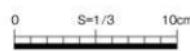


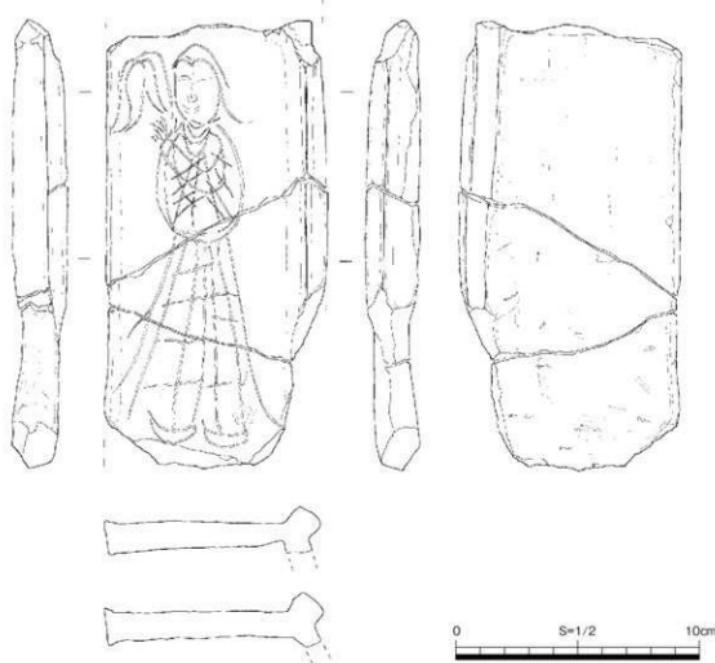
206



207

第49図 瓦塔実測図2 (S=1/3)





208

第 50 図 出土瓦塔実測図3 (S=1/2)

瓦塔は第1期調査で7点が報告されているほか、9点が未報告となっていた。また第2期調査で4点が出土しており、計20点が出土している。第1期調査および第2期調査における出土位置は、塔周辺及び塔の東側の4区が17点と大半を占めるほか、9区で3点が出土している。

末松廃寺跡から出土した瓦塔を部位ごとに見ると、屋蓋部が11点と最も多い。このほかに水煙部分が1点、基壇部分が4点、軸部初層部分が2点、その他の軸部が2点である。いずれもやや焼成の甘い土師質で、建物の柱を模した部分にはベンガラによる赤彩が施されている。(註1)

このうち206については軸部に屋根部分と思われる表現がみられるが、全体にやや円筒状に湾曲するもので、他の資料とはやや様相が異なる。七尾市能登国分寺跡などでも円形が軸部の瓦塔が出土しており、これらと同じものであったとするならば、末松廃寺跡では軸部が円筒状のものと方形のものが存在していたと考えられる。

北陸の瓦塔については、善端直氏による編年(善端1994、1997)がある。善端氏は、垂木や瓦、隅棟と隅木の表現などを基準に、4段階に分類している。それによると北陸における瓦塔の初現は、8世紀第3四半期であり、加賀及び能登地城では8世紀の末から9世紀にかけて盛行する。その中で、末松廃寺跡で第1期調査の際に出土したものを2段階(8世紀第4四半期から9世紀第2四半期)の中でも新段階に位置付けている。

次に末松廃寺跡で出土した資料について特徴をまとめる。屋蓋部の瓦の表現は半円状に内湾する工具によって引き出されるもので、善端氏編年の1段階から2段階まで認められるものである。垂木については粘土板を補充し

たのちに削り出するもので、同じく1段階から2段階にかけて認められる。2段階の中で削り出された垂木の奥行が長いものを古段階、短いものを新段階としており、古段階には上荒屋遺跡（金沢市）や下開発E遺跡（能美市）出土品を挙げている。末松庵寺跡出土品については、上荒屋遺跡例などより1段階下るものとみられていたが、今回未報告資料も含めて資料を再整理する中で、190や192など垂木の削り出しが2.5cmから3.3cmと奥行の長いものが含まれていることが判明した。

また善端氏が第1段階の指標としている出桁の表現は認められない。以上のことから、末松庵寺跡から出土した瓦塔は2段階古段階（8世紀第4四半期）まで遡る可能性がある。

瓦塔の胎土に海綿骨針は含まれず、石英や長石の粒が目立つ。表面に現れる砂粒の量などでわずかに個体差があるものの、胎土によって瓦塔を分類するには至らなかった。

第2項 女子像が線刻された瓦塔軸部初層について

線刻された瓦塔は、縦19cm、横9.5cmで、人物像の頭頂部から靴までが欠けることなくまとめて出土している。9区の南壁際の遺物溜りから出土しており、寺院創建期の瓦が共伴している。また隣接して出土している瓦塔は207のみであり、同一の瓦塔であったとは考えにくい。このため、別の場所に置かれていた瓦塔から、この絵が描かれていた部分のみ持ち出されていた可能性が高いと考えられる。

線刻された人物像は、表情からは女性であると考えられる。手に房状の物を持ち、鼻が高く浅い履（靴）を身に着けている。上半身は楕円で表されており、腕や指の表現もやや粗雑である。下半身には縦縞の裳を身にまとっているようであるが、上衣の表現はあいまいであり、襟の前後も不明である。髪は結い上げられていないようであり、額には白毫と思われる点が刻まれている。

この女性が手にしているものは、払子^{ほっす}である可能性が最も高いと考えられる。払子を手にする女性が描かれた、考古資料としては高松塚古墳（奈良県明日香村）の石室に描かれた壁画や青谷横木遺跡（鳥取市）で出土した板絵など7世紀から8世紀代のものがある。また弥勒菩薩について述べた仏典である「觀弥勒菩薩上生兜率天經」には、弥勒菩薩に仕える宝女（天女）が手に白い払子（白払）を持ち侍立することが書かれたり、仏画にも表現されている（泉1997）。末松庵寺跡から出土した瓦塔は高松塚古墳壁画などより時期的に下るものであり、また古墳壁画が葬送儀礼に伴うものである一方、瓦塔は仏教信仰と直接的に関係するものでありやや性格が異なる。このことから、今回出土した女子像については、弥勒菩薩に使える天女を描き表したものではないかと考えられる。

弥勒信仰は日本に仏教が伝来した頃よりすでに伝わっていたものである。その中で、死後、弥勒菩薩が住む兜率天に上り救われるために行うべき善行（六事法）の1つに「敬塔」があり、塔を掃き清め供養することが挙げられている。瓦塔は木造の塔を建てる代用として安置されたものと考えられてきたが、今回の線刻画によって、瓦塔が弥勒上生信仰に由来するものである可能性を示すものとして重要である（註2）。

出土した絵について美術史的観点から十分に検討を加えることができなかつた。絵の雰囲気は平安期の仏画等とは若干異なるという指摘があり（註3）、瓦塔の作られた年代を考古学的に考究するとともに、美術史学や服飾史の視点からさらに検討を加えることが今後の課題である。

（註1）赤色顔料の鑑定については、高妻洋成氏、脇谷草一郎氏、柳田明進氏（独立行政法人奈良文化財研究所理藏文化財センター）の協力を得た。また写真の撮影については、中村一郎氏（独立行政法人奈良文化財研究所）の協力を得た。

（註2）線刻された人物像の評価については松村忠司氏（独立行政法人奈良文化財研究所所長、野々市市道路整備委員会委員）に多くのご教示を得た。

（註3）内藤栄氏（奈良国立博物館学芸部長）のご教示による。

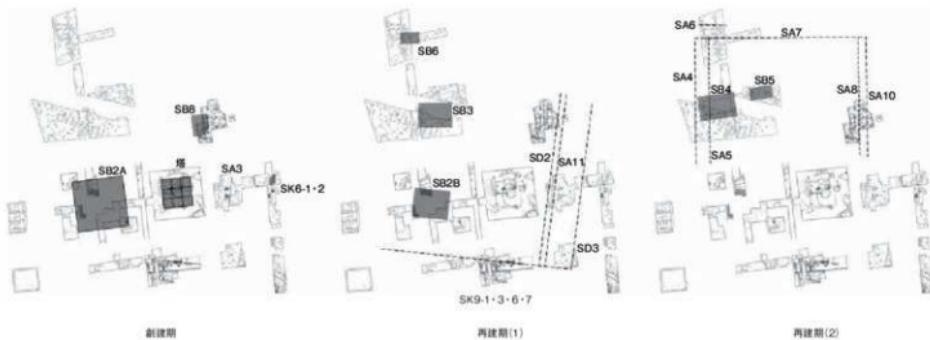
第5章 総括

第1節 調査成果の総括

第2期調査では、第1期調査で明らかになった区画施設の再検討を目的として調査を行ったが、おおむね堀の痕跡をとらえることはできなかった。創建期の伽藍については1区の自然流路と6区の大型の土坑を東西限として概ね96mと考えられるが、南北長については不明である。東側の築地堀は掘込地業を行わておらず後世に削平され痕跡を留めない可能性が高く、西側については自然流路が区画施設として機能していると考えた。その他の創建期の遺構としては轆轤支柱穴SA3や堅穴建物SB8などがある。SB8については次節で考察する。

また9区の大型柱穴列は再建期の門の可能性があると評価したが、建物構造については結論付けることができなかつた。3区や4区でも再建期の欄列がみつかっており、9区でみつかった柱穴列は4区でみつかった欄列SA11とほぼ直行する方位で並んでいるが、そのほかに組み合うものは確認できなかつた。一方、3区でみつかっている欄列SA8及びSA10は、第1期調査でみつかっている欄列SA4及びSA5とはほぼ並行する。

これらをまとめて区画施設について再検討したものが以下の図である。再建期以降は2時期の柵列を検出した。再建期(2)については、さらに細分することができる。



第51図 遺構変遷図(縮尺任意)

第2節 堅穴建物SB8について

3区で出土した堅穴建物SB8の時期及び性格についてここで再度取り上げる。

このSB8は伽藍域内に創建期の塔および金堂と軸を同じくして存在しており、寺院造営の設計を意識したものである。その床面から出土した遺物は概ね7世紀中ごろのものと考えられる。

この建物については、「青野型住居」の特徴を持つものである。青野型住居は丹波地域を中心に分布する堅穴建物で、方形プランの南東隅を掘り残して内側に突出させ、カマドを設置する特徴を持つ。石川県内では望月精司氏らが分析しており、末松庵寺跡周辺では末松遺跡や三浦幸明遺跡、北安田北遺跡等でその一群と考えられるものがみつかっている(望月2007)。

この類型の住居址が寺院の伽藍域内に設けられていることから、寺院の造営に移民集団が関わっていたと考えられるが、近江系とみられる土師器甕が出土していることから、吉岡康暢氏が指摘するように、複数の出自の移民集団が混在していたと考えられる(村上ほか2009)。

第3節 末松庵寺跡の評価について

末松庵寺跡の建立を中心とした手取川扇状地扇尖部の開発については吉岡氏や望月氏が考察を行っている（村上ほか 2009、望月 2007）。これらの評価に第2期調査の成果を加え、末松庵寺跡の造営された背景について再検討したい。

吉岡氏は、末松庵寺跡を含む7世紀代の手取川扇状地の開拓について、①「在来の拠点集落からの分出民」のほか、②「隣接地域からの移民」、③「渡来系を含む遠来の移民を主体とする計画（開拓）村進出」に依存する比重が高く、特に7世紀後半は②及び③が中心であったと述べている。

煮炊具や堅穴建物の構造から移民集団の分析を行った望月氏は、末松庵寺跡を含む手取川扇状地の南東部は近江系の移民集団が主体であり、そのほか丹波系や朝鮮系の移民が居住域を分けつつ集住しており、この移民集団の集住を律令初期の中央主導型の地域支配政策の表れとみている。この移民集団や開発と末松庵寺の造営を結びつけるならば、末松庵寺の造営には国家の影響を受けたと考えられるが、末松庵寺の軒丸瓦の文様が中央の寺院の系譜を直接引くものではない独自のものが用いられていることを考慮しなければならない。

一方、梶原義実氏は、7世紀第3四半期から8世紀初頭の寺院造営の背景の一つとして、地方有力者の寺田としての既得権益の確保を挙げている（梶原 2017）。末松庵寺跡の建立は末松遺跡に大規模な集落が形成される時期よりわずかに遅り（柿田ほか 2005）、開拓により得られる経済的基盤を公有化されることなく確保することが寺院を建立する目的の1つであったことも一因として考えられる。但し、瓦塔の存在など、平安期以降も寺院として維持されていることから、経済的側面が寺院建立の要因として存在したとしても、宗教的側面は当初から保持していたと考えられる。

また軒丸瓦の瓦当文様については独自性が高いものであるが、丸瓦及び平瓦の製作技法などから瓦の製作技術の伝播経路について検討することができるのではないかと考えられる。特に移民集団の故地である近江や丹波地域との比較検討によって、今後さらに末松庵寺の建立と手取川扇状地の開発の結びつきについて明らかにすることが課題の1つとして残される。

（引用文献）（発掘調査報告書については主要なものを除き割愛した）

泉 武夫。1997「異色の弥勒菩薩画像—弥勒図像の一系譜—」『学叢』第19号、京都国立博物館。

柿田祐司ほか。2005『末松遺跡』石川県埋蔵文化財センター。

梶原義実。2017『古代地方寺院の造営と景観』吉川弘文館。

船野義夫。1993『石川県地質誌』石川県。

木立雅朗ほか。1985『辰口湯屋 古窯跡』辰口町教育委員会。

善端 直。1994「北陸の古代瓦器」『文化財学論集』文化財学論集刊行会。

高崎光司。1989「瓦塔小考」『考古学雑誌』第74巻第3号、日本考古学会。

野々市町史編纂委員会編、『野々市町史』通史編。

村上謙一ほか。2009『史跡 末松庵寺跡』文化庁。

望月精司。2007「北陸西部地域における飛鳥時代の移民集落」『日本考古学』23号、日本考古学協会。

第1表 土器観察表

報告番号	調査区	年次	器種	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	調整(外)		残存率	焼成	備考	実測番号
							調整(内)	色調(外)				
1	I区	3次	土師器 椀	114	34	44	ナデ	浅黄橙	口縁部 1/3	甘	内面に煤 回転系切口	52
							ヨコナデ	浅黄橙				
2	I区	3次	土師器 椀	110	29	50	ナデ	褐	口縁部 2/9 底部 完形	やや甘	回転系切口 内面に付着物あり、漆か	53
							ヨコナデ	褐				
3	I区	5次	土師器 椀	112	30	46	ヨコナデ	灰白	口縁部 1/3	やや甘	回転系切口	62
							ヨコナデ	浅黄橙				
4	I区	3次	土師器 皿	116	25	60	ヨコナデ	浅黄橙	口縁部 1/5	甘		46
							ヨコナデ	浅黄橙				
5	I区	3次	土師器 椀	106	60	46	ヨコナデ	浅黄橙	口縁部 1/9 底部 完形	甘	回転系切口	58
							ヨコナデ	灰白				
6	I区	3次	土師器 小型椀	105	32	50	ヨコナデ	褐	口縁部 4/9	やや甘	回転ヘラ切口	60
							ヨコナデ、ヘラケズリ	浅黄橙				
7	I区	3次	土師器 内削肩(有台)			70	ミガキ	黑	底部 完形 高台 全周	良	外面部に煤 海綿骨針微量	59
							ヨコナデ	灰白				
8	I区	3次	土師器 椀(小皿)	108	30	44	ヨコナデ	浅黄橙	口縁部 1/4 底部 全周	やや甘	回転系切口	43
							ヨコナデ	浅黄橙				
9	I区	3次	土師器 椀	110	32	53	ヨコナデ	浅黄橙	口縁部 2/3	並		47
							ヨコナデ	褐				
10	I区	3次	土師器 椀	106	31	40	ヨコナデ	褐	完形	やや甘	海綿骨針微量	48
							ナデ	褐				
11	I区	3次	土師器 椀	112			ナデ	にぬ・橙	口縁部 1/6	並	海綿骨針多い	49
							ナデ	淡橙				
12	I区	3次	土師器 小型椀	106	37	36	ナデ	褐	体部 完形 口縁部 5/6	甘	海綿骨針微量	50
							ナデ	褐				
13	I区	3次	土師器 椀			57	ナデ	灰白	台部分 完形	やや甘	貼付け高台	54
							ナデ	灰白				
14	I区	5次	土師器 椀			60	ヘラケズリ、ナデ	浅黄橙	底部有台 1/4	並	貼付け高台	61
							ナデ	浅黄橙				
15	I区	3次	土師器 内黒椀	154	55	72	ヨコナデ	浅黄橙	口縁部体部 1/2 底部 完形	一	外面に煤 貼付け高台	51
							ヨコナデ、ミガキ、 黒褐色	黑褐色				
16	I区	5次	土師器 小型椀	112	28	44	ヨコナデ	にぬ・黄橙	口縁部 2/9 底部 完形	並	回転系切口 海綿骨針微量	64
							ナデ	にぬ・黄橙				
17	I区	5次	土師器 有台椀	113	42	64	ヘラケズリ、ナデ	浅黄橙	口縁部 1/3 底部有台 3/4	一	貼付け高台 海綿骨針微量	63
							ヨコナデ、ミガキ	黑褐色				
18	I区	5次	土師器 内黒椀	120			ヨコナデ	浅黄橙	口縁部 1/6	良	外面に煤	65
							ヨコナデ、ミガキ	黑褐色				
19	I区	3次	土師器 皿			58	ヨコナデ	浅黄橙、褐	底部 完形	並	外面に赤彩	55
							ナデ	浅黄橙				
20	I区	3次	須恵器 輪か			48	クロナデ	灰黄	底部 完形	甘	回転系切口	56
							ナデ	灰黄				
21	I区	5次	須恵器 有台环	104	36	76	クロナデ、ヘラナデ	灰	口縁部 2/9 底部 1/6	良		66
							クロナデ	灰				
22	2区	3次	須恵器 蓋	120	35		クロナデ	灰白	口縁部 1/12	良		67
							クロナデ	灰白				
23	2区	3次	須恵器 壺			88	クロナデ	灰白	壺部 1/4	良	沈縫 内面体部に煤	68
							クロナデ	灰白				
24	3区 SB8	6次	須恵器 蓋	110	27	18	クロナデ	灰白	はざま完形 つまみ部欠損	一	外面に自然釉、砂粒多い	12
							クロナデ	灰白				
25	3区 SB8	5-6次	須恵器 环蓋	114	30	18	クロナデ	灰白	口縁部 2/3 つまみ部3/4	一	外面に自然釉、砂粒多い	13
							クロナデ	灰白				
26	3区 SB8	5-6次	須恵器 环	94	33	60	クロナデ	灰	口縁部 1/3 底部 1/4	良	底部へラ起こし	5
							クロナデ	灰白				
27	3区 SB8	6次	須恵器 小型甕	132			クロナデ	灰白、灰	口縁部 1/9 体部 1/9	良		14
							クロナデ	灰				
28	3区 SB8	5次	須恵器 長脂板			37	クロナデ	暗灰	壺部 完形	良	沈縫あり	18
							クロナデ	暗灰				
29	3区 SB8	5-6次	須恵器 内黒甕	156			ヨコナデ、ヘラケズリ、ミガキ	褐	口縁部 1/4	良		26
							ヨコナデ	黑褐色				
30	3区 SB8	6次	須恵器 甕	144	130		ナデ、ハケメ、ヨコナデ	にぬ・褐	口縁部 小片壺部 1/12	やや甘		30
							ナデ、ハケメ、ヘラケズリ	にぬ・黄褐				
31	3区 SB8	6次	須恵器 甕	212	185		ヨコナデ、ハケメ	褐	口縁部 1/9	やや良		31
							ナデ	褐				

報告番号	調査区	年次	器種	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	調整(外)		残存率	焼成	備考	実測番号
							調整(内)	色調(外)				
32	3区 SB8	6次	土師器 壺				ハケメ	浅黄橙	一	やや良	指頭圧痕	36
							ヘラケズリ、ナデ	にごり、橙				
33	3区 SB8	5-6次	土師器 壺				ハケメ	橙	体部径 2.9	良		36
							ハケメ、ナデ、ケズリ	橙				
34	3区 SB8	6次	土師器 壺				ハケメ	にごり、橙	一	良	指頭圧痕	37
							ナデ	にごり、橙				
35	3区 SB8	6次	土師器 壺	262	頂部径 234		ヨコナデ、ハケメ	浅黄橙	1/18	良	指頭圧痕	28
							ヨコナデ、ハケメ	浅黄橙				
36	3区 SB8	6次	土師器 壺	160			ナデ、ハケメ	浅黄橙	口縁部 1.9	並		29
							ナデ、ハケメ	浅黄橙				
37	3区	5次	須恵器 壺	96	返し 4	つまみ径 14	ロクロナデ、ロクロケズリ	灰白	口縁部 1/2 つまみ完形	良	外面に自然輪	7
							ロクロナデ	灰白				
38	3区	4-5次	須恵器 壺	112	返し 3		ロクロナデ	灰白	口縁部 1/4	良	前面指頭圧痕 外面に自然輪、砂粒多い	8
							ロクロナデ	灰白				
39	3区	5次	須恵器 壺	120	返し 3		ロクロナデ	灰白	口縁部 1/4	並		10
							ロクロナデ	灰白				
40	3区 SB8	5-6次	須恵器 壺	173	頂部径 138		ロクロナデ、タキ、カキメ	灰	口縁部 ほぼ完形	良		42
							ロクロナデ	灰白				
41	3区	5次	須恵器 壺	170	返し 4		ロクロナデ、ヘラケズリ	灰	口縁部 1/3	良	前面中央指頭圧痕 外面に自然輪、砂粒多い	6
							ロクロナデ	灰白				
42	3区	5次	須恵器 环	136	36	60	ロクロナデ	灰白	口縁部 1/18	並	回転ヘア切り	1
							ロクロナデ	灰白				
43	3区	5次	須恵器 壺	166	返し 5		ロクロナデ	灰	口縁部 1/9	良	外面に自然輪 前面に削りか、砂粒多い	9
							ロクロナデ	灰白				
44	3区	5次	須恵器 壺	166	36	天井部径 80	ロクロナデ	灰白	蓋径 2/3 つまみ部 全周	良	砂粒多い	11
							ロクロナデ	灰白				
45	3区	5次	須恵器 环	124	42	40	ロクロナデ	灰白	口縁部 1/4 底部 ほぼ完形	やや甘	回転ヘア切り	4
							ロクロナデ	灰白				
46	3区	5次	須恵器 环	134	29	96	ロクロナデ	灰	口縁部 1/3 底部 1/3	やや良	回転ヘア切り	2
							ロクロナデ	灰				
47	3区	5次	須恵器 有台环	124			ロクロナデ	灰	口縁部 1/4	良	口縁内側にタール状付着物	3
							ロクロナデ	灰				
48	3区	5次	須恵器 有台环		90		ロクロナデ	灰白	底部 1/4	良	貼り付け高台 回転ヘラケズリ	17
							ロクロナデ	灰白				
49	3区	6次	須恵器 高环		104		ロクロナデ	淡黄	底部 7/9	良	砂粒多い	16
							ロクロナデ	淡黄				
50	3区	4-5次	須恵器 鉢	244			ロクロナデ	灰黄	口縁部 1/6	やや甘		15
							ナデ、ミナデ	灰黄				
51	3区	5次	土師器 赤彩施	172	41	84	ナデ、ミガキ	赤褐	口縁部 1/5	並~良	外側に赤彩	22
							ナデ、ミキ	赤褐				
52	3区	5次	土師器 椀	142			ヨコナデ	橙	口縁部 1/4	良	海綿骨針微量	20
							ヨコナデ	橙				
53	3区	5次	土師器 椀	128	36	53	ヨコナデ	浅黄	口縁部 1/3	甘	回転系切り	23
							ヨコナデ	浅黄				
54	3区	5次	土師器 皿		44		ヨコナデ	暗褐	底部 3/4	良	回転系切り	24
							ヨコナデ	にごり、褐				
55	3区	5次	土師器 灯明皿		53		ナデ	灰白	底部 1/3	やや甘	回転系切り 外側にタール状付着物	25
							ヨコナデ、ヘラケズリ	浅黄				
56	3区	5次	土師器 高环	174		(107)	ナデ、ミガキ、ヨコナデ	赤褐(赤彩)	口縁部 1/8	良	口縁部煤付着	21
							ナデ	浅黄(駆土)				
57	3区	5次	土師器 高环	110			ヨコナデ、ハケメ	にごり、橙	脚部 全周	やや甘	外側に赤彩	38
							ヨコナデ、ハケメ	にごり、橙				
58	3区	5次	土師器 壺	240	212		ヨコナデ、カキメ	にごり、橙	口縁部 1/12	良	指頭圧痕	27
							ヨコナデ、カキメ、ナデ	にごり、橙				
59	3区	5次	土師器 壺				タキ、カキメ	にごり、橙	体部 小片	良		32
							タキ、ナデ	にごり、橙				
60	3区	5次	土師器 壺	166	191	40	タキ、ナデ、ハケメ	橙	体部 小片	良		33
							タキ、ナデ	橙				
61	3区	4次	土師器 壺	108	4		回転ヨコナデ、ハケメ	浅黄	口縁部 3/4 体部 全周	やや良	指頭圧痕 底部全周	41
							回転ヨコナデ、ハケメ	浅黄				
62	4区	4次	須恵器 壺	108	4		ロクロナデ、ヘラケズリ	灰白	口縁部 1/9	良		80
							ロクロナデ	灰白				

報告番号	調査区	年次	器種	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	調整(外)		色調(外) 色調(内)	残存率	焼成	備考	実測番号
							調整(外)	調整(内)					
63	4区	4次	須恵器 有台环	128		72	ロクロナデ	灰白	台部分 1/4	—			81
64	4区	4次	須恵器 环				ナデ	灰白					79
65	4区	3次	須恵器 鉢	240		38	ロクロナデ	灰白	口縁部 1/18	良			70
66	4区	3次	須恵器 甕				ロクロナデ	灰					69
67	4区	4次	須恵器 瓶類	224		110	ロクロナデ	灰	高台部分 1/12	良			71
68	4区	4次	土師器 高环				ヨコナデ、ミガキ	明赤橙	口縁部 1/16	良	内外面赤彩		75
69	4区	3次	土師器 内黑施			64	ヨコナデ	にぶい黄橙	底部 ほぼ全周	良			74
70	4区	4次	陶器 椀				ミガキ	黒					
71	4区	4次	土師器 甕	120			ロクロナデ	緑施(泡)青施(オーバー)	口縁部 1/9	—	緑釉陶器		78
72	4区	4次	磁器 青磁施	184			ロクロナデ	緑施(泡)青施(オーバー)					
73	5区	4次	弦生土器 甕	200			ヨコナデ	灰白	口縁部 1/12	—			72
74	5区	4次	弦生土器 甕	196			ヨコナデ	灰白					
75	5区	4次	弦生土器 甕	170			ヨコナデ、ハケ	浅黄橙	口縁部 1/9	—	外面に煤付着 擬凹痕3~4条		82
76	5区	4次	弦生土器 甕	165			ヨコナデ、ケズリ	浅黄橙					
77	6区	5次	土師器 赤彩施	120			ヨコナデ	浅黄橙	口縁部 1/18	良			100
78	6区	6次	須恵器 甕	170	返し 65		ナデ	橙					
79	6区	5次	須恵器 蓋				ナデ、ケズリ	橙	口縁部 1/12	良	外面にタール状付着物 内面に煤・鉛分付着		85
80	7区	5次	須恵器 蓋	120	返し 35		ロクロナデ	灰白					
81	7区	5次	須恵器 环	120			ロクロナデ	暗赤褐	口縁部 1/9	良			101
82	8区	6次	須恵器 蓋	128	返し 5		ロクロナデ	黄灰					
83	8区	6次	須恵器 蓋	168			ロクロナデ	灰	口縁部 1/9	良	口縁内側にタール状付着物		88
84	8区	6次	須恵器 有台环				ロクロナデ	灰白					
85	8区	6次	須恵器 环	120			ロクロナデ	灰白	口縁部 1/18	良			93
86	8区	6次	須恵器 环	160			ロクロナデ	灰白					
87	8区	6次	須恵器 瓶類	80			ロクロナデ	灰	高台部 1/6	良	内面底に自然軸		90
88	8区	6次	土師器 环				ナデ	暗褐					
89	8区	6次	土師器 椀	62			ナデ、ヘラケズリ	暗褐	底部 1/4	甘	外面に煤付着 内面に炭化物・線維質		95
90	8区	6次	土師器 甕				ナデ	橙					
91	9区	6次	須恵器 蓋	100	返し 3		ロクロナデ、ヘラケズリ	灰	口縁部 1/4	良	外面に煤付着		121
92	9区	6次	須恵器 蓋	100	返し 3		ロクロナデ	灰					
93	9区	6区	須恵器 蓋	112	返し 3		ロクロナデ	灰	口縁部 1/5	—			125

報告番号	調査区	年次	器種	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	調整(外)		残存率	焼成	備考	実測番号
							調整(内)	色調(内)				
94	9区	7次	須恵器 蓋	108		返し 3	クロナデ、ヘラケズリ クロナデ	灰 灰	口縁部 1/7	—		134
95	9区	6次	須恵器 蓋	128		返し 3	クロナデ、ヘラケズリ クロナデ	灰白 灰白	口縁部 1/6	良	砂粒多い	122
96	9区	6次	須恵器 蓋	120		返し 3	クロナデ クロナデ	灰黄 灰黄	口縁部 1/12	甘	口縁内面に煤	127
97	9区	6次	須恵器 蓋	120		返し 3	クロナデ、ヘラケズリ クロナデ	灰白 灰	口縁部 1/5	—		128
98	9区	6次	須恵器 蓋	120		返し 4	クロナデ クロナデ	灰 灰	口縁部 1/7	—	口縁内面に重ね焼痕	130
99	9区	7次	須恵器 蓋	118	30	返し 35	クロナデ、ヘラケズリ クロナデ	灰白 灰白	口縁部 1/2	—	外面に自然軸 内面口縁部に一部煤付着	139
100	9区	7次	須恵器 蓋	114	29	返し 25	クロナデ クロナデ	灰白 灰白	口縁部 2/3	—	外面に自然軸	140
101	9区	6次	須恵器 蓋	130	26	つまみ径 18	クロナデ、ヘラケズリ クロナデ	灰白 灰白	口縁部 1/4	良	砂粒多い	120
102	9区	6次	須恵器 蓋	136		返し 3	クロナデ クロナデ	灰白 灰白	口縁部 1/12	—		124
103	9区	6次	須恵器 蓋	154		返し 2	クロナデ、ケズリ クロナデ	灰 灰	口縁部 1/9	—		126
104	9区	6次	須恵器 蓋	132		返し 35	クロナデ クロナデ	黄灰 灰	口縁部 1/7	—	かえし一部にタール状付着物	129
105	9区	6次	須恵器 蓋	146		返し 45	クロナデ クロナデ	灰 灰	口縁部 1/14	—	口縁内面に重ね焼痕	131
106	9区	7次	須恵器 蓋	136		返し 3	クロナデ、ヘラケズリ クロナデ	灰白 灰白	口縁部 1/9	—		135
107	9区	7次	須恵器 蓋	160		返し 3	クロナデ クロナデ	灰白 灰	口縁部 小片	—		136
108	9区	7次	須恵器 蓋	150		返し 2	クロナデ クロナデ	灰 灰	口縁部 1/7	—	口縁内面に重ね焼痕	137
109	9区	7次	須恵器 蓋	140		返し 2	クロナデ クロナデ	灰 黄灰	口縁部 1/5	—	つまみ剥離	138
110	9区	7次	須恵器 蓋	140		返し 2	クロナデ クロナデ	黄灰 灰	口縁部 1/12	—		133
111	9区	7次	須恵器 蓋	148		返し 2	クロナデ、ヘラケズリ クロナデ	鵝灰 鵝灰	口縁部 1/12	—		141
112	9区	6次	須恵器 蓋	つまみ径 21			クロナデ、ヘラケズリ クロナデ	灰 灰	つまみ部 3/4	—		132
113	9区	7次	須恵器 蓋	144		返し 6	クロナデ クロナデ	灰白 灰白	口縁部 1/4	—	外面に自然軸	142
114	9区	6次	須恵器 环	108	35	70	クロナデ クロナデ	灰白 灰白	口縁部 1/2	良	ヘラ切跡	119
115	9区	7次	須恵器 环			76	クロナデ クロナデ	灰白 灰白	底部 1/3	—		143
116	9区	5次 6次	須恵器 鉢	280			クロナデ、ヘラケズリ クロナデ	灰白 灰白	口縁部 1/9	良		118
117	9区	6次	須恵器 皿			49	ナデ ナデ	灰白、黄灰 灰白	底部 1/3	やや甘	同軸系切り 底部に穿孔あり	117
118	9区	6次	須恵器 蓋					浅黄 灰白	底部 全周	甘	中央につまみあり 底部螺旋状に渋曲する	113
119	9区	7次	土師器 蓋					黒 灰白	底部 全周	甘	中央に突起あり 底部螺旋状に渋曲する	114
120	9区	7次	土師器 灯明皿	90	28	54	ナデ ナデ	棕 棕	底部 全周 口縁部 1-9	良	中央に突起あり 口縁部外側に煤付着	115
121	9区	7次	土師器 灯明皿			60	ナデ、同軸ヘラ起こし ナデ	棕 棕	底部 3/5	良	中央に突起あり 内面に煤付着	144
122	9区	6次	土師器 有台环			60	ナデ ナデ	灰白 灰白、黒褐	台部 1/4 底部 全周	やや甘	貼り付け高台 黒いタール状の物付着	116
123	9区	7次	土師器 环	120	34		ヨコナデ、ミガキ ヨコナデ	明赤褐 棕	口縁部 1/2	良	内面に螺旋暗文、放射状暗文 内外面に赤彩	145

第2表 平瓦観察表

報告番号	調査区	調査年次 出土地点(グリッド)	色調		厚さ (cm)	重量 (g)	凸面刷毛 有・無	布目密度(縦・横) 本/1cmあたり	備考	実測番号
			凸面	凹面						
124	1区	3次 南側右隣郡	灰白	灰白	1.5	130	有	11/10	Ⅲ類 凸面ハケ→叩き 分割突帯有	1
125	1区	3次 第1期調査埋土	灰	灰	2.0	150	有	12/10	Ⅰ類 凸面叩き→縦から横方向の工具による櫛掻き状の調整 分割突帯有	3
126	1区	3次 T64	浅黄橙	浅黄橙	2.5	41	×	8/9	Ⅱ類	4
127	1区	3次 第1期調査埋土	にぶい黄 橙	にぶい黄 橙	2.3	236	×	不明	Ⅰ類	7
128	1区	3次 旧耕土	灰黄	灰黄	2.0	245	有	不明	Ⅰ類	9
129	1区	3次 第1期調査区埋土	灰白	灰白	0.8	20	×	不明	Ⅲ類 分割突帯有	13
130	2区	3次 南壁	灰白	灰白	2.5	743	×	13/10	Ⅰ類	15
131	2区	3次 側溝	灰	灰	2.4	400	×	不明	Ⅰ類 凹面工具による櫛掻き状の調整	16
132	2区	3次 旧耕土	灰白	灰	1.9	153	×	不明	Ⅰ類 凹面工具による櫛掻き状の調整	17
133	2区	3次 側溝	暗灰	暗灰	2.4	333	×	11/10	Ⅰ類	18
134	3区	5次 旧畠道側溝	灰	灰白	3.0	661	×	13/11	Ⅰ類	19
135	3区	4次 A29	灰	灰	2.3	689	×	12/10	Ⅰ類 凹面工具による櫛掻き状の調整	24
136	3区	5次 Y41	灰白	灰白	2.3	2000	有	12/10	Ⅰ類 凸・ハケ目跡く残る 分割突帯有	25
137	3区	5次 Y42	灰白	灰白	2.2	422	有	9/10	Ⅲ類A2 凸面横ハケ→叩き 分割突帯有	31
138	3区	5次 Z41	黄橙	黄橙	2.3	1570	×	不明	Ⅱ類	32
139	3区	5次 Y41	浅黄橙	浅黄橙	2.5	1870	×	11/9	Ⅱ類 分割突帯有	33
140	3区	4次 西壁	浅黄橙	浅黄橙	2.6	796	×	不明	Ⅲ類 粘土帯の痕あり 分割突帯有	34
141	3区	4次 Z39	浅黄橙	灰白	1.8	435	有	不明	Ⅲ類A3 凸面横ハケ→叩き	40
142	3区	5次 Z41	黄橙	浅黄橙	2.2	636	有	不明	Ⅲ類か 凸面叩き→部分的に工具による櫛掻き状の調整 叩き残しあり	41
143	3区	5次 Z41	浅黄	灰白	2.3	2345	×	不明	Ⅰ類 分割突帯有	42
144	3区	4次 Z39	灰白	灰白	2.3	426	×		Ⅱ類 凹面タテに削り	96
145	4区	4次 桂穴2-B石壁	灰黄	灰黄	2.9	124	有	不明	Ⅲ類 凸面叩き→工具による櫛掻き状の調整	47
146	6区	5次 6-2区B	灰	灰	3.0	1130	×	11/10	Ⅰ類	51
147	6区	5次 表土	灰	灰	2.2	552	有	不明	Ⅰ類 凸面叩き→縦横工具による櫛掻き状の調整 凹面工具による櫛掻き状の調整	52
148	7区	6次 東壁	灰	灰	2.3	286	×	不明	Ⅰ類 凹面横ケズり	53
149	7区	5次 32	灰	灰	2.1	524	×	不明	Ⅰ類 凹面縦に工具による櫛掻き状の調整あり	54
150	7区	5次 40	灰	灰	2.5	1330	×	12/12	Ⅰ類	3

報告番号	調査区	調査年次 出土地点(グリッド)	色調		厚さ (cm)	重量 (g)	凸面刷毛 有・無	布目密度(縦・横) 本/1cmあたり	備考	実測番号
			凸面	凹面						
151	7区	6次 47	浅黄橙	浅黄橙	27	1,690	有	不明	II類 分割突帯有	4
152	7区	5次 149	明黄褐	淡黄	17	280	×	13/11	Ⅲ類 分割突帯有	7
153	8区	6次 152	灰白	灰白	16	110	有	11/11	Ⅲ類 凸面横刷毛→叩き	9
154	8区	6次 79	灰	灰	12	142	有	14/10	Ⅲ類 凸面横ハケ→叩き	13
155	8区	6次 154	灰白	灰白	25	745	有	13/11	I類か 凸面叩き→工具による櫛掛け状の調整 凹面歯工具による櫛掛け状の調整	15
156	8区	6次 25	灰	灰	17	98	有	14/10	I類 凸面叩き→歯工具による櫛掛け状の調整 分割突帯有	16
157	8区	6次 包含層	灰	灰	21	536	有	12/9	I類 凹面叩き→工具による櫛掛け状の調整 凸面歯工具による櫛掛け状の調整 分割突帯有	17
158	8区	6次 包含層	灰	灰	24	835	有	14/11	Ⅲ類 凸面横ハケ→叩き→横ハケ 凹面部分的に工具による櫛掛け状の調整	18
159	8区	6次 包含層	灰	灰白	23	244	×	11/9	I類 横切り瓦	19
160	9区	7次 18	灰白	灰白	25	655	有	16/13	I類b 凸面叩き→歯工具による櫛掛け状の調整 分割突帯有	24
161	9区	7次 50	淡黄	淡黄	18	133	有	不明	Ⅲ類A2か 凹面歯工具による櫛掛け状の調整	25
162	9区	7次 SK9-10	灰白	灰白	16	212	×	不明	Ⅳ類 内面タテヨコにカキメあり	31

第3表 丸瓦観察表

報告番号	調査区	調査年次 出土地点(グリッド)	色調		厚さ (cm)	重量 (g)	凸面調整	布目密度(縦・横) 本/1cmあたり	備考	実測番号
			凸面	凹面						
163	2区	3次 細溝	灰	灰	22	195	横ナデ	11/9	内面ヨコにナデあり。 軒丸瓦	101
164	2区	3次 細溝	灰	灰	17	269	横カキメ	13/11		97
165	3区	5次 Z41	灰白・灰	灰	20	440	横ナデ、横 カキメ	14/12	内面タテにカキメあり。自然粒付着。 釘穴あり。軒丸瓦	98
166	3区	5次 Y42	灰	灰	22	582	横ナデ、横 カキメ	14/12		99
167	3区	5次 Y42	に赤い 縞赤灰	灰	26	659	横ナデ、横 カキメ	11/10	外側、横引けや斜めのナデあり。内面凹所に 縹引けあり。広葉部ヨコナデあり。のき穴との 接点もあり	100
168	4区	4次 R33	灰	灰	14	308	横カキメ	12/10	右上、内面斜めにカキメあり	102
169	7区	5次 79	灰白	灰白	25	627	縦剥り、横 ナデ	11/9	内面斜めにカキメあり。無面ボロボロ	103
170	8区	6次 L51	灰	灰	26	594	横ナデ、横 カキメ	12/9	内面斜めにカキメ	104
171	8区	6次 26	灰白	灰白	21	155	縦カキメ、横 カキメ	—	外側、指頭圧跡あり。内面ヨコにカキメあり	105
172	8区	6次 K52	灰白	灰白	21	340	不明	—	釘穴あり	106
173	8区	6次 K57	灰	灰	24	248	縦カキメ、横 カキメ	12/11	右上	107

報告番号	調査区	調査年次 出土地点(グリッド)	色調		厚さ (cm)	重量 (g)	凸面調整	布目密度(縦・横) 本/1cmあたり	備考	実測番号
			凸面	凹面						
174	8区	6次 包含層	灰白	灰	2.1	255	縦ナデ横カ キメ	13/10	外面斜めにカキメあり。左下、内面タテにカキ メあり	108
175	8区	6次 包含層	浅黄橙	淡黄橙	2.0	248	横ナデ、縦 カキメ	—		109
176	9区	7次 82 7次 106	灰白	灰	1.7	135	横カキメ	13/11	右上、内面斜めにカキメあり	110
177	9区	7次 J47	灰白	灰	2.1	352	縦ナデ	12/9	内面ヨコにカキメあり 鉄穴あり	111
178	9区	6次 包含層	橙	橙	2.0	148	横ナデ	10/8	右上	113

第4表 軒丸瓦観察表

報告番号	調査区	調査年次	出土地點	厚さ(cm)	重量(g)	備考	実測番号
179		第1期	AQ43K-001	32	150	川原寺式	114
180	3区	5次	Z42	22	70		115
181	3区	5次	Z41	22	100		116
182	3区	4次	AA42	33	55		117
183	7区	6次	I49	54	60		118
184	8区	6次		36	181	摩耗激しい	119
185	8区	6次	L54	43	147		120
186	8区	6次	L53	39	30		121
187	9区	7次	J48	18	50		122

第5表 瓦塔観察表

報告番号	調査区	調査年次	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	色調	備考	実測番号
188	V45	第1期	瓦塔	6.2	6.6	2.1	55.6	灰白	屋蓋部	104
189	C57	第1期	瓦塔	6.2	8.7	2.7	88.2	灰白	屋蓋部	109
190	U43	第1期	瓦塔	5.2	5.5	1.7	35.3	灰白	屋蓋部	107
191	塔	第1期	瓦塔	9.1	7.8	3.3	125.9	浅黄橙	屋蓋構部、赤彩付着	152
192	I56	第1期	瓦塔	5.0	6.3	2.4	39.8	灰白	屋蓋部	108
193	4区 R41	4次	瓦塔	5.7	5.3	2.0	39.5	灰白、赤橙	屋蓋部、部分的に赤彩付着	87
194	G59	第1期	瓦塔	10.7	8.6	2.2	107.8	灰白	屋蓋部、赤彩付着	151
195	B47	第1期	瓦塔	6.5	4.9	1.9	51.0	浅黄橙	屋蓋部	105
196	U47	第1期	瓦塔	8.1	13.8	2.2	172.0	浅黄橙	屋蓋部	既報告 49
197	S49	第1期	瓦塔	3.5	4.1	1.3	15	灰白	屋蓋部	106
198	R47	第1期	瓦塔	8.9	10.3	2.8	171.1	灰白	屋蓋部	既報告 51
199	S40	第1期	瓦塔	9.6	12.7	3.1	215	灰白	屋蓋部	既報告 48
200	不明	第1期	瓦塔	13.4	4.7	4.0	164.3	灰白	水煙	既報告 47
201	9区 K48	7次	瓦塔	6.9	6.5	3.5	137.9	灰白	基壇部	111
202	不明	第1期	瓦塔	7.2	101.5	4.0	274.0	灰白	基壇部	既報告 50
203	6区 S34	4次	瓦塔	6.7	10.7	3.9	163.1	灰白、明赤側	基壇部、軸すじあり、外面に赤彩	86
204	S42	第1期	瓦塔	7.3	10.1	2.5	92.4	浅黄橙	基壇部	既報告 66
205	Q47~49	第1期	瓦塔	8.2	5.8	2.7	68.9	浅黄橙	軸部	既報告 54
206	P50	第1期	瓦塔	11.6	6.9	1.7	102.1	灰白	軸部初期	110
207	9区 SK9~10	7次	瓦塔	12.6	15.2	3.7	420.0	浅黄橙	軸部か、円筒状	112
208	9区 SK9~10	7次	瓦塔	18.4	9.2	2.3	324.6	浅黄橙	女子像が縦列、外面赤彩あり	148



1区 全景（北から）



1区 遺物出土状況



1区 全景（南から）



1区 北壁（南東から）



2区 全景（北から）



3区 上層遺物出土状況 (H28)



3区 全景（南から）



3区 SB8床面遺物出土状況（南西から）



3区 SB9 (南から)



3区 SB9 P1 (南西から)



3区 SB9 P3 (南東から)



3区 SB9 P5 (北東から)



4区 全景 (南から)



4区 全景 (東から)



4区 SA3 P1 (南から)



4区 SA3 P2 (北から)



5区 全景 (南東から)



6区 SK6-1, 6-2 (南西から)



6区 SK6-1 (南東から)



6区 SK6-1 (北西から)



6区 SK6-2 (南東から)



6-2区 全景 (南から)



6-3区 全景 (北から)



7区 東壁 (北西から)



7区 西壁（南東から）



7区 南側全景



8区 SK8-I完掘（北西から）



9区 全景（北東から）



9区 全景（北西から）



9区 SK9-I（北から）



9区 SK9-2（北から）



9区 SK9-3（北西から）



9区 SK9-6 (北から)



9区 SK9-7 (南東から)



9区 SK9-8 (南から)



9区 遺物出土状況 (北から)



70



51



123



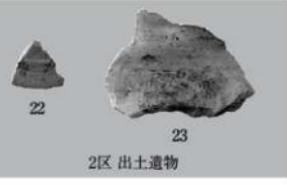
57



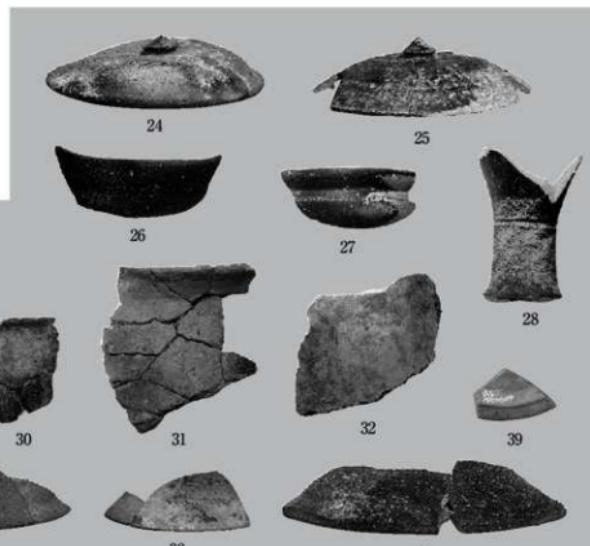
123



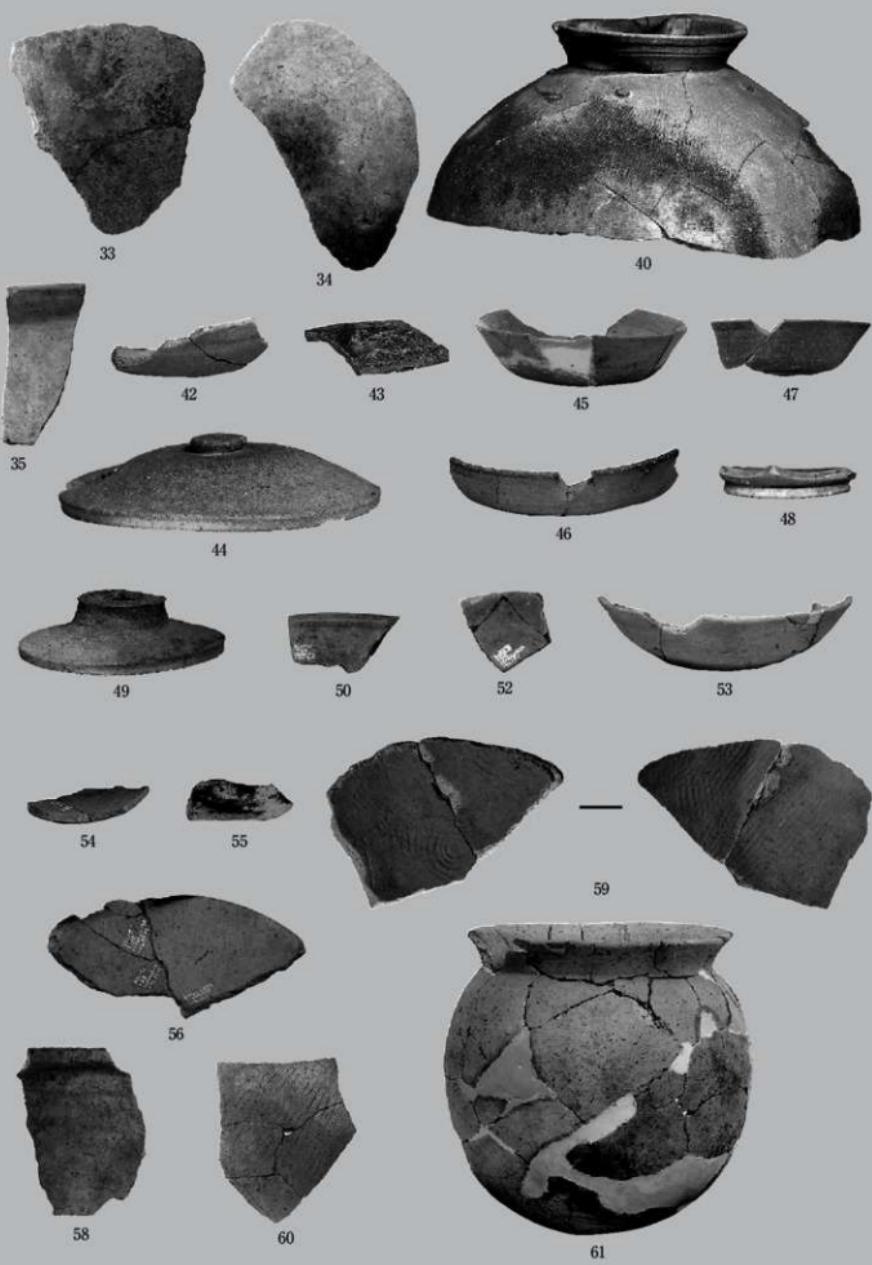
1区 出土遺物



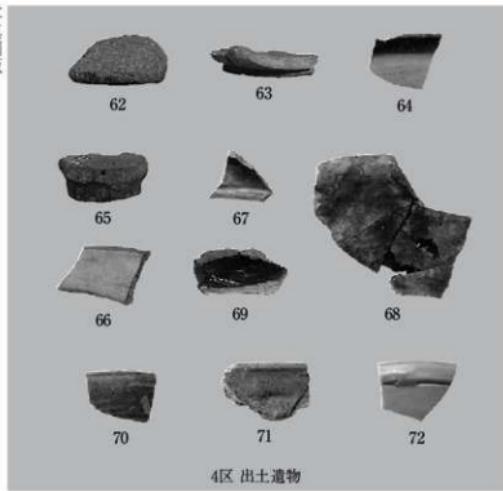
2区 出土遺物



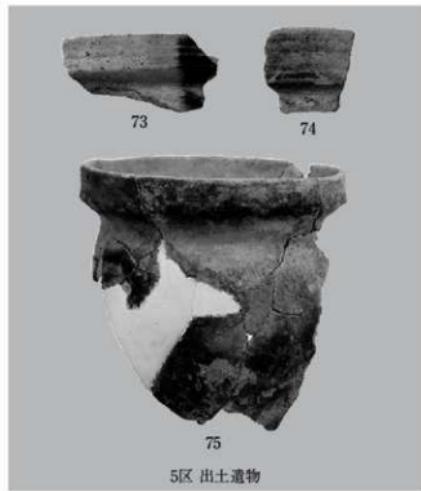
3区 出土遺物 (1)



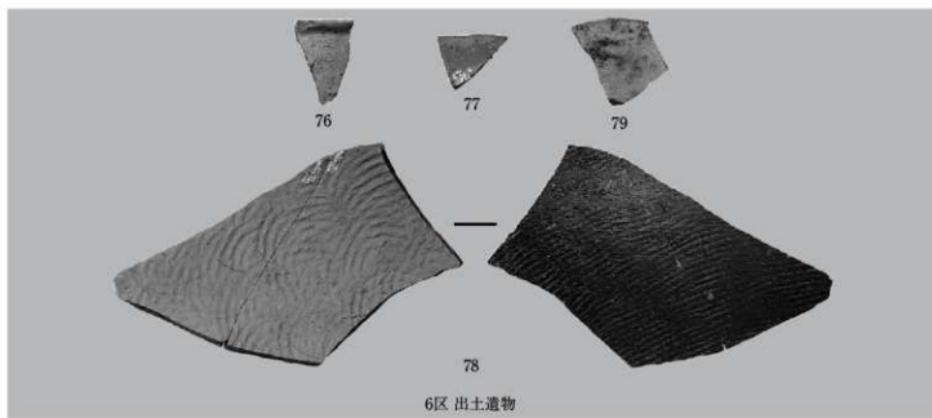
3区 出土遺物 (2)



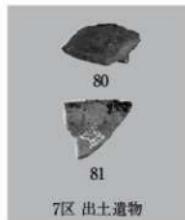
4区 出土遺物



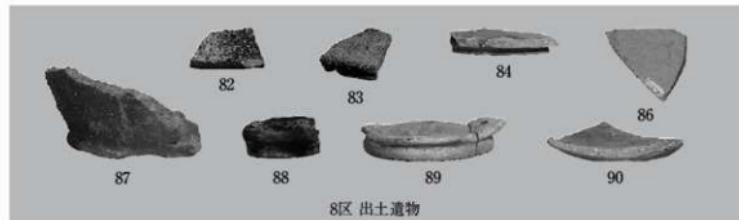
5区 出土遺物



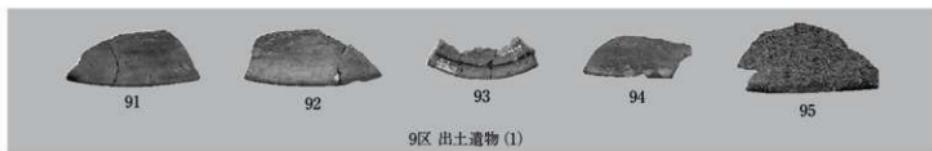
6区 出土遺物



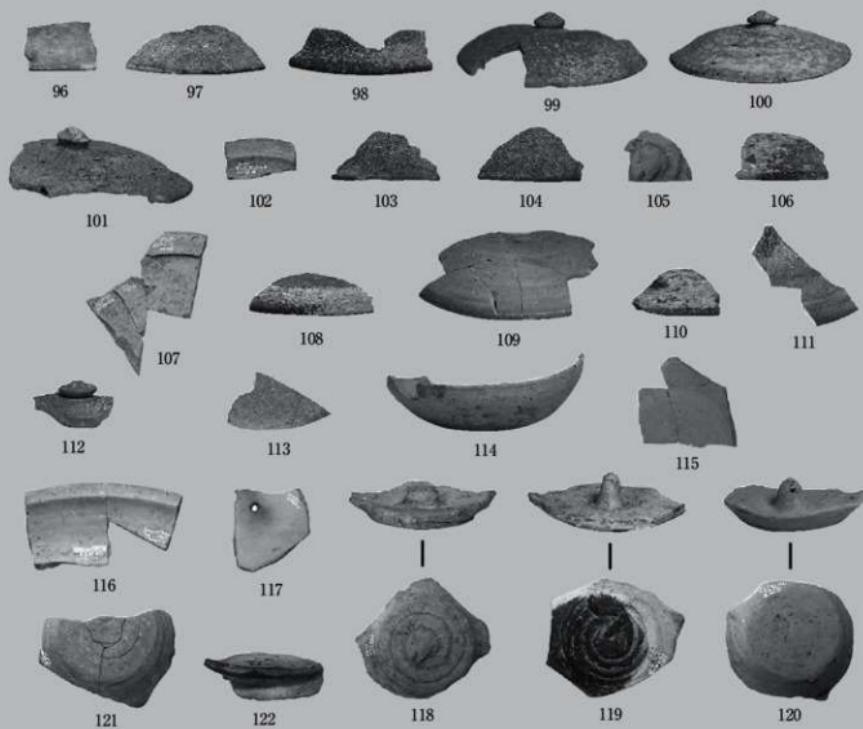
7区 出土遺物



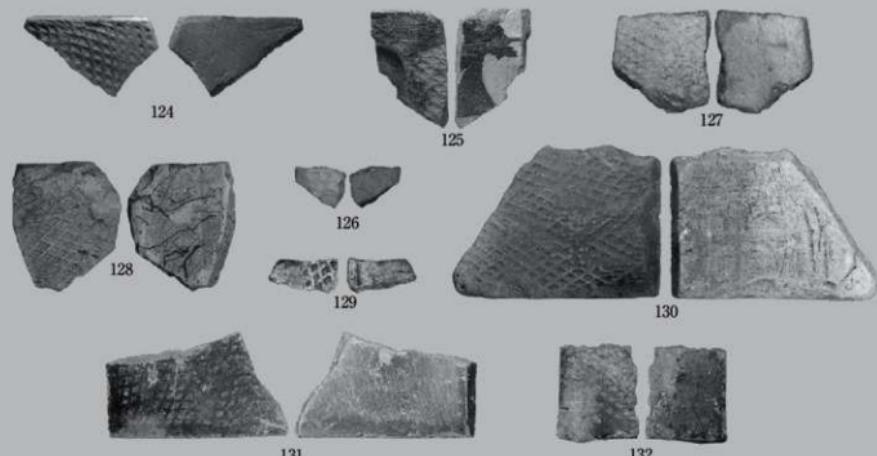
8区 出土遺物



9区 出土遺物 (1)



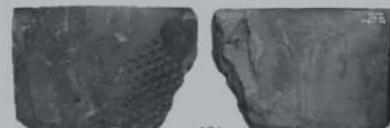
9区 出土遺物 (2)



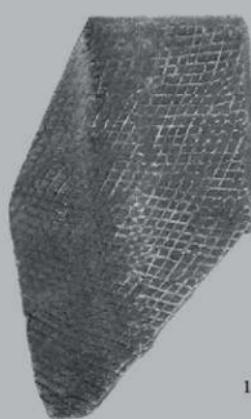
平瓦 (1)



133



134



136



135



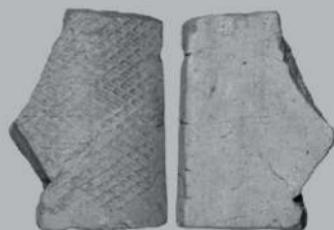
137



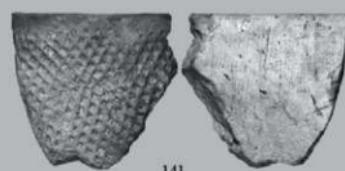
138



139



140

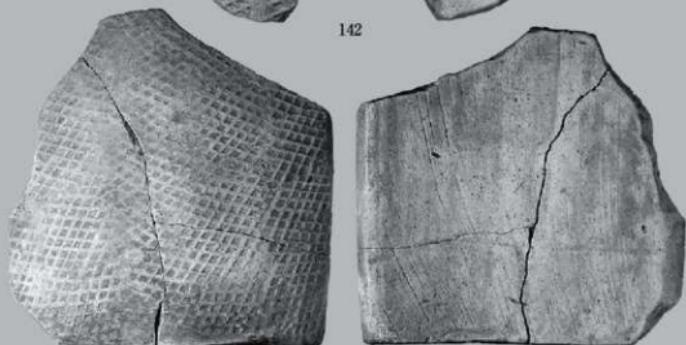


141

平瓦 (2)



142



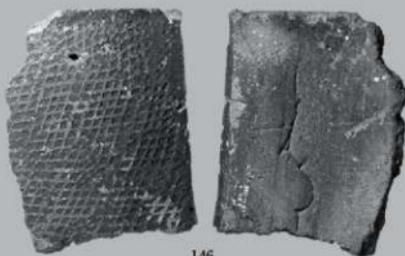
143



144



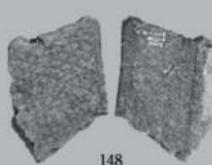
145



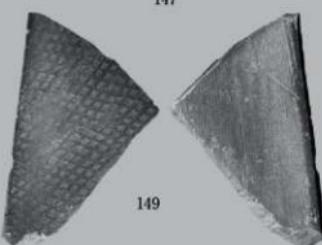
146



147

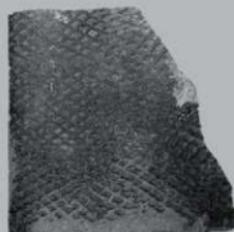


148

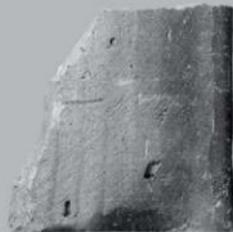


149

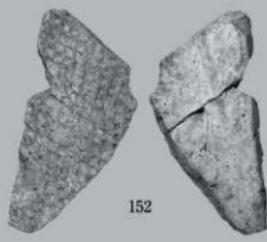
平瓦 (3)



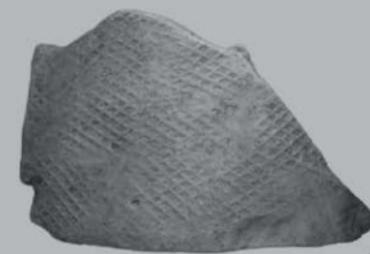
150



151



152



153



154

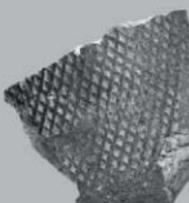
155



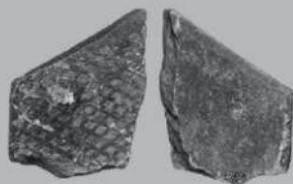
156



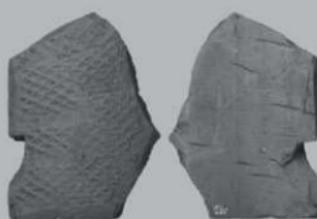
157



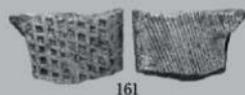
158



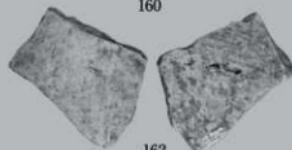
159



160



161



162

平瓦 (5)



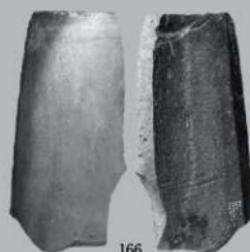
163



164



165



166



167



168

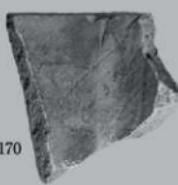


169

丸瓦 (1)



170



171



172



173



174



175



176



177



178

丸瓦(2)



179



180



181



184



185



187

軒丸瓦



188



189



190



191



192



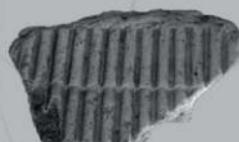
193



194



195



196



197



198



199



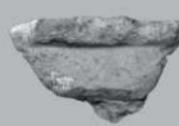
200



201



202



203



204



205



206



207

報告書抄録

ふりがな	しけきすえまつはいじあと					
書名	史跡末松庵寺跡					
編著者名	腰地 季大					
編集機関	野々市市教育委員会					
所在地	〒921-8510 石川県野々市市三納一丁目 1番地 Tel: 076-227-6122					
発行機関	野々市市教育委員会					
発行年月日	西暦 2019年3月15日					
所収遺跡名	所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²
エマツハイジ アト 末松庵寺跡	イシカワケン エノイチシ 石川県野々市市 エマツニナガメ 末松二丁目	172120	16013	36° 30' 29°	第3次 2014年9月10日～12月 1日 第4次 2015年6月15日～12月28日 第5次 2016年6月 1日～12月21日 第6次 2017年5月29日～12月18日 第7次 2018年6月29日～11月22日	167 281 230 220 117
種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	
社寺	古代・中世	竪穴建物、掘立柱建物、 柵列、土坑			瓦、須恵器、土師器、 綠釉陶器、瓦塔	

要約

史跡再整備に伴う発掘調査。竪穴建物については7世紀後半に寺院を建立する時期のものであり、「青空型住居」の一種であることから移民集団が建立にかかわったことをうかがわせる。また中門の可能性のある柱穴列や東西を区画する柵列など、8世紀代に再建された時期の区画施設の様相が明らかになった。遺物では他に例のない女性像を線刻した瓦塔が出土しており、瓦塔信仰について新たな知見を得ることが出来た。

2019年3月15日 発行

末松庵寺跡発掘調査報告書

著作権所有 石川県野々市市三納一丁目 1番地

発行者 野々市市教育委員会

印刷者 石川県野々市市矢作三丁目 18
高桑美術印刷株式会社